

悠遊

第二十四号



企業OBペンクラブ

ペン・フォト句（前編）

春の陽に 私を運ぶ 風を待つ



下山 健夫

胸張って 黙ってオレに
について来い



平尾 富男

色街を

茶羽織でゆく ダンディズム



中村 晃也

どのツラ下げて
さて今宵 帰るやら



三 春

白鳥が 黒鳥となる 夜明け時



松田 昌康

爆買いも バブルの沙汰も
みんな見た



矢澤 正二

悠遊

第二十四号

企業OBペンクラブ

表紙の絵 「福島の花見山公園」

山縣 正靖

日本の桃源郷とうたわれる福島の花見山公園です。福島は花の国、花卉農家が多いのですが、その中の花咲爺さんがご自分の持ち山に年々10本、20本と桜の樹を植えているうちに近隣の皆さんが賛同して花樹を植え、とうとう桃源郷を創ってしまった。満開の頃にはまさに花吹雪、吹き上がる花びらで遠くの吾妻連峰が霞むほどです。

目 次

II 自由テーマ

- ▽資本主義から「人本主義」へ……………鳥海潤博
 ▽混迷と迷路……………大泉和夫
 ▽天皇のご退位……………新山章一郎
 ▽北朝鮮の脅威にどう対応するのか……………玉山浩三
 ▽心に残る言葉……………野上浩三
 ▽日米地位協定に思う……………杉浦右藏
 ▽アメリカはどういう国か……………田原和夫
 ▽拙著『悪徳の世界史』から……………浅井壯一郎
 ▽人工知能時代の社会……………野瀬隆平
 ▽A I、B I、そして H I……………市川忠夫
 ▽ADSL問題……………新田由紀子
 ▽シェガーボードがやつてくる「バナマからハバナへ」……………細谷博
 ▽『ライガロ』の結婚 ワイーン国立歌劇場日本公演……………川口ひろ子
 ▽ヴィオラの魅力……………藤原道夫
 ▽ヴァイオリン……………下山健夫
 ▽「リリー・マルレーン」を追いかけた男……………松谷隆
 ▽『ゴジラ』『シン・ゴジラ』考……………大越浩平
 ▽ディープ・スロート……………平尾晃也
 ▽マドンナのカレンダー……………中村富男
 ▽二上達也先生を偲ぶ……………鶴飼宏
 ▽ノンフィクション「クーデターと坊主頭」……………大西直哉
 ▽ノンフィクション「クーデターと坊主頭」……………大西直哉
 ▽ザ・ブック……………新井晃也
 ▽カッパドキアの遺跡……………阿部良侑
 ▽狐と獅子……………松浦俊博

▽卷頭言……………	大越浩平
▽二つのオリンピックの時代……………稻宮健一	6
▽五輪の原点……………首藤静夫	8
▽オリンピックに背を向けて……………大野信隆	10
▽アベーを見た、あれから五十年……………富岡喜久雄	12
▽二つのオリンピック……………上田昌利	14
▽東風よ吹け！ 二度目の五輪……………森田晃司	16
▽空路の聖火リレー……………都甲昌利	18
▽父娘それぞれのマラソン道……………内田満夫	20
▽二つの東京五輪の間に……………志村良知	22
II 特集 II 私のソウルフード	
▽サケ(鮭)は魚の王者……………大月和彦	26
▽ふるさとの味～琵琶湖の食文化～……………西川武彦	28
▽我が家の定番ご馳走……………岩崎洋一郎	30
▽「チヤンポン」と「握り寿司」……………池田隆	32
▽焼き餅……………安藤晃二	34
▽糠床入り煮……………児玉寛嗣	36
▽私のソウルシェフ……………塚田征雄	38
▽ふくいの味……………齊藤40	44

△孫が幼稚園の後輩になる.....上原 利夫

△母の一生.....浜口須美子

△わがヘモグロビン戦記.....山縣 正靖

△妻ががんになった.....矢澤 正二

△がんの正体.....廣澤 重穂

△福岡今昔.....大平 忠

△銀鼠の海.....浜田 道雄

△さよなら 二つの母校.....木村 敏美

△小学校時代.....濱田 優

△古傷五十年.....原田 信

△祖父母のふるさとへ.....福本多佳子

△家裏刀剣五種.....羽田 壽夫

△次に書きたいもの.....高橋 孝蔵

△勝負の綾.....皆川 和徳

△臨死体験.....松田 昌康

II 活動報告 II

△何でも書こう会

△サロン21

△掌編小説勉強会

△講演会をふりかえって

△ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞

△二〇一六年「ペン川柳」勉強会の成果

△ペン・フォト句会

△英語を読もう会

△ホームページ関連

△企業OBペンクラブ本年の歩み

△企業OBペンクラブの紹介

△会員名簿

△編集後記

II 創作短編 II

△【小説】カジノ談義.....清水 清水

△十三通目の手紙.....内藤 春勝

△かぐや姫のその後.....馬場 真寿美

△きみを守りたい.....馬場 真寿美

表紙制作
表紙の絵
カット

福本多佳子

山縣 正靖

安藤 晃二

塚田 實

木村 野瀬

山縣 正靖

敏美

隆平

首藤 静夫

平尾 富男

(五十音順)

孫たちの貧困

それまでは貧困率を把握していませんでした。

我々「七〇歳」世代老人の子供達は、殆どが四〇歳を

超え、その子供達の子供が若者の主流で、孫です。その孫達で一七歳以下の子供達六人に一人が、貧困に苦しんでいるといわれています。

信じられないという方は多いでしょう。我々世代の貧困とは、食べ物が無い、住居が無い、衣服が無いといった生死に係る絶対的貧困をイメージしますが、現代の貧困はそうではありません。例えば、スマホを持てない子供、修学旅行にお金がなくて参加できない子供は、貧困の範疇に入ります。スマホは中学生や高校生のコミュニケーションやバイトの選択に不可欠なものだからです。

これらを貧困というのに違和感がある方も多いでしょう。ここでいう貧困とは、赤ん坊や、幼児、少年達が普通に生き、社会生活をするための「必要」な条件や状態を欠く事、それらの貧困、相対的貧困を指します。

会長 大越 浩平

政府は三世代同居政策を進め、家族で家庭を守ろうと

していますが、核家族が増え、父子家庭、母子家庭の現状を見るととても覚束ないものです。

今の社会の仕組みでは、貧困は連鎖し続けます。喫緊の課題は、子供達を貧困の連鎖から抜け出させる仕組み作りでしょう。それには教育です、子供たちは自力では進学出来ません。しっかりと教育を受けられる環境を整備し、就職のスタートラインを同じにすることです。

貧困の子供達に「自己責任」とか「努力が足らない」という、上から目線の物言いは事の本質を見失います。

さて、これからは、老人の貧困が深刻になります。

政府は二〇〇九年、相対的貧困率を公表しましたが、

特集 二つの東京オリンピック



二つのオリンピックの時代

稻 宮 健一

「お馬の親子はなかよしよし」。童謡に合わせて同級

生と輪になり踊つた。昭和十九年(44)、小学一年の運動会の一場面である。家に帰ると、「皆の中で健坊のいる所はすぐわかる、手を上げるところで、少し遅れて一人だけ手が上がるから」といわれた。生まれつきド近眼だった私は、動作が鈍くスポーツは苦手だった。

それにも拘わらず、戦後、茶の間のラジオで米西海岸から叫ぶように実況放送された古橋、橋爪の力泳の様子に熱狂した。フジヤマの飛び魚、一五〇〇m、十五分の奮闘は、少し前の新聞の写真を頭に浮かべながら聞き、今瞬間に伍していく日本人がいるのだと興奮した。二人の頑張りでこれだけ皆が湧くのだから、体力の限界に挑むスポーツが訴える力は大きい。

束で実現するかもしれない。世界が注視する中で顕彰される機会がくる。選手がここに目標設定し研鑽するのは当然だ。その雰囲気を汲んで、国は戦後の復興を世界に披露しようと、オリンピックを口実に高速道路や、新幹線を実現して国の装いを晴れがましく飾つた。

いざ蓋を開けると、思った通り、バレーボールの大松監督に率いられた東洋の魔女は血の滲むようなハードトレーニングで身に着けた回転レシーブなどを駆使し金メダルを獲得した。その他、柔道、レスリングなど技が決め手となる種目で多くのメダルに輝いた。メダルの数が総てではないが、一通りの成果があげられた。

しかし、オリンピックの中心はあくまでもメインスタジアムで繰り広げられる、走る、飛ぶ、投げるの陸上競技だ。何とか花形のマラソンで円谷が三位に入り、競技場に国旗が掲げられ開催国の面目を保てたが、他は世界の標準に届かなかつた。世界記録と日本記録の体力の差が白日のもとに晒された。64年東京が競技と同時に一番世界中に訴えたかったのは戦後の日本が立派に復興した

64年東京オリンピック、今度は古橋と橋爪級の奮闘が

姿を披露することだった。それは達成できた。

その後、アジアでは88年ソウル、08年北京で開催された。

両方とも64年東京と同じ趣旨で、かの地が植民地支配から脱却でき、経済の自立を達成して、世界の国々と肩を並べられたことを示すのが目標だった。両方ともその成果を世界に披露できた。64年東京から十三回のオリンピックがあり、競技者の世代交代があった。この間、世界に向けて挑戦し、鍛え、喜びと涙が数え切れないほどあった。今の若い世代は戦後のしがらみなど持っていない。思い切り羽を伸ばせ。

そして、再び五六六年ぶりに東京で開催する機会が舞い降りてきた。2020東京は成熟社会が世界中の人々をご招待する雰囲気だ。派手なパフォーマンスは必要ない。余計な公共事業などもいらない。隈研吾の設計になる緑と木のメインスタジアムは緑の大國の象徴であり、次世代の若者が集う場所に適している。緑の循環を象徴し、

持続可能な社会の到来を待望する姿だ。開会式で、手品のような奇をしてらうパフォーマンスはいらない。

競技場の主役はあくまでも競技者だ。今までより少し国際色豊かな日本人もいるが、ようやく世界の強豪と比較しても決して劣らない体格を持つ競技者が出来始めた。新しいスタジアムで百m、十秒を破ってぶつ飛ばしてもいい。山縣、桐生、ケンブリッジ、四〇〇mリレーで工夫した頭脳的手段はまねされる。また、短距離の福島。基本は体力の養成、そして弛まない訓練だ。競泳の萩野、瀬戸、入江、池江など頼もしい若人に期待したい。勿論、特技を生かす柔道、20年には空手も加わる。人間の限界に挑む姿を楽しもう。もう国の威信を示す演出は不要だ。それを必要とする途上国が手を挙げるなら、過去を手本にすれば良い、2020東京はこれから文化行事の先駆けになつたら良い。競技者に一番やりやすい環境を整え、終了後のレガシーなどなくとも良い。簡素だが、緑に囲まれ、「もつたいない」のない大会を期待したい。

五輪の原点

首藤 静夫

式ホテルの不足に悩まされたそうだ。ニューオータニの回転ラウンジのついた高層ホテルが空貫工事で建設された。このくだりはNHKの「プロジェクトX」に詳しいが、この番組も時代の彼方へ去った。

前回の東京五輪は地方の高校一年生の時だった。テレビの普及に大きな貢献をした五輪、わが家にもあつたと思うのだがテレビで観戦した記憶がない。大部分が市川崑監督の記録映画だった。

快晴の空と五輪の輪。シンプルで清潔な開会式。リラックスした外国選手の中で晴れがましくも緊張気味の日本選手団。

名花チャスラフスカ、余裕のアベベに苦走の円谷、名前も体形も砲丸のような(?)タマラ・プレス、棒高跳びのハンセンとラインハルトの激闘、鬼の大松と日紡バレーチ、神永とヘーシンク……。総天然色で芸術性豊かな映像は地方の少年には息をのむシーンの連続だった。日ごろ見慣れていない競技への関心や世界一流選手の活躍に素直な驚きと感動を覚えたものだ。

諸々のインフラが急ピッチで整備された。東京でも洋

五輪をテコに日本経済の躍進が始まる。その後の日本は、エコノミックアーマルと揶揄されながらも懸命に働き、世界に乗り出していった。五輪は戦後の復興とその後の経済発展をつなぐ絶妙のタイミングだった。

しかし、東京五輪は欧米以外で初めての開催という名誉のほかにその後の五輪が変質していく転換点でもあった。欧米の各都市を持ち回りで巡るこじんまりした大会から一転、五輪は経済成長や国威発揚など政治色の強いスタイルに変わっていく。本来は選手個人の参加と名誉で済むはずの五輪に國家が強く関わるようになつた。それに伴い、テロ事件や大会ボイコット、国ぐるみのドーピング違反など、生臭い五輪へと変質する。

IOCの商業主義がこれに拍車をかける。

最大スポンサーの米国企業への配慮から、開催時期を

夏季の休暇に合わせ、人気種目の決勝は米国のゴールデンタイムだ。その結果、次回は暑熱の東京でマラソンを行った。選手への配慮は二の次だ。

誘致側の打算や欲望が目立つ。本来、開催国の経済発展や国威発揚は五輪と無縁のはずだ。アマチュアズボーツの祭典、肉体と精神の調和、平和主義、あらゆる差別の排除といったオリンピズムが崩れている。

マスコミの報道姿勢にも首をかしげたくなる。国別対抗戦のように自国の、それもメダル一辺倒の報道だ。素晴らしい競技、フェアな演技に対して国を越えたエールを送る気持はないのだろうか。

最近、日本を訪れる外国人が急増しているが、その動機が変化しつつある。豊かになり便利になった日本を見たいのではない。日本の素顔、普段の暮らしぶりを見たいのだ。東日本大震災の折の被災者の秩序や協調ぶりに感動し、かくあらしめる日本人の原点を見たいのだと思う。競争と対立に疲れた神経を日本で癒したいのだろう、

五輪を変えられる
う。五輪のふ
本をおいてないと



過疎の地に足を運び、ホームステイする外国人もいる。

次の五輪、前回の二番煎じはやめ、日本人の国民性や生活スタイルを自然に近い形で見てもらうのがいいと思う。派手なパフォーマンスはわが国に似合わない。奇をしてらうサプライズも必要ない。選手中心の大会運営に徹し、終わつたあとに何となく良かつたと選手も観客も感じられるようなスマートな五輪であつて欲しい。世界のどこを見わたしても今の日本ほど平和で穩やかな国はない。その一方、かつての輝くばかり健康で元気な国とは言えないし、日本の抱える問題もたくさんある。それでも、かく老成した姿は今後の世界に良きお手本になるだろう。

オリンピックに背を向けて

大野 昕

にならないから。

私がオリンピックに対し覚めた目で見ることはできるのはなぜなのか。オリンピックとの出会いは一九六〇年のローマでした。勿論観客としてです。

二〇二〇年のオリンピック会場の選定の模様を見ていると、日本という国の税金は使い放題という体質を見せつけられて嫌になります。

僅かに小池新知事が会場を変更して経費を削減する案を提案したのですが、自民党、オリンピック組織委員会、土建屋の連合軍に潰されてしまいました。友人の言うには「予算が減った点は評価する」とのことでした。

私の率直な感想は、戦後七〇年末だに東京都内の通勤は満員電車に苦しめられています。この現象について若い人から苦情が出ないのはどうしてでしょうか。

「オリンピックをやるお金があれば先ず満員電車の解消を」と訴えたい気持ちです。日本の政治家は熊や猪しか通らない道を田舎には作つても、本当に日本のために外貨を稼いでいる東京のサラリーマンが未だに満員電車に悩まされている事実には目を瞑っています。自分の票

でも思い出に残るのは、水泳の四百メートル自由形決勝でのマリー・ローズと山中の一騎打ちです。会場は空席が目立ちました。当時のイタリア人は日本人のようにオリンピックで馬鹿騒ぎはしませんでした。

それから四年後の一九六四年の東京オリンピックの年には東京に戻っていました。ただ競技は一つも見ていません。オリンピックはローマで卒業です。ただ一つの思い出は当時のチエコ・スロヴァキアにプラントを売り込んでいた関係からボヘミアのカット・グラスの会社のパーティに招かれ、至近距離で体操のチャスラフスカを見ることができたことです。本当に美人でした。

それ以降年を経るごとにオリンピックは派手になり、金儲けの手段になつていきました。昨年のブラジルでは少しばレーキがかかつたかと思ったのですが、日本の政治家の派手な金の使い方を見るとガッカリします。

オリンピックの経済効果ということが盛んに新聞などで報じられています。今の日本に経済の成長が本当に必要なのか。人口が減ることの意味が経済学者にも分かっていないのではないでしょうか。

最近偶然『福島が日本を超える日』という本を読む機会がありました。この本は『生業訴訟』の裁判の原告を対象にして実施された講演会の記録です。少し説明が必要です。『生業を返せ、地域を返せ！』福島原発訴訟』が正式な名称の裁判です。

ご存知のように裁判を傍聴できる人数は限られています。そこで原告の方々のためにこの裁判を応援している有名人が駆けつけて裁判の間他の会場で講演をするという企画を、かもがわ出版が考えました。

その講師の中には私が一番まともなことを言っている常識人と思う浜矩子、藻谷浩介、内田樹という諸先生が含まれていました。各人各様にその発言は面白いものでしたら、中でも内田樹さんの意見が目を引きました。

内田さんは現在の状況を、戦後七十年の体制への不安、不満が安倍政権を支えているとの意見で、アベノミクス

によつて実際には何も良くなつていなことを国民は知つてゐるのに安倍政権を支持している。日本の近代史では、徳川幕府の制度疲労に対する明治維新、薩長体制に対する不満が軍部を駆り立てた太平洋戦争による敗戦、そして今回の戦後体制の疲労。どの現象にも共通しているのは急スピードで破滅に突つ走つたことです。

更に日本だけでなくヴィクトリア朝以来のパックス・ブリタニカを第二次大戦後引き継いだパックス・アメリカにも制度疲労が明らかとなり、トランプが「米国の利益を最優先」をモットーに新大統領に就任しました。内田さんは「今我々がやるべきことは対案を出すことよりもストップして冷静に周りを見回すこと」を提案されています。議事法では「議論を終結させない動議」は「動議を終結させる動議」より優先されるからです。

東京オリンピック2020に議論を戻すと、ここでもいたずらに経済効果などとありもしない成長論をぶつよりも前代未聞の主催者辞退という奇策で世の中に冷や水を浴びせてみては如何でしょうか。

アベベを見た、あれから五十年

富岡 喜久雄

昭和三十九年、アジアで初のオリンピックが東京で開

催された。その一年前に勤務先の会社が千駄ヶ谷に新社屋を建て、社屋前がマラソン競技の走路になつた。

だから社屋の窓からエチオピアのアベベの走るのが見えた。彼は他の走者が苦しそうに顔をゆがめて走るのを尻目に、黒い修行僧のような雰囲気で軽々と走つていた。

思い起こせばあの頃の日本は戦後の廃墟の中から復興し、高度成長期に差し掛かっていた頃だろうか。首都高速道路に新幹線、斬新なデザインの体育館等が建設され、これらの財政投資が景気を、そして人々の気分をも高揚させていた。あれから半世紀以上が経過し、日本も世界も人々も、そして筆者自身も大いに変わつた。

そこに今度は二回目の東京オリンピックが三年後にやつてくる。然るに自ら手を挙げた東京が、競技場のデザ

インから始まつて混乱が連続し、どうなるのかと危惧していたが、やつと納まるところへ納まつたようである。

今回の騒動には色々批判はあるようだが、都民ならずとも全国民がオリンピックを考え直す良い機会になつたとは思つ。

五十年前のオリンピックの、日本への効用は大きかつた。列島改造に繋がるインフラ整備と企業の設備投資は輸出を増大させ、それを機に右肩上がりの成長軌道に乗つたのは記憶に新しい。給与もボーナスも毎年上がるのがあたりまえに感じられ「欲しがりません、勝つまでは」と抑制されていた庶民の消費欲は爆発し、パリでブランド物を買いあさる日本人観光客が顰蹙を買つたのはあの頃だつただろうか。最近の某国民の爆買いを笑えたものではない。マイカーブームも同様だ。豊富な国内需要を背景に今や世界的メーカーが出現したのもオリンピックの功と言えなくもない。その後ちょっととした振り戻しはあつたものの順調に成長軌道にのつた日本も、巷間言われた「失われた二十年」の苦渋の期間を過ごした。

そこで、そろそろ元氣を出そうじゃないかと、障子破

りの元気さで売り出した元都知事が再びオリンピックを

起爆剤にと思ったか、二度に亘って売り込んだら、「おもてなし」の効果もあって、あの「トウキョウ」の一声でリオの次のオリンピックは東京と決まった。

言い出しつべの元知事は尖閣列島を東京で買うなどと言いだし、オリンピックは猪瀬新知事に、そして升添、小池知事と交代が続き、目まぐるしいバトンタッチだつた。その間国立競技場も設計変更、他の施設も見直しと経費節減のための大騒動は連続した。

何故か？ それは五十年前とは人も社会もそしてオリンピックも変わったにも拘わらず、それを知らずに二匹目のドジヨウを期待したからだろう。

今やオリンピックゲームも商業化し、金食い虫のリスキーな催事となつてしまつた。だから、開催立候補都市が辞退し始めたし、オリンピック委員会も誘致に絡んだリベートの噂で顰蹙を買い、選手もプロ化、ドーピング問題等でスポーツの持つ清廉な気風が失われた。今回の東京開催コンペでも都民の支持率は低く、一度は敗退、二度目の挑戦でも支持率は高くなかったと思う。斯くい

う筆者も、何を今更と思っていた。

そこでスポーツ競技縮小論を提起したい。先ずは各種の世界大会とオリンピックを統合すべきだ。どちらも金牌を出すようだから、世界大会とオリンピックの勝者のどちらが偉いのか分からぬし、同じ競技で勝者がすぐ変わつたら可笑しいではないか。開催期間が違うと言ふならオリンピックを二年毎にすれば良い。

それが気に入らなければオリンピックを廃止して、毎年各競技の世界大会をやればよろしい、どちらかにしてもらいたい。翻つてオリンピック精神は何か、起源はなにか、そしてその趣旨は何かを思い返してみるべきだろう。宗教戦争のごときテロとの戦い、そして近來発生しがちな領土紛争等々を続けながらオリンピック競技で平和を希求するのは矛盾でしよう。筆者は嘗て「サッカーよりラグビーの方が人間的で好きだ」と言つたら後難がありました。今度は筆難が来そうだが、筆者はスポーツ嫌いなのではなく「文武両道」のつもり。要は程度の問題です。異論、反論はいさぎよく受けますが……。
最後はノーサイド精神で行きましょう。

二つのオリンピック

上田 信隆

東京五輪が二〇二〇年に開催と決まった。自分の生きてる間に一度も五輪を体験できることをまず素直に喜びたい。

私達のオリンピックと言えば、あの東京オリンピックが思いだされる。十月の快晴のもとで選手団が行進して入場してきたことを鮮明に思い出す。高度成長の気配が私達を同時に後押ししていたと思う。新幹線が走り高速道路が伸びて先進国の中間入りを肌で感じていた。私達はあの時、限りない成長を信じていたのではないかと思う。目標を一つに集約した時、人は一致団結することは確かだ。ともかく前回の東京五輪は大成功であったと思う。

しかるに二〇二〇年のオリンピックはどうなることであろうか。この問題に二つの不安を私は感じている。一つは東京都の「都民ファースト」といった五輪への横やりである。私はスポーツの祭典は、とにかく皆さんが喜んで参加することに一番の意義を見出している。政治のムードや個人的といえるアピールは本来五輪などに持ちはみたくないものと思っている。良否については色々あるのは承知しているが、出来れば気持ちよく開催したいものだと思う。国際的にも注目されているから糺余曲折はあるとしても五輪は成功させなくてはいけない。その評価は五輪が終わった時点で皆さんのが感じることではないかと考えている。

あと一つの不安は、たとえ東京五輪に向かつて選手たちを強化しても、果たしてリオ・オリンピックのような成果がえられるのかとの不安である。リオ・オリンピックに於いては正直、私などはあまり期待をしていなかつたが、柔道やレスリング、水泳などについては概ねの結果は出せたと思う。最大の驚きは男子陸上の四百メートルのリレーである。この競技での銀メダルは奇跡に近いと思ってならない。二〇二〇年の東京五輪では当然他国は上位をねらって参加するに違いない。その時に今までの延長で成果を勝ち取るのは至難の業と思えてならない。

無論立派な成果は期待しているが……。

こうしてみるとイベントを迎える心がけについては、全員参加と納得のコンセプト作りと、結果について過度の期待をしないことだと思う。物事を成就させるのは、何事もその本質にそつて行動することではないか。成果は自ずからついて来るものであり、奇を衒つたり、ましてや個人を必要以上にアピールするのは、えてして結果を伴わないことが多い。

いつの時代も現状に不満をもつ人はいる。さりとて一気に体制を変えるのはリスクとりバウンドを伴う。一喜一憂せずに、一つ一つ判断することが大切だと思う。世界的に見て非常に不安定な時代になつたと思う。英国のEUからの離脱、米国のトランプ政権の出現、変わらぬ難民の排出など世界は変動と不安定化しつつある。私達日本人は今こそ世界の情勢のもとで、眞に日本の国益にそつて判断し行動しなくてはならない。大衆に迎合することは後々後悔が伴うことも多い。同時にゆきすぎれば独裁といった評価を受けかねない。そのバランスを取るのは難しいことではあるが、やはり一人一人の熟慮の結

果が、安全な結果をもたらすものだと思つてゐる。一時的な政治的な風やムードでは、その付けを後世に回すことになりはしないかと思う。

次なるオリンピックを成功させるのは、なんといつても一人一人の心構えに依るところ大であると言いたい。

五輪組織委員会は大会成功のために全力を尽くすだろう。選手は日々の練習に励み、私達はその応援を惜しみなく発揮することだと思う。何度も言つて恐縮だが批判は誰でも出来る。大切なことは全員が五輪に参加することだと思う。

自力と他力は宗教的にも意見が分かれるところであるが、国のイベントについては出来るだけ積極的に参加することがよいと思う。『踊る阿呆に見る阿呆、どうせ阿呆なら踊らにや損損』。あとで後悔したところで楽しまなくてはなんにも残らない。

ただお天気だけはこれだけはどうすることも出来ない。ただただ天を仰いでお日様を拝むのみである。

東風よ吹け！ 二度目の五輪

森田 晃司

しがたく、友人と陸上競技場に足を運び、またテレビ観戦に努め、特に棒高跳びの決勝は米独の二選手の死闘が延々九時間に及び、深夜までテレビの前を離れられなかつたことなどを記憶しています。

来年のことを『言うと鬼が笑うそうです。まして三年先のことを言うのは些か憚らますが、小生は昭和二十一年の早生まれ、平均余命から類推すれば、どうやら東京五輪を元気で迎えられることになりそうです。二つの東京五輪を目の当たりに出来る幸せな世代です。

古来、残念ながら、戦争が絶えないのが人間の社会の宿弊です。しかし、古代のオリンピックはギリシャの都市国家間で戦争が行われていても、休戦をして競技を行つた平和の祭典とも伝えられています。

近代オリンピックも世界の強者が一堂に会して競技す

ることで、グローバリズムを称賛する場であるとともに、戦争を行わずにナショナリズムを発散させ、国威を発揚する効用を担つてているとも言えます。

しかし、半世紀余りを経てその内容は大きく変容しました。かつてはアマチュアの祭典だったものが、現在ではすっかりプロの競技者の大会になつています。大会の運営自体が商業主義に大きく傾き、種々の弊害も出てきています。ドーピング、不正の横行などでフェアプレーの精神は色褪せていました。

オリンピックは参加することに意義があるのか、はたまた、策を弄しても勝たねばならぬのか、難しい問題ですが、フェアプレーへの郷愁は禁じえないものがあります。

前回の東京五輪では、私は受験生でのんびり観戦していられる身分ではなかつたのですが、五輪の魅力には抗

日本を取り巻く環境もまた大きく変化しました。前回

の東京五輪は、敗戦の荒廃から立ち上がった日本が高度経済成長を遂げ、国際社会への復帰を宣言する大会でした。それから半世紀を経て、現在の日本は国際社会では揺るぎない存在に成長し、安倍首相はG7をリードするまでの存在感を見せていました。昨年の伊勢志摩サミットでは、G7の首脳が揃って伊勢神宮を訪れました。敗戦直後には日本の軍国主義の象徴としてやり玉に挙がっていました。神道がその本質を少しずつ各国に理解され始めています。

世界の情勢も大きく変化しました。東西冷戦から米国の一強支配を経て多極化へ向かい、共産主義のイデオロギーは後退して、代わってグローバリズムが世界の潮流となりました。しかし、昨年はその潮流が大いに乱れて、英国のEU離脱、トランプ米国大統領の誕生とナショナリズムに回帰するきづかけの年となりました。このうねりは二〇二〇年に向けて更に高まる予感が致します。

オリンピック、ノーベル賞、国連は欧米による世界支配の象徴であり、その成否に一喜一憂するなどは愚の骨

頂との批判も聞こえできます。誠に正論だと思います。とはいって、世界中の耳目が集中する、またとない絶好の発信の場であることも確かです。

日本は極東の国と云われます。世界の中心が西欧につたからです。しかし、地球は丸いのです。いつも西風が吹いているわけでもありません。東の国から東風に乗せて、東の国ならではの貴い文化を発信いたしましょう。

今回の五輪の新しい主会場は、当初の国籍不明のデザインから、隈研吾氏のデザインによる日本の伝統様式を取り入れた木造建築となります。和を尊び、自然を愛し、棲み分けを重んじてきた日本の歴史と伝統文化が現代科学と融合して生み出す限りない可能性を世界に伝えたいものです。

前回は日本の国際社会への復帰のお披露目の場でした。半世紀余りを経た今回は、各固有の歴史、伝統の重さと大切さを訴えると共に、未来への果てしない可能性の追求に、日本の果たすべき役割と覚悟を披瀝する場としたいものです。

空路の聖火リレー

都 甲 昌 利

一九四〇年東京でアジア初となるオリンピックが開催される予定だった。欧米諸国は日本が米国との戦争を画策していると非難して一斉に不参加の態度を示し、行われなかつた。また、日本は戦争準備のため軍備拡張の見地から鉄の需要が増えてオリンピックスタジアムの建設は不可能だつたという事情があつた。結局は幻のオリンピックとなつた。

一九四五年日本は戦争に負けて国土が疲弊したが、日本人の勤勉さと米国の援助によつて目覚ましい復興を遂げ、二十年後にオリンピックを開催できる実力を付けるようになるまで復興した。そしていよいよその機会がやつてきた。

空自衛隊ブルーインパルスのジェット機が五輪の輪を鮮やかに描いていた。東京の国立競技場で行われた聖火台の点火式、マラソンのアベベ、体操のチャスラフスカなど今でも鮮明に覚えている。これがアジアで初めてのオリ匹クだということを初めて知つた。オリ匹クはそれほど欧米的なものであつたのだ。

オリンピック開催の四年前、日本航空に入社し、オリンピックの年に配属された広報室ではアテネから日航機で空路運ばれてくる聖火リレーの情報を逐次プレスに提供するのが私の仕事だつた。ギリシャから日本まではイスタンブール、ペイルート、テヘラン、ラホール、ニューデリー、ラグーン、バンコック、クアラルンプール、マニラ、ホンコン、台北と十一の中継地を経て沖縄まで運ばれてきた。

使用機材はダグラスDC-6B型プロペラ機で「シティ・オブ・トウキョウ」。DC-6B機には日本の都市の名前を付けていた。「シティ・オブ・オオサカ」、「シ

一九六四年（昭和三十九年）十月、日本で初めてオリンピックが開催された。その日は秋晴れで青い空には航

ティー・オブ・ナゴヤ」など。すでにDC-8型ジェットが導入されていたが、太平洋路線などに主力機として運行されており、稼ぎ頭だったDC-6B型機が選ばれた。また、途中の経由地での空港の滑走路がジェット機の離着陸にはじゅうぶんな長さではないことなどもあつた。

当時政府としては聖火の運搬には純国産機のYS-11を使用すべきという意見があつた。しかし、一機チャーターレートが一億円という巨額になり聖火を運ぶには予備機も必要で、そんな高い料金は日航では払えない。日航機を使つた場合は約三千万円ですむという試算が出て最終的に日航機になつた。

聖火は座席を九席取り外し安置場所を設置したもので、トーチが決して消えることのないよう、専門家が細心の注意を払い作成した。安全のため二基作つた。

マニラまで順調に運ばれた聖火は香港でトラブル。大型の台風十七号に見舞われたのだ。聖火を搭載した日航機は駐機エリアで強風を受け尾翼を損傷し飛行不能とな

った。格納庫に入れれば問題なかつたが、格納庫はBOAC機で満杯の状態であつた。英國としては自国機を優先するのは当たり前である。急遽日本から救援機コンベア880ジェット機を派遣し、積み替えを行い無事最終地、沖縄に到着した。

ここから日本各地への聖火リレーは全日空が担当した。

さて、二〇二〇年の聖火リレーはどうなるのか。ナショナルキャリアーを自認する全日空が運ぶのか、或いは伝統と経験がある日航が任を担うのか議論が分かれる。アテネからニューヨークまで、そこから沖縄までと分けれるか、一本化するのか、いずれにしてもIOC、JOC、政府が決めるだろう。

航空機は国産初のジェット旅客機、三菱航空機のMRJが使われるだらう、また、使ってほしい。二〇一七年に実用化が可能だというし、二〇二〇年のオリンピックには間に合う。

父娘それぞれのマラソン道

内田　満夫

先の東京五輪は、私がマラソンにのめり込みはじめた時期だ。今度の東京五輪では、私の娘がマラソンの日本代表になる、はずである。

運動全般が苦手で、徒競走ではいつもビリ争いをしていた。そんな私が、あるきっかけから自分に持久力のあることに目覚め、大学進学と同時に長距離走の道に入る。オリンピック選手を頂点とする競技者群のはしくれだったので、先の五輪のマラソンレースは他人ごとではなかつた。仲間とともに学生食堂のテレビにかじりついて、必死になつて応援していたことを思い出す。ローマ大会に続いてアベベが独走の二連勝。二位で競技場に入つてきた田中が、あとわずかのところで英國のヒートリーにかわされる瞬間に上がつた、満場の観衆の悲鳴は今も耳にこびりついて離れない。

学生時代に四十二キロの距離を踏むことはなかつたが、

神戸で社会人生活を始めて三年目に、私にもマラソン初参加のチャンスが訪れた。西京極陸上競技場発着の京都マラソン（旧）である。第一回大会ということで参加に記録制限のないことが幸いした。しかしゴールの関門が、私は厳しい三時間〇〇分。この大会には、先の五輪で円谷に次ぎ四位に入った英國のキルビーが招待選手として来日、出場していた。

私のレベルでは、目標はもちろん制限時間内の完走である。練習では三十キロ走を一度走つて備えるのが精一杯で、十キロ強の未体験距離を残したまま本番を迎えた。果たして、話に聞いていた三十キロを過ぎてからの苦痛と、大幅なペースダウンに見舞われる。何とか耐えて二時間五十分前後でゴールした。百二十七名の出走で完走が六十五名。夢にまで見たマラソンの完走を遂に実現し、天にも昇る気持ちだった。テレビ放映される憧れのエリートマラソン参加が、あと一步で手の届くところにまできたのだ。

今では誰もが抵抗なくマラソン参加を楽しむ時代になつたが、当時は身近の人間が四十二キロを完走したとい

うだけで、ちょっとしたニュースである。職場の周囲やランニング仲間から、しばらくのあいだ驚きと賞賛の入り混じった声を浴びた。エリートマラソン出場の夢は結果果たせなかつたが、走る習慣は定着して私の生涯の財産となつた。

二年あまり前のことだ。東京で単身生活を送る理系女子の娘から突然連絡があつた。サロマ湖で行われた国内

選考レースで四位に入り、ウルトラマラソン（一〇〇キロ）の日本代表に決まつたと言う。日本陸連から世界選手権に派遣されるという話なので、一瞬耳を疑つた。世界選手権といえば五輪に準ずる大会ではないか。まさかそんなことのあるはずが……。

娘が幼少の頃には、ちびっ子マラソンによく連れ歩いていた。はじめのうちこそ喜んでついてきたが、中学に進むころになると、陸上競技の道をしきりに勧める父親に反発を示し走らなくなつた。だが駅伝シーザンとともに、常に学校代表としてかり出されエース区間を任せていたから走力はあつたのだ。

いつのまにかありえないことが起つていて。四十二キロから一〇〇キロまでの、方々の超長距離レースに参加し上位入賞の常連になつてゐるではないか。さすがわが娘である。しかし走るフォームを診ると、専門の指導を受けないためか体幹がなつておらず、上半身と下半身の動きがバラバラだ。当然四十二キロの距離では、日本トップ級の水準にはほど遠い。もつと早くにこの道に入つていれば、今頃は……。

二〇一四年十一月の本番（カタール・ドーハ）では、本当に日の丸をつけて一〇〇キロを走りぬいてきた。本人個人の成績はいまひとつ振るわなかつたが、団体では日本チームが英国に次いで二位となり、ちゃつかり銀メダルを手に帰国した。父親が並みのランナーで終つているというのに、三十歳近くになつてから二年やそこら走つただけで銀メダリストとは……。

長いマラソン道である。走りにまつわる夢をよく見る。足が前に進まない、追いつけない、置いていかれる……。そんな中、うれしい報せが飛び込んできた。娘が今度の東京五輪のマラソン代表に決まつたらしい。

二つの東京五輪の間に

志村 良知

一九六四年の東京オリンピック。報道写真機材は、三十五ミリカメラが主流となつて十年あまり経つた頃で、一眼レフ、連写用モータードライブ、ストロボフラッシュ、超望遠レンズなどが投入されて大活躍し、カメラ王国日本を搖るぎないものとした。写真の感光材料はハロゲン化銀の銀塩フィルムであった。

競技結果の公式速報は、大型電算機で集計され電子写真製版オフセット印刷システムにより印刷配付された。ともに操作は人海戦術だった。

大陸間の衛星中継放送は始まつたばかりで、ブラウン管カラーテレビが庶民の手に届くものになつたが、液晶ディスプレイは理論の実証実験段階だった。

写真機材はその後も、カメラ側からは軽量化、露出決定の自動化、オートフォーカスの高速・高精度化が、銀塩フィルム側からは高感度化、微粒子化、色再現性、保

存性などの絶え間ない改良が図られた。東京からアトランタまでの三十年間、九回のオリンピックにおいて決定瞬間はより鮮やかに、より印象的に、銀塩フィルムに捉えられた。この間、一九八四年のロサンゼルス大会で、デジタル写真機材が試験的に投入された。その性能は銀塩写真の足元にも寄れるものではなかつたが、速報性だけは注目された。

画像のプリント技術も銀塩写真頼みだった。一九八八年のハレーすい星接近時、欧州連合の観測衛星ジオットが彗星の核のデジタル映像撮影に成功、地球に送つてきた。この映像をその場で紙の写真とする当時唯一の方法は、ブラウン管上の静止画をインスタンクト銀塩写真システムのポラロイドで撮影することだった。

その頃、銀塩写真を使わないカラープリント技術の研究に従事していた私たちは、実用に耐える最低品質のカラーライ画像の情報量は、A4版で一メガバイトと計算していた。これは今日振り返つてみても妥当だと思う。しかし、当時の一メガバイトは高密度八インチ（二十センチ）フロッピーディスク一枚分に相当し、プロ限定だった。そ

の数千倍の情報量を素人が歩きながら手の中で扱う時代が来るとは想像もしていなかつた。

二千年のシドニー大会では報道用撮影機材はデジタル写真が主流になつた。撮影し、画像処理してメディアに載せるシステムとしてのデジタル写真の総合力が、ついに銀塩写真を上回つたのである。時を同じくして液晶テレビがブラウン管テレビを総合力で上回りつつあつた。

二十一世紀最初の年、世界の銀塩写真、フィルムの年間売上が史上最高額を記録した。しかし、翌年からアマチュア用の写真機材とテレビが、既に市場にあるものを含めて根こそぎの規模でデジタルへ置き換えられ始めた。

そして北京を経てロンドン。百年以上オリンピック報道を支えてきたコダック社がこれを最後にスポンサーの座を降りた。フィルムメーカーは軒並み破たんか事業撤退や業種転換を余儀なくされ、電機メーカーのブラウン管工場も次々と閉鎖された。共に長い間製造者に莫大な利益をもたらした花形商品があっけなく消え去つた。

リオデジヤネイロ大会では報道目的としての銀塩写真

は皆無であつたろうし、ブラウン管テレビで見た人もいなかつたであろう。

次回東京大会では日本のＩＴ・電子機器・写真機材メーカーは威信をかけて報道の形を変えようとするだろう。

高精細化、高密度化する撮像素子やレンズ、巧妙化する画像処理技術、これらとA-Iを合体させれば全く新しい報道形態が可能となるであろう。

見る人とA-Iがリアルタイムで対話しながら、最大限の感動が得られる動画と静止画とそれに音響を入れ混ぜてつくるカスタマイズ中継。そんなことも夢ではないかも知れない。



「何でも書こう会」は知的刺激の宝の山だ

この会は、会員七十名前後のうち、時々出席する人も含めて二十数名が常連メンバーだ。

原稿持参が基本だが、なしでもOK。会員は誰でも気軽に参加できる。メンバーは多彩。出稿内容も、経験、奇談珍談、研究成果、埋もれた人材や作品の紹介、紀行文、身辺雑記、時事問題、没後の心配、泣き言、観劇批評等々何でも有りだ。それらを八百字にまとめた文章を発表する。

作品類は、さながら、ごつた煮、雑炊、閨鍋の様相だ。それらの作品を一編ずつ、読者に読みやすく、作者の意見が正しく伝わるよう、句読点や、改行、段落など皆の意見で添削校正する。添削校正されると、本人も驚くほど文章のレベルが上がるのが楽しい。中には校正レベルをもつと上げたほうが良いという意見もあるが、それは執筆者のオリジナリティを欠くことになる、という意見もあり、今はあまり厳しくしていない。

面白くなるのはこれからだ。出席者の学歴、就業時代

の地位や年齢は一切無視、なんの遠慮もなく全員平等に発言し質疑する。質疑でこずるのは、誰も行ったことの無い海外経験の話題だ。書いてあることは本当なのだろうが、誰にも分らない。うんうんとうなずいているだけでは面白くない。

ある時、そこの住民は何を食べているのか等の食事の質問が出た。主食は★★等と答えてると、それは××国の○○に似ていると、△△国にも同じような食事があるとか、突然世界各国の食事事情が本文に関係なく議論の中心となり、参加者の発言が沸騰したりする。議論の中での新しい知識に触れて楽しいが、本文の收拾がつかなくなる。プロマネ泣かせの予想外の展開が面白い。本文の主流の質疑より、本文をカバーする脇役話題が様々な経験を持つ参加者各位の脳髄を刺激し、議論を沸騰させるのだろう。それは、まさに知的刺激だ。

(プロマネ 大越、志村、三春)

特集 私のソウルフード



構成 福本 多佳子

サケ(鮭)は魚の王者

大月 和彦

期の法典、延喜式にもサケを産する国のあるという。アイヌはサケを「神の魚」と呼んで大切にし、頭から尾の先まで利用していた。

生まれ育った海のない信州でも魚は淡水産ではなく海のものだった。鮮魚や近海で獲れる高級魚はまずお目にかかるなかつたが、サケ、ニシン、サンマなど大量に獲れる魚のほか日本海産のスケトウダラ、イワシなどは十分にあつた。

冷凍技術のない時代だから塩蔵か乾燥ものがほとんど。干タラ、身欠きニシン、塩引サケか新巻サケなどの塩干物がご馳走だった。今でもこんがりと焼かれた新巻の切身には目がない。

当時大量に獲れたサケは最も身近な魚だった。サケは魚の王者だと思う。北国の河川で孵化して海に下り、成魚になつて生まれた川に戻つて産卵して生を終える、その一生は神秘的で感動をさそる。無骨な姿態と精悍な面構えも王者の風格といえる。

サケは古くから人々の生活に深く関わってきた。平安

信州では、サケを一番大切な年中行事の大晦日に年取り魚(年越魚)として食べる風習があった。

年末になると塩引を一尾丸ごと買ってきて、魚包丁で頭を落とし、身は家族の数だけ厚く輪切りにする。炭火で焼いたサケの身は焦げ目がつき、にじみ出た塩が白くこびりついていた。年取り料理の中でも抜群の存在感が

あつた。頭と尾は細竹に刺して神棚や火の神、水の神に供えた。サケは民間信仰や口承伝説の中に生きていた。

サケの身はクセがなく様々な食べ方がされている。生

でも焼いても煮てもうまい。内臓など他の部位も捨てるところなく食べられる。最も普通に食べられているのは、新巻や塩引と呼ばれる塩サケだ。内臓を除いて塩水で洗ったサケの口と腹に塩を詰め、さらに身全体に塩をすり込んでから二、三日～三週間寝かせたもの。塩の塊のよ

うな塩サケは保存が効き、季節に関係なく各地で食べられている。適度な塩分を含んだ塩サケはご飯と相性がいい。切り身の塩サケは庶民の食事に欠かせない。

今でも旅館や民宿では海苔、卵とともに朝食の定番メニューだ。コンビニの棚に並ぶおにぎりや幕の内弁当でも定位置を占め、サケの身をほぐしたフレークやふりかけはお茶漬けに欠かせない身近なおかずになっている。

秋になつて、新サケが出回り始めると石狩汁や三平汁など汁物や鍋料理が食卓の主役になる。

サケの頭と大根を味噌と酒粕で味付けした郷土料理

「サケ大根」は、ブリ大根に劣らず絶品だ。

背ワタ、白子、イクラなど身以外の部位を使う凝った料理も多い。なかでも頭部の軟骨を使った氷頭ナマスは珍味中の珍味だ。

越後村上地方には、三面川で獲れるサケを大切にする食文化があり、料理は五十種以上といわれている。代表的なのは独特の方法で作った塩引を寒風に晒して干し上げた「サケの酒びたし」。究極の塩サケ料理だ。

最近は減塩志向が強まり、食べ物全体が塩分控えめになつた。店頭に並ぶサケも甘塩が多くなり「塩引」は死語になりそうだ。塩と結びついた伝統的なサケの食文化は変わりつつある。

元旦の紙面に朝日歌壇選者馬場あきこ氏の「塩引」と題する歌があつた。

塩引を切りて正月 嘘ホラ楽アガきるし

その塩の味わすればせねど

* 嘘樂アガ = 楽しみ笑うこと

ふるさとの味～琵琶湖の食文化～

西川 武彦

けした葭を束ねて製造元に卸すことを主な生業としていた。

筆者は、小学校三年のとき、疎開先の長瀬で終戦を迎えた。食べ物といえば、芋蔓に米粒がちらほら混じった雑炊や乾燥芋、果物代わりの濃い紫色の桑の実などを思い出す。懐かしいとはい、ふるさとの味というには物足らない。

戦争が終わって除隊した父親は、サラリーマンを辞め本家がある滋賀県近江八幡で、湖畔の土地から採れる葭ヨシを卸す商人になつた。各種の簾が主な商品だ。

西川家の葭地は、東京ドームの三十倍の広さと聴いているが、高度成長の最中、かなりの部分は官に買収され、上方の勤め人向けの宅地に化けてしまつた。

父は、刈取り、種分け、出荷、葭焼きなどの季節になると、京都在住の彼の長兄と交替で祖母が守る本家にロングステイし、兼業農家の元小作人を使って作業。種分

夏の休みは東海道線で一日かけて東京から近江八幡に旅し、駅からは黒塗りのハイヤーで送り迎えされた。滞在中は、水遊び、魚釣り、蔵に籠つての読書、あるいは自宅の和船を番頭さんに漕いでもらつた舟遊び等々で、気儘な時間を満喫した。

西川家は、戦前は庄屋であり村長の家柄である。一族からは代々、国会や県会の議員を輩出していた。父の六人兄弟は、何れも中学から大学まで、京都か東京に出ている。県会議長を務め、滋賀銀行の創設などに関わった祖父は新島襄を慕い、同志社の一回生だつた。

祖母は、筆者の肩に辛うじて届くほどの背丈で、和服が似合う切り回しの巧い明治女だったが、朝食はトーストに紅茶というモダンな一面もあつた。

本家からは、西の湖を挟んで安土城址が遙かに霞む。近江八幡駅から本家までの間には、近江兄弟社のヴォーリス記念病院がある。豊臣家の城下町から近江商人の町

に変貌した近江八幡は、八幡堀界隈が朝ドラの舞台に使われる味わい深い町である。本家は、NHK番組「にっぽん水紀行」で紹介されたから、ご覧になつた方がいるかもしない。古いものを愛しながら、進取の気性、見方次第では自由気ままさが、学校選びから会社選びその他、筆者の人生のあちらこちらで顔を出すのは、こういう背景があるからと勝手に解釈して納得している。

閑話休題。このような環境のなか、「ふるさとの味」としては、祖母の手作りの味が強く残つている。赤蒟蒻・お麸・近江牛の豪華なすき焼きも大好物だったが、わが身に残つている味は、祖母手作りの「鮒ずし」である。琵琶湖固有種のニゴロブナを、乳酸菌発酵させた「なれずし」と呼ばれる食べ物で、滋賀県の郷土料理として知られる。

毎年二月から三月に琵琶湖でとれる腹にぎつしり卵をつめたニゴロブナを、ウロコや内臓をとつてから塩漬けにする。数か月後、夏の土用のころに取り出して水洗いし、炊いたご飯とともに本漬けする。秋から冬にかけて

これが発酵し、熟成したのをハレの日の料理として食べるのだ。鮒ずし用の樽があり、それを開けて祖母が作業する。臭い！ 発酵した鮒を取り出すときの匂いは強烈だった。ブルーチーズに似て、もつと癖がある。

同じ系統の匂いとしては納豆がある。少年時代から、藁筒入りの水戸納豆を定期的に届けてくれる知り合いがあり、納豆好きが幸いして鮒ずし愛好者になった。

臭いに抵抗があつて鮒ずし嫌いの人が多いようだが、それをお茶漬けにして食べていた父の影響もあり、とにかく祖母の鮒ずしには惚れ込んだ。子持ちのメスのものがより美味しい。長さ10cm、幅5cm、厚さ1cmほどにスライスされている。噛みしめると味わいが増す。

酢の味が混じり、酒のつまみとしてもいける。現役時代、料亭でお目にかかる記憶があるが、今頃は専門店舗も少ない。貴重品で高価である。小遣いが貯まると、たまに千円札を重ねて少量求め、自前の田圃で採れた秋田小町のご飯の豪華なオカズとして楽しんでいる。

筆者の言動が時に「臭い」のは鮒ずしのせいかもしれない。

我が家の定番ご馳走

岩崎 洋一郎

何時からかは定かではないが、お正月以外のお祝いの膳は、鶏の丸焼きと決まっていた。

思うに、恐らく一九三〇年代に父が三菱商事のニューヨーク支店勤務のころ、アメリカ人から母が教わったのである。父が支店次長に昇格したのを機に、それまでのアパート暮しから三階建の広大な一軒家に移つて、ドイツ系アメリカ人、スプライザー夫人を住み込みで雇つてからであろう。

このスプライザー夫人は料理の名人で、いろいろな料理やデザートを作つてくれた。元々料理が上手であつた母は、それらを吸収して、逆にヘルパーに日本料理や中華料理を教え込んでいった。ドイツ風家庭料理には、日本の西洋レストランでは出てこないような献立がある。たとえば鶏のレモン風味のフリカシーや子羊の脚の丸焼き等々。

その中で、クリスマスや誕生日等の慶事には必ず出てくるのが、鶏の丸焼きであった。大家族であれば、もつと大きな七面鳥が必要だろうが、我が家は四人家族なので鶏で十分であった。鶏は肉屋で買うのだが、予め頭や羽や内臓は取り除いてあり、その空洞に詰め物をする。この時の仕様は、その家に伝わる伝統が込められる。我が家は、ヘルパーに教わった極めてシンプルな仕様である。食パンの固い茶色の周りを取り除き、白い柔らかい部分を水で餅状にする。それにタイム(たちじやこう草)などの葉草や香草を入れるだけの簡単な構成。他家ではナツツ類を入れたり、甘いレーズンを入れたりする所もあると聞く。

準備が整つたら、オーブンに入れて、時間をかけてじっくり丸焼きにする。焼いている間に、時々バスクする。これは、焼いていると表皮から脂がしたり落ちるが、それを大きな匙でくつて、また上方から鶏にかけてやる。この作業を繰り返しているうちに、皮がパリパリになる。これがたまらなく旨い。鶏の周りには、予め皮をむいた半切りのジャガイモを置いておき、これにも滴

り落ちる脂を掛けでやる。黄金色に焼きあがつたジャガイモのおいしいこと！

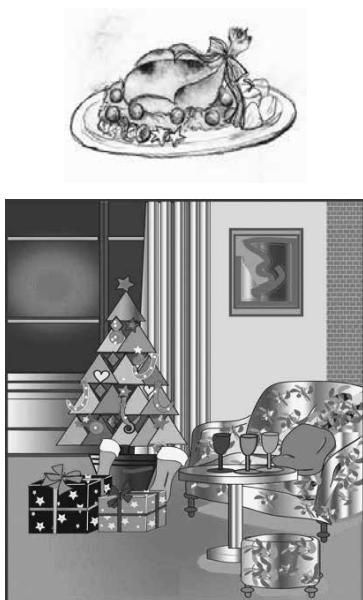
鶏が焼き上がると大きな皿に乗せて、そのまま食卓に提供する。鶏の脚にリボンをつけてお化粧することもある。

さて、次に行うのは鶏肉を切り分けることで、これは家長である男子が行うシキタリである。道具は、フォーケとナイフだが、特殊な形である。まずフォークだが、爪が20センチぐらい、ナイフは、刃渡りが30センチぐらいの鋭利な物。先ず脚を胴体から切り離す。関節を逆に開いて刃を入れる。次に上肢と下肢を切り離す。次に胸のさざ身の部分を削ぐ。

私が一番好きであつたのは「ドラム・ステイツク」と呼称される下肢であつた。また、鶏の脂がしみ込んだジャガイモが何とも美味であつた。後年、青年になつた私は、父がこの捌き役を任せてくれた時、一人前の大人になつたと認められた感があり、胸が熱くたぎつたものである。この定番料理は、妻に引き継がれ、息子もこの鶏の丸焼きと添え物のジャガイモが大好きである。

しかし残念ながら、我が家この伝統料理は途切れそうである。妻が息子の嫁に引き継ぐ前にアルツハイマー症になり全ての記憶が消えたからである。

残念至極、嗚呼！



「チャンポン」と「握り寿司」

池田 隆

味いものが有るのだろうか。爾来六十有余年これほどに感激した料理には未だ出会っていない。

昭和二十六年の暮れのこと、急に長崎から東京へ父の転勤が決まり、我が家は引越しの準備で大わらわだつた。母の友人たちが大勢やつて来て荷造りなどを手伝つてくれる。昼時になり、大皿に盛つたホカホカの「皿うどん」が近くの中華料理店から何皿も届いた。

慎ましい会社員家庭で外食や出前とは縁遠かつたが、この日ばかりは母も大盤振舞い、好きなだけ食べてもよいという。日々は麦飯、薩摩芋、南瓜、鰯主体の食生活で、銀シャリと呼ばれた白米だけの御飯などは話に聞くだけの代物だった。食べ盛りの中学生だった私は飛びついた。

白い濃厚なとろみを付けた蒲鉾、エビ、イカ、アワビ、豚肉、キヤベツ、もやし、人参、茸などが炒めた支那うどんに掛けられ、湯気と香りを漂わせている。口を大きく開け、一心不乱に食べに食べた。世の中にこんなに美

「チャンポン」と「ラーメン」は一見似ているが、料理法や麺の製造法が基本的に違うとのこと。同じB級グルメであるが、「ラーメン」が日本各地の名物となり、世界的に普及したのに比べ、「チャンポン」や「皿うどん」は今なお地元の長崎に限られる。

数年に一度は長崎へ行き、「チャンポン」や「皿うどん」を食べているが、東京でもその味を思い出し、「チャンポン」の看板を街で見掛けるとつい試してみる。だが本場の味に程遠く、いつも悔しい思いに駆られてしまう。

東京には世界各国、日本各地の料理が集まつており、

月一回のペースで企業O.B.ベンクラブの仲間と各人のご推奨店に出掛けている。いずれの店も、味は当然ながら雰囲気が良く、値段もリーズナブルである。その後に何度か家族と同じ店に出掛けることもある。だが不思議なことに、それが何年も長続きすることは殆どない。

外食したくなつた際に足が自然と向かうのは常に築地場外市場の江戸前の寿司屋である。人混みの中で待たされることも度々で狭苦しい店だが、新鮮で選び抜かれた大きなネタの「握り寿司」が最高に美味しい。魚によつて微妙に違う味と舌触り、同じ魚でも日によって変わらる味。熱くもなく、冷たくもなく、中は柔らか、外は固めに握られたシャリ。軽く舌を刺激するワサビと醤油。舌の上でいつまでもネタの余韻を味わう。こんな単純素朴な食い物と思うのだが、寿司職人になるには「飯炊き三年握り八年」の修行が必要というほどに奥が深い。

江戸前の「握り寿司」と「チャンポン」は正に対照的である。「チャンポン」は時に「ませこぜ」という意にも用いられるが、決して無作為に混ぜ合わせた料理では

ない。豚骨と鶏ガラで作った濃厚な白いスープの中で多彩な食材が各々の味を最大限に發揮している。中華料理と和食、両方の良さを兼ね備えた料理である。昨今問題点を多々指摘されているグローバリズムも「チャンポン」のように有りたいものだ。各国が文化や価値観、政治経済制度に独自性を發揮しながらも、互いに共通の場を有し、平和を保ち合う世界である。

一方の江戸前の「握り寿司」は一切の混じりけを排し、素材本来の単独の味を純粹に追及している。それは自然神を拝み、侘び寂びの風趣に惹かれる日本人の心情と文化を代表しているように思える。政治・社会の分野ならばさしづめナリズムに通じるのだろう。

わが身体は時に「チャンポン」や「皿うどん」を無性に食べたりなり、時には意識せずに江戸前の「握り寿司」屋へ足が向く。

わが心（ソウル）もつねに揺れ動いている。時にグローバリズムに憧れ、時にはナリズムに酔いしれる。まさに「チャンポン」と「握り寿司」は私の「ソウルフード」である。

焼き餅

安藤 晃二

先ず戦争中のこと、進ちゃんの話から始めよう。進ち

ゃんは、群馬が故郷であつた母方の従兄で、当時四歳の僕より十五歳も年上だ。進ちゃんは両親を早く亡くした。僕の父が創業期の日立製作所で数年間設計技師だつた関係で、群馬にいた進ちゃんを日立に世話をした。それで進ちゃんは埼玉の我が家に、日々日立からやつて来た。昭和十九年頃のことだ。父はその頃は、政府の御役目で済南に単身駐在していた。我が家は、僕の兄と母子三人暮らしだつた。進ちゃんにしてみれば、唯一の叔母である母を随分慕っていた。進ちゃんは門に現れると早足で庭を横切つて縁側からすつと座敷に上がる。いつも戦闘帽姿であった。

るとビシビシ怒られた。一方、大変世話好きで、周りには笑顔を絶やさず、僕の幼稚園にこっそりやつて来て、窓の外から隙間だけ空けて、気付かれない様に僕の「お遊戯」姿を覗いて微笑んでいた。

母は甥の進ちゃんが来ると大歓待をした。手際良く手打ちの煮込みうどんを作る。幼い僕は台所で、母の、うどん粉を練り、踏み、麺棒を見事に使うさまを興味津々で眺める。また「焼き餅」を焼いた。練つた粉に具を入れて焼く。進ちゃんにとつても故郷の食べ物だ。具の高菜の漬物を微かに憶えている。あるとき決定的なショックを受けた。「焼き餅」の具と共に松葉が少し入つていたのだ。香り付けに入れたに違いないが、子供にとつては毒草級の芹と同類、いやそれを遙かに超えた異物であった。爾来、僕は「焼き餅」は全く食べてていない。

進ちゃんは日立では機械屋だ。それ以上に特殊能力の持ち主で、やつて来るなり家中の柱時計のメンテから懐中時計の分解掃除まで何でもやつてしまふ。幼子にとつて

母は翌年には急性肺炎で亡くなる運命にあつたが、僕の短い記憶の中では実に動作が機敏で、土足で家に上が

ては尊敬の的、進ちゃんの来訪はセンセーショナルそのものだった。終戦の年に母が他界してからは、進ちゃんとはずっと遠くなつた。

僕が還暦を迎えた頃、日立に住む進ちゃんから音信が復活する。既に七十五歳になつたが、家中にガラクタを積んで機械の分解組み立てが趣味だと記してあつた。そして、ある日進ちゃんから一通の手紙が来た。その手紙には、母が聖路加病院で僕を出産し、進ちゃんが見舞いに行つたときの情景が仔細に書かれていた。

叔母がとても元気で、快活に病院の中を案内して呉れた。分娩後親子は全て別室に分けられ、乳児だけの部屋に、多くの赤ん坊達がしるしを付けて並んで夫々のクリブに寝かされていたのをガラス越しに面会したこと、昭和十五年のその頃エアコンが完備していたこと等々、淡淡と綴られていた。この事実を語るストーリー以外何も書かれていなかつた。しかし、話の文脈では常に「叔母」が主語で、その言葉や表情が蘇り僕の心に響く。読み終えて涙がとまらなかつた。余りにも短かつた実母との時

間が思われた。数年前、進ちゃんからの賀状が途絶える。かわりに娘さんから訃報を伝えて來た。

いま軽井沢の大通りには、数件おきにギャルに人気の「おやき」の店の幟旗が立つ。何やら今風の餡などが具になり、彼女等は美味しそうに頬張りながら嬌声を上げる。僕も、と食指が動いたが、あの母の作つてくれた松葉入りの「焼き餅」の思い出が損なわれる様な気がして二の足を踏んだ。不思議な感情が働いたものだ。

スコットランドに「ハギス」と呼ばれる、焼き餅を想わせるパンの中に羊、小牛の腸など臓物を胃袋に入れて煮たものを包んだ食べ物がある。スコットランド人にハギスの話をすると、例外なく満面の笑みを浮かべ、盛り上がる。ソウルフードなのだ。ソウルフードとは元来米国南部の食べ物の由、更に調べて見た。「豚の小腸」ともあり「心から満足いくもの」（黒人俗語）とある。

僕のソウルフードは「焼き餅」、しかし、もう生涯食べることはないだろう。進ちゃん、ありがとう。

糠床入り煮

児玉 寛嗣

米粒を覆っている層の一部、あるいは全部を取る過程を精米という。その層が残っているのが玄米、すべて取つたのが白米である。除去された層を「糠」と呼んでいる。お米屋さんに行くとこの糠のちょっと油っぽい独特の匂いが漂つていたものだ。最近ではお米屋さんはすっかり陰を潜め、米はスーパーで買う時代だ。その米も綺麗に糠を除いた白米がほとんどだ。若い人達の多くは採れたときから米は白いものだと思っているのではないか。

さて、この糠であるが、漬物の一種であるぬか漬けの床として使用されている。

その「糠」にまつわる話である。

私の育った九州の北端、小倉（旧小倉藩）ではこの糠を利用した独特的の料理がある。鰯や鰆など青魚を糠味噌のなかに入れ調味料などを加えて煮るのだ。

かつてはこのあたりの家庭料理となっていたようだが、

やがて、糠味噌の独特の匂いが部屋中に広がる。糠の栄養はもちろん、骨まで軟らかくなるのでカルシウムも摂れて満点の健康食だ。また、糠の効果で青魚の臭みもなくなる。使う魚もすぐ前の玄界灘で漁れる新鮮なものだ。

一人暮らしの母の様子を伺いに時折帰省することがあつたが、八十を過ぎても必ず子供の頃好きだっただろうと言つて作つてくれたものだつた。ごはんのおかずとするか酒の肴とするかの違いはあつたが、子供の頃からの

そのやりかたは家々で違つていたようである。

慣れ親しんだ味は変わらなかつた。箸で鍋の糠をつつき魚の在りかを探す。探り当てるに身が崩れないように慎重につまみ出し、そのまま口に運ぶ。糠にまみれた魚は見た目にちょっと悪いが、骨も適度に柔らかくなつており、香ばしい糠の味も味わえ独特の食感だ。

その母もいなくなり、もう食べられないと思つていたら、母の法事の帰り北九州空港の土産物売り場で見つけた。「小倉名物・糠床入り煮」と書いてあり、糠のついでイワシがいくつか袋に入つている。さつそく買つてみた。糠の味はするし、くせもなく食べやすくなつていたが母の味とはどこか違つていた。

父母と四人の子供達で鍋を囲んでつつき合つた頃の光景を思い出す。「食事だ」と母が台所から食卓に鍋を運んでくると、一斉に箸を鍋に突つ込み魚探しだ。私より九才年下の弟はなかなかうまく探し出せない。それをわかっている母は、魚の在りかを初めから考えていれおり、鍋の位置を弟が目の前をつつけば、魚が手に入るようにしてある。「ここ、ここ」と教えてあげていた。思

この糠床だが、母は家内や娘たちにも分けてくれた。糠床は、暑い夏には頻繁にかき混ぜて空気を入れないと腐つてしまふ。かき混ぜると強い匂いが漂い、マンションにはなかなか置けない。一時ベランダに置いていたが、都会育ちの妻にはこのケアがままならず、そのうちに腐らせてしまい糠床はなくなつた。しかし、母の味に自ら挑戦したくなつた昨今だ。

えば、大人になつて帰省した時に味わつたものと違つて、砂糖を入れて子供の口にあうようにしておけば、小さな子でも捕まえるチャンスが大きい。家長制であれば長男である私が一番先に箸を入れるのであろうが、父はなかなか民主的だつたのかとふと考えたりもする。各自順番に箸を入れ、残つてゐる魚を探すのだ。魚と思つて箸で取り上げると、古い胡瓜が出てきたりする。母が漬けたのを取り出し忘れたものだろう。皆、大笑いしたものだ。

私のソウルシェフ

塚田 實

一九〇〇年八月から二年七か月ロンドンに駐在した。日立の欧洲本社はロンドンの西約五十キロメートルのメイドゥンヘッド(Maidenhead)にあった。人口七万人弱の小さな町である。町の東側にはテムズ川が流れている。

隣にブレー(Bray)という更に小さな田舎らしい雰囲気を持つ町があった。フレンチ・レストラン「ウォーターサイド・イン」(Waterside Inn)はこの町のテムズ川沿いにある。一九七一年フランス人のミシェル・ルー(Michel Roux)が古いパブを買い取り、優雅で落ち着いたレストランに改造した。今はミシェルの息子アラン(Alain)が経営しているようだが、私がたびたび訪れた頃はミシェルがまだ健在で料理の腕を振るっていた。彼の懸命の努力でウォーターサイド・インはフランス以外で二十五年以上ミシュラン三ツ星を維持する最初のレストランになつた。テムズ川もこの辺りまでくると川幅

はぐんと狭くなる。川を眺めながら、料理を楽しむのは最高の贅沢だつた。食事を終えるとミシェルが愛想よく各テーブルに挨拶に来る。握手も交わした。帰りにミシェル・ルー他ミシュラン三ツ星レストランのシェフたちのサインをプリントしたエプロンをお土産に買つた。今でも私の宝物である。

ミシェル・ルーはウォーターサイド・インをオープンする前、兄アルベル・ルー(Albert Roux)と一九六七年ロンドンに「ル・ガブロッシュ」(Le Gavroche)というフレンチ・レストランを開いた。二人は、イギリスの料理界を豊かにしようと尽力し、イギリスで初めてミシュランの星を獲得した。ミシェルがブレーに移った後はアルベルが店を守つた。店はハイド・パークの東側にあり、外装も内装もロンドンらしい重厚さに満ちていた。私のアパートはハイドパークに近いケンジントンにあつたので、よく会食に使つた。私が訪問した時は、アルベルは既に引退しており、息子のミシェル・ルー・ジュニアが店を切り盛りしていた。食事を終えたころ、やはり丁寧に挨拶に回る。当時四十歳を過ぎたばかりのミシ

エル・ルー・ジユニアはいつも料理に対する彼の思いを熱く語っていた。

ロンドンでは、「モシマンズ」(Mosimann's)にもよく行つた。ハイド・パーク・コーナーに近い王室御用達の会員制クラブで、シェフのアントン・モシマン(Anton Mosimann)が教会を買って、レストランに変えた。教会の雰囲気を残し、すべてに行きとどいた快適なサービスを提供する素晴らしい店だ。ここが良かったのは、普通のダイニングルームのほかに、大きさの異なるいくつかの個室があり、人数が多いときは個室を取つてビジネスの話も自由にできることだった。アントンは元々スイス人で年は私と同じ、禿げ頭の気さくで優しい人だつた。

リヨンにはフランスの家電事業拠点があつた。日立は欧洲で鉄道ビジネスへの挑戦を始めていたので、調査を兼ねてパリからリヨンまでTGV（フランス高速鉄道）に乗つた。約二時間の快適な旅である。ここで「ポール・ボキューズ」(Paul Bocuse)を訪れた。一度行つてみたかった。町の中心から北約四キロメートルのソーヌ川沿いにあり、建物が特徴的だつた。ミシュランの三ツ星

を五十年以上維持しているフランス料理界の最高峰と言われている。日本人もここで大勢修業したと聞いた。有名なトリュフのスープをいただき、魚料理から肉料理とフルコースを三時間かけて味わつた。シェフは現在九十歳で健在だが、私が会つたときは七十七歳でまだ元気に料理しておられた。帰りにポール・ボキューズ氏と写真を撮つた。MOF（フランス最高料理人賞）を持つが、とても穏やかな人懐っこい感じのシェフだつた。

ワインで印象的だつたのは、パリ・ジョルジュ・サンク・ホテル内のレストラン「ル・サンク」(Le Cinq)のワインセラーである。食前酒を飲んだ後、有名なソムリエであるエリック・ボマール(Eric Beaumard)に特別に案内してもらつた。狭い階段を下りた地下十四メートルのところに、岩に囲まれた「ラ・カーヴ」(La Cave)と名付けた自然のワインセラーがある。凱旋門の石と同じ石が使われているそうだ。彼の選んだ二千八百種五万本のワインが保管してあるという。ひんやりとしたセラーを歩いていると、幻のワインと言われるペトルス(Pétrus)を見つけた。ワインの世界も料理と同じく広くて深い。

ふくいの味

齊藤　征雄

こんなやりとりが何度かあったことを思い出す。

私の福井の記憶は五十年以上前のことだから、今は変わっているだらうと思いつつネットを覗いた。

『シンプルにもほどがある、福井のお雑煮！』の見出しが目に飛び込んできた。

そのあとに新潟出身福井在住という主婦の談話が続く。「嫁ぎ先の福井のお雑煮は、昆布だしの具なし味噌汁の中に、丸餅が一つ沈んでいるだけというのが一般的。さみしい思いをしています」

そうか、変わっていないのだ。

ちなみに、わが家の流儀はすべてがカミさん流だが、ただ一つ雑煮だけは福井流を守り通している。

「斎藤さん、福井ですよね」と私に順番が回つて来る。
「そうだよ。福井は関西文化圏だから白みそ。昆布を敷く。餅は丸餅。食べる時かつお節をたっぷりかけてね」「具は？」

「具は入れない。餅だけだよ」信じられないという顔。「それって、雑煮の定義に反しませんか？」「言いにくいいけど、貧しかったからですか？」

◇料理「たくあんの煮たの」

福井の伝統料理を検索すると「たくあんの煮たもの」とか「たくあんの煮もの」とかの名称で出てくる場合があるが、それらは正しくない。「煮た」に「の」を付けて名詞化するのが福井流の言い方。「たくあんの煮たの」が正しい。

各家庭で秋にたくあんを漬け込むのは、どこでも同じ。そして冬を越し春が過ぎて初夏になると、たくあんも古漬けになり、やや酸っぱくなつてくる。福井の各家庭では、こうした状態になつても余るほど、大量に漬け込むのである。

この古漬けたくあんを、輪切りにして水にひたして塩出しをして煮込んだものが「たくあんの煮たの」である。味付けは家庭によつて違うが、基本は砂糖と醤油。それに福井では「なんば」というが、赤とうがらしでピリ辛風味にする。

「なんと貧しい」と哀れみを感じる方がおられるかも知れないが、これが実に旨いのである。冷めた状態で食べるのがよい。酒の肴にも合う。れつきとした郷土料理の一品なのだ。

東京で営業するいくつかの福井料理の店でも、メニューの片隅にかならず載つているのがうれしい。

◇「こんかいわし」

最近福井の物産みやげとして「へしこ」が有名になり

つつある。サバを糠漬けにした保存食だが、これは福井県の若狭と呼ばれる地方の伝統料理である。私の生まれた越前にも同様の糠漬けがあるが、鰯が多かつた。呼び方も「へしこ」とは言わず、「こぬかいわし」なまつて「こんかいわし」と呼んでいた。

浜で漁師が漬けたものを樽ごと買つて保存食とした。糠がついた鰯をそのまま焼く。非常に塩が強いので、ちよつとずつしか食べられないしろもの。

鰯の身を少しずつほぐしてごはんにのせて食べる。お茶漬けにも最適である。酒の肴にもなる。おまけに糠も食べる。焦げて香ばしいのだ。

「こんかいわし」も極めて貧しいイメージが付きまとつが、戦後すぐの時代にはこれも貴重ななんばく源だったのである。

「ふくいの味」は、いずれも私にとつてのソウルフレードである。

念のために付け加えるならば、福井にはカニやウニなど高級なものもないわけではない。

サロン21 活動報告

二〇一六年の各月のテーマとプレゼンターは左記のとおりです。（敬称略）

二〇一六年は、アベノミクス、A.I.、グローバル化などをキーワードに経済や社会の行末などを中心に議論し、また、各国の文化や歴史から多くを学ぶ会合を重ねることができました。一昨年からクラブ会員外の有識者にゲスト講師として参加していただきましたが、昨年は理学博士の奥出信一郎氏、元統合幕僚長の斎藤隆氏、農学博士の浅井壯一郎氏（その後当会に入会）、A.I.研究家の田辺吉久ブレイン工房社長という各界の有識者に、専門的立場からの興味深い話題を提供願い、更には、それに引き続く参加者全員での討議という形で活発で有意義な意見交換を行うことができました。

二〇一七年は英国のBREXIT、トランプ新政権の誕生、日露交渉の進展、テロ・難民の日常化など国際情勢の激しい変化も出てきております。それらを念頭に、外部からの講師の参加もいただきながら、会員相互の意見発表と討議を続けて参ります。

一月	日本ハイパーインフレーションの起きる可能性について	奥出信一郎
二月	グローバル化の行方	大平 忠
三月	最近の景気循環の変貌と経済発展・衰退論の接点	山縣 正靖
四月	海の防人	斎藤 隆
五月	インド仏教について	斎藤 征雄
六月	中国の歴史に学ぶ	大泉 潤
七月	二十一世紀 日本の而立に向けて	森田 晃司
九月	飢餓が歴史を変える	浅井壯一郎
十月	日本の再生戦略を考える	山縣 正靖
十一月	人間とAI（人工知能）が共創する時代	田辺 吉久
十二月	データで見るアベノミクス	鳥海 博 (プロマネ 森田、下山)

自由テーマ



水彩 安藤 晃二

資本主義から「人本主義」へ

鳥海 博

最近はあまり聞きませんが、今から三十年ほど前（一九八〇年代）に『ステーク・ホルダー論（SH論）』が世上を賑わしました。短絡的に言えば「会社は誰のものか」論です。理屈から言えば、会社は株主のもの、つまり、お金を持つている者が出資して作るものです。だから、会社が活動して稼いだお金は、会社の中に溜めこまれる（＝内部留保）か、或いは株主に（配当金として）分配されるかです。しかしながら、アダム・スミス的な原始資本主義が、その後社会（共産）主義的概念で修正されたように、会社が社会的に大きくなると、こういう単純志向が許されなくなつてきました。「会社は社会の中で生きている（＝社会の恩恵を受けている）」のだから、当然に地域社会や行政組織（国家）にも報酬を払うべきだ、それが言うなれば税金であり、社会保険料だと整理できます。いや、会社の利害関係人としては、もつと身

近にいるのが会社の役員であり、従業員です。或いは仕入れ先も販売先（お客様）も大いなる利害関係人です。原材料を提供してくれる者が居なければ会社は生産（製造）が出来ませんし、製品を買ってくれる者が居なければ、会社は存続できません。SH論がこのように幅広に利害関係人を抉り出してくれた事は正しいことでした。

では、これら複数種類の利害関係人のプライオリティーとなると、その順位付けは人様々です。私見に拠れば、最大のステーク・ホルダーは会社の従業員です。従業員が働かなければ、売上げも利益も発生しないからです。そういう観点から言えば、最劣位は一社会法の規定とは真逆の一株主さんです。お金は出すけど力は出さない、知恵も出しません。お金に稼がせるけど自分は額に汗して働きません。

斯くて私のSH論は、資本主義変じて『人本主義』に立ち至ります。従業員あつてこそ会社です。ましてや、今の証券市場のように、株式を売買する事は全く自由で、簡単に株主の地位を離れたり、或いは逆に株主になつたり、もしかすると、これつて「無責任な話」です。

株価が上がったから株式を売つてしまふ（安いから買う）

というスタンスには会社に対する愛着も無ければ、忠誠心もありません。こういう株主に有るのは株価を通じての損得勘定だけです。これに比べれば、従業員は必死です。自分たちの作ったモノが売れなければ給料は上がるが、ボーナスも貰えず、場合によつては「クビ」になつてしまふからです。特に全知全能を傾け、身命を賭して戦つているのが「我が会社」です。繰り返しになりますが、余剰金の内部留保への繰り入れ乃至は資本への報酬（（分配当金）は、従業員の給与に劣後します。今、国会で「内部留保課税」が論議されていると聞きますが、ある意味では正しい方向です。これは何もデフレ脱却の便法—狙いは言うまでもなく所得拡大を通じての「消費の拡大」ですが—ではありません。マンパワー提供の落とし子が会社の利益であり、内部留保だからです。従業員は最優先的に—自分の権利として—利益（余剰金）の分配に預かりましよう。アベノミクスの「第三の矢」として「経済成長」が叫ばれ、その延長線上に従業員への給与の分配が置かれていますが、これはそのスタートラインに置

かれるべき事柄でしょう。

「人こそ命」の人本主義は、ともすれば忘れられ勝ちですが、日本の経営概念には元々「人本主義」が潜在しています。例えば『住友家家訓』です。【信用を重んじ、確実を旨】と諭し、取引先（社会）の信頼に応えることを最も大切にしています。また【浮利に走り軽進すべからず】。目先の利益のみにとらわれることのないようについている強い戒めです。このほかにも【自利利他】【公私一如】があります。事業は自分自身を利するとともに、国家を利し、かつ社会を利するものでなければならないとする考え方で「公益との調和」を強く求める言葉です。人本主義的考え方は、ここ三十年來のグローバリズムに駆逐された感があります。トランプ政権もアンチ・グローバリズムですが、彼が目指しているのは資本主義概念の中での保護主義ですから、私がここでいう人本主義とは大違います。

混迷と迷路

大泉 潤

正月の朝、秀麗富士が純白に鎮座し、新宿、六本木のスカイラインが空を圧している。街角を行き交う人々は満ち足りた風情に溢れ、平和で豊かな日本を実感する。

一方メディアからは、地球上の大団の身勝手な振る舞い、未開地に残る残虐行為と悲惨な暮らしが絶え間なく伝えられる。振幅が大きく、余程よく整理しないと記録もとれず、これからの設計もできない。日本も世界も迷路に彷徨いこんだ。政治も経済も外交も、毎日の生活も指針が重要だ。人生の終末に近づき、今後のテーマを探索するために迷路の渉獵に踏み込む。

二百年前には、世界GDPの五十七%は日本を含むア

ジアだった。戦後十七%へ減少し、九十年後半には三十%まで回復し、三十年後には五十%を占めると予想されている。まさにアジア時代の再来である。また、最も効率的で人間の本性に役立つ資本主義はその根底が問われ

ている。資本主義は、その倫理性、共感・利他の精神、市場重視の賢い規制など長きにわたりシステムの根幹をはたしてきた。だが、貿易の資源配分、効率、格差や経営者の高報酬などが露呈し、万全ではない。一方、万民平等を旗印にする社会主義、共産主義も独裁国家を除いては定着していない。世界約二百カ国の中、今でも六十の国が紛争に巻き込まれ、平和は道遠しである。

まず足元の日本を眺める。消費増税延期を機に、税制論議が活発になった。官邸主導の、三本と称する政治理論で、増税延期、借金財政、金利低下、国債増発などが決まった。要約すれば、財政は高齢者対策に支出を増やす、税収入で賄えない部分は国債などの借金で賄う、金利負担を減らすために長期金利を最低限に抑える、かくして選挙において高齢者からの得票を増やし政権は安泰となつた。

国家財政の赤字は巨額に達し、その償却には毎年十兆円返済しても百年かかる。近代史では、膨大な借金の帳消しは、大戦後の超インフレによる帳消しか例がない。まともな財政では運営できない時代になつた。その背景

には、老後に責任を持つ、老人の幸福は家族で支えるとの温かい愛情の欠如がある。西欧先進国では、老後保障に手厚いとの評価がある北欧でも、その限界には冷徹な原理が基本にある。

日本の論壇では、消費増税延期は将来の重荷になる、目先の負担減に警鐘を鳴らし、借金膨張は歴代政権の罪だ、命懸けの増税恐れるな、破綻が来ない保証は無い、将来不安が低迷招く、との論調がある。一方、アメリカ仕込みの御用学者が、減税を含む財政拡大が必要だ、アベノミクスをさらに拡充すべしとご託宣をばらまく。自民税調と強大な官邸に支えられ「独裁政治」となった。多彩な外交は世界の政治家と仲良くなり成果を上げているが、一方その土台は脆弱で相当強固な補強を必要とする。まさに迷路だ。

隣国中国とは付き合い方、外交が大事だ。「中国の人工島建設の論拠は二千年の歴史にある。漢王朝から管理下だ」「中華民族は人類の文明に不滅の貢献をした偉大な民族だ、外交、経済、軍事、民政などあらゆる分野で強気の政策運営を進める」と公言している。

対日感情の調査結果として中国の大学研究員は、「残忍、身勝手、礼儀正しい、経済発展、質の高さ、清潔さ、好感を持つ、交流の意義大」と総括している。

中国は把握しにくい国と思う。旅行で親しむ範囲とメディアに現れる国の姿は範囲が膨大で分かりにくく、日本で発表されている統計では次の通り。国民総所得は、十兆\$で米、日に次いで三位、一人当たりは、八千\$で日本の三万八千\$の二十%である。中国人の対日感情は、この経済格差が半分になれば和らぐと思案する。日本製品の中国生産は第三国へ移り、対等の関係に改善されると予想する。今の成長率の差（八%）ではあと数年で摩擦は解消する。中国は、四書五経以来、日本の精神的柱だったことを思い出す。これが迷路の第一だ。

米のトランプ政権、西欧の諸問題（英のEU離脱）、難民、格差などは日本の進路にとつて重要なテーマである。しかし、日本の対中関係が盤石になれば、道は開けると思う。日本人は、ギリシャ、ローマ以来のリベラルアーツを学び、経済的安定を図りつつ、精神的充実を図るべきだ。迷路の出口は明るく見えている。

天皇のご退位

新山 章一郎

昨年はブレグジット、トランプ現象、豊洲問題など、「ヘエツ」というニュースが多かつたが、現天皇のご退位表明問題もそのひとつである。

私は日本の歴史や天皇制について勉強した者でも有識者でもなんでもない。しかし、大きな災害があつた時などに現地に赴き、罹災国民に親しく声をかけ、かたわらに跪まずき、手を取り、慰められる現天皇のお姿を拝見し感銘を受けつつも、ときにはあそこまでされる必要があるのかとの想いも持つていた最末端の一日本国民としての率直な感慨を述べたいと思う。

私はこの報道に接した時、八十六歳の自らの経験に照らして何の違和感もなかつた。現天皇はテレビに映るお姿を拝見するだけでも、体力的に無理だから退位したいとおっしゃるのも当たり前。早く認めて上げてお休みいただくのは当然だ、と単純に思つただけだった。

天皇には内外の高官、貴賓たちの接見、受賞、功労者等の接遇、宮中晩餐会等、様々な公務、皇室行事などがとあれば、常に威厳を保つお姿でなければならず、ご高齢だからといって外国からの貴賓の前で、日本国の象徴が背を曲げ、ヨボヨボと歩かれるわけにはいかない。

齢をとれば自然に猫背になり、腰は曲がり膝は折れる。この老の姿を凛とした立ち姿に正してそれを維持するには強い気力が必要だし、体力的にもかなりの消耗を伴う。テレビで見ても、猫背を無理に伸ばして公務に臨まる天皇のお姿は本当に痛々しい。

以前は、斜め後ろからそつと腕を組まれる美智子さまのお姿も陛下を敬い、お慕いになる皇后として微笑ましいものであつた。しかし、昨今では弱々しい足取りを背後から油断なく身構え、支えて歩く介護者のように見えないこともない。あのご高齢でそんな激務は無理だ。退位は認めて上げるべきだと国民の大多数も退位に賛成しているという。

ところが国民統一の象徴であるお方となればそう簡単

には済まないらしい。各方面の有識者なる方々が、それぞれの立場からいろいろモノ申された。

中には、「国民統一」の象徴としての天皇は神道の大祭司として宮中にあつて、ひたすら国民のために祈つていいだけ良い。自らの務めを恣意的に拡大解釈し、（しなくてもよい）エキストラサービスに精を出して、それが出来なくなつたから天皇を辞めたいというのはお門違いだ」とでも言わんばかりの説もあつた。

これは如何なものであろうか。ごく一般的な国民の一人として言えることは、我々は現天皇が災害地に赴き、国民を慰め、また遠く海外の旧日本領地に出かけられ、太平洋戦争で祖国のために命をささげた英靈の鎮魂を祈られることを余計なことは決して考えていないと思う。もつとも、これこそ国民統一の象徴としての天皇に最もふさわしいお姿かと問わるとちょっと言葉に詰まる。出来れば、伝えられる仁徳天皇の故事『民の竈は潤いにけり』的な、大所高所からの目線による逸話が欲しい。

とすれば国民統一の象徴とは何なのだろうか。前説に述べられている『神道の大祭司』というのは余りにも古

く、神がかり的で、それを突き詰めれば神武天皇、天照大御神、天孫降臨そして、いざとなれば神風の吹く神国日本に至る。現代の国民の大部分は『なに、それ?』といぶかり、また現に超高齢者住民である我々であつても、そんな神主の元締めみたいなものが国民統一のシンボルであるというのは余りにしつくりと来ない。

戦前の日本を少しでも知つてゐる我々世代にとって国民統一の象徴として最もふさわしいのはあの大元帥の軍服に身を固め、大きな大勲位菊花大綬章を胸に輝かせた明治大帝のお姿であつたと思ふ。あの頃の日本人は本当にこの人こそ日本の象徴であり、この人のためには死んでも良いと考えていたのではないかろうか。それもいまでは我々の代で消えてしまう幻影でしかない。

しかば、総ての日本人に素直に受け入れられる日本国民統一の象徴とはいかなるものであるべきか? 象徴というからには、その背景に一定の理念とか、概念とかがある筈だ。天皇制の存続や法的整合性などの既成概念に囚われている有識者だけでなく、もつと「統一される」側の一般国民の篩らぬ声を聴くべきである。

北朝鮮の脅威にどう対応するのか

玉山 和夫

策を取っているかというと、日本海にイージス艦を二隻並べて、北のミサイル発射を探知して撃ち落とす計画です。命中率は80%とされていますから、五発来れば一発は撃ちめらすことになります。

北朝鮮は最近しばしばミサイルの発射を行っています。また今まで五回も核爆発の実験を行つていて、その都度国連で非難、制裁決議が繰り返されました。最初の実験から十年も過ぎたにもかかわらず、何も効果を上げていないのが現状で、数年内に米国本土をミサイルで核攻撃できるようになると予想されています。

北朝鮮は小国なので、大国に対抗して生き残るために核戦力を保持することが唯一の方策だという決意は固く、唯一の被爆国である日本が言い立てても北朝鮮の不退転の政策を覆すことはできません。

このような無法国家が日本に対して、無理な要求をして、それが容れられない時にはミサイルを撃ち込むと脅かすことはあります。私が書いたシミュレーション「有事列島」でもそのようなケースを述べています。

北のミサイル攻撃にたいして日本政府はどのような対

日本国内に落下してくるミサイルはPAC3という防衛システムで撃ち落とすことにしています。しかしPAC3は数隊しかなく、その射程範囲は公称では20キロ、実際に命中率の高い範囲はもつと狭いため、日本全土をカバーしてはいません。東京ではPAC3は、市ヶ谷、習志野と朝霞に配置されているといわれています。市ヶ谷のPAC3に守られている霞が関の政府高官は安心しているのでしようが、東京近郊では例えば調布より西の住民は全く守られていないのです。筆者の住む渋谷でも撃ちそこないが落ちてくるかも知れないのです。

昨年は三発連續発射したミサイルが秋田沖の排他的經濟水域に落下しました。これは日本国内どこでも集中的にミサイル攻撃ができるという重大な警告ですが、日本政府は「ミサイル発射兆候を捉えたらJアラート（全国瞬時警報システム）を使って国民に知らせる」とメディ

アを通じて発表しています。Jアラートというのは通信衛星と市町村の音声放送やサイレンなどにより緊急情報を住民へ瞬時に伝達するシステムです。

さて政府がどのような情報を流すのか、情報を聞いた国民に対して「どういうように行動せよ」と勧告するのか、はつきりしません。

メディアは台風大雨情報などでは「住民はどこそこに避難してください」などの警告を繰り返していますが、ミサイル情報を受けた時は「どうしてください」というような報道は見たことがありません。

しかし何等予備知識のない国民が、突然ミサイル攻撃があると知られた時にはデマで混乱し收拾がつかない事態になるにちがいないのです。政府としても対策を発表しておくべきですが、一部の地区しか守れず多くの国民には何もされていないことが分かれば非難されるので、触らぬ神にたりなしと決め込んでいるのでしょうか。

ミサイル防御の最良の方策はミサイルの発射直前に基地を攻撃して爆破することです。ただ日本は専守防衛で国を守るという憲法上の制約があり、自衛隊は北に届く

ミサイルを持つていません。従つてミサイル防衛には国内のインフラ整備が必要です。

幸いに北朝鮮は原子爆弾を三発しか持っていないと確定しており、原爆は大国に対する抑止力として緊要なものですから、これを日本の威嚇に使うことはまだ無いと思われます。

北のミサイルが運んでくるのは通常の爆薬か放射性物質です。爆薬なら例えば堅固な建物の窓から離れたところに居ればまず安全ですが、ミサイルをPAC3が上空で爆破しても、その放射性物質は西風で流されるものの、一部は国内に広く散布されます。それが散布された時の対策の難しいことは、原発の事故で身に染みているはずです、なぜ無視されているのでしょうか。

日本の放射能規制値が、科学的根拠のないままに、諸外国にくらべて極めて厳しく設定されているので、ミサイル攻撃をうければ、微量の放射能がある地域が広がり、国民の不安を助長するでしょう。政府は英断をもって、規制値を国際標準にあわせておくべきです。

心に残る言葉

野上 浩三

アメリカの知人の質問

二〇一三年の夏、二五年振りにアメリカの知人キングドン・グールド氏を訪ねた。彼は鉄道王ジェイ・グールドの子孫であり、夏はニューヨーク州の北西にあるキャツキルズの広大な別荘で過ごす。アメリカ勤務中に知り合った人であるが、毎年「遊びに来い」と誘ってくれていたのである。

彼はちょうど九〇歳になっていた。

別荘には四泊ほど滞在させて貰った。或る日の昼食の時、唐突に彼の口から質問が飛び出した。「日本はどうしてパールハーバー・アタックのような愚かなこと(such a stupid thing) をしたのか?」と聞かれたのである。

非難顔ではなかつたので驚くことはなかつたが、直ぐには返答できなかつた。しばらくしてからも、的確な返

答はできなかつた。軍部が突出したものであつたとか、南洋諸島に進出していた日本の軍部がアメリカによつて石油の供給を断たれたからであつたという程度のことを見えた記憶がある。

しかし、これだけではどうして such a stupid thing をしたのかという質問への回答にはなつていない。

彼はかつて家族と一緒にレンタカーで日本列島を縦断した経験がある。日本の自然の美しさや日本人のやさしさを身をもつて知つている。彼は日本が予想以上に小国であることにも非常に驚いたにちがいない。それに対しアメリカの国土は大きい。彼の別荘の敷地の広さでさえ軽井沢の二、三倍はある。

彼の質問は、「あのように小さな国がどうして強大なアメリカに挑んだのであらうか?」という単純な質問だつたのかも知れない。いずれにしても、彼の質問はそれ以降いまだに私の脳裏を去らないでいる。

真珠湾における慰靈式典

真珠湾攻撃から七五年経つた二〇一六年一二月、安倍首相とオバマ大統領による慰靈の式典がハワイで行なわ

れた。

オバマ大統領が広島を訪問して慰靈の式典に出席したことにしてこの式典が行なわれたことには大きな歴史的な意義が感じられた。

ハワイでの式典が無事に終わつたことに先ずは安堵した。アメリカの退役軍人や遺族の感情が計り難いものであろうと懸念していたからである。

特に気になつていていたのが、奇襲攻撃があつたことであ

る。ハワイでの式典の数日前にNHKが真珠湾攻撃の記録映画を放映した。その中でルーズベルト大統領が「この卑怯な攻撃を忘れてはならない！」と激しい口調で国民に訴えていた。

武士道の伝統からすれば、真珠湾攻撃のやり方は大方

の日本人にとつても納得し難い行為であつた。

広島においてもハワイにおいても謝罪の言葉は無かつた。それが「大人の国」同士の知恵なのかも知れない。

因果応報のうねりと平和憲法

キングドン・グールド氏はオランダ大使をしたことがあり国際感覚に優れている。彼も奇襲攻撃を問題にして

いたのかも知れない。

歴史書によれば、一九四五年に国際連合が発足するまでは、ほとんどの戦争が宣戦布告無し、つまり奇襲攻撃で始まっている。しかし、わが国が奇襲攻撃を行なつたことを正当化することは許されない。世界史的な因果応報のうねりを助長することになる。現実問題として、北朝鮮などに奇襲攻撃を行なう口実を与えることになりかねない。

安倍首相とオバマ大統領の試みは「未来志向の和解」という合意の下に無事終わった。

同時に、日米同盟の強化が強調されたが、これは世界史的な因果応報のうねりを断ち切ることには繋がるものではない。

その意味で、わが国が世界に対して誇れるものに平和憲法がある。平和憲法は日米合作でもある。

安倍首相は、日本の総理大臣としては珍しく、すべて原稿を見ることなく自分の言葉で語っていた。このような機会に平和憲法の重要性を語れる首相であつたならば世界史に名を残せたことであろう。

日米地位協定に思う

杉浦 右藏

昨年十一月、和光市理研の液浸冷却スパコンを見学した。本館の理研全貌航空写真全景を見て驚いた。生卵を割つたような敷地の玉子の部分は米軍の放送施設で立ち入り禁止だ。此れを見て米国の日本占領は戦後七十年まだ続いていると強く感じた。

日本国内の旧日本軍施設で、米国が米国に価値あると考えた場所は米軍基地として継続使用されている。昭和三十五年の日米安全保障条約締結により、占領形態は日本国という主権国を認めて安保条約と引き換えの統治形態に変化した。しかし、実態は戦略上の占領時とあまり変わらない。

昭和三十五年の制定と平成二十八年改定とともに国会強行採決と乱闘の最中で可決された。どちらも岸信介と孫の安倍晋三首相で採決されている。特に岸信介は、大東亜戦争勃発時の東條内閣の商工大臣である。戦後A級戰犯で巣鴨拘置所に収監されたが派出所、総理大臣になり、米国の思惑通り（？）戦後の乱闘の中で安保を成立させ署名した。

同時に「日米地位協定」が締結され岸信介が署名している。その孫が同様に乱闘の中で平成二十八年に安保改定をした。地位協定は、占領軍の都合の良い様につくられたもので、徳川幕末の井伊大老が結んだ国家条約としての不平等に似ている。歴史的に幕末の黒船襲来から日本米の結果はろくなことが無い。

第二次大戦後の日独伊三国の敗戦後の地位協定は、NATOという差を考慮しても日本は主権国家として希に見る劣性差別状態の下にある。トランプ新大統領が言う分担金にしても、日本は七割、韓国は五割、独は一割と割損していく、更に日本を責めるのは如何なものか。日本における米軍基地は沖縄に集中していると言うが、本土の北から、車力・三沢・横田・厚木・座間・横須賀・岩国・佐世保等、配置上の重要性は大きい。また駐留軍人五万人と家族四万人の土地住居の提供も考えるとアメリカ様様の待遇を提供している。

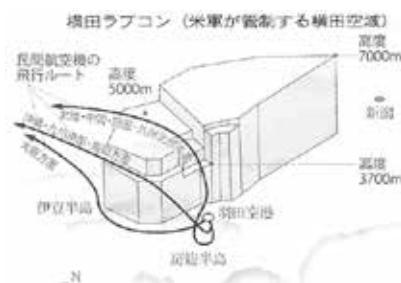
地位協定全体が治外法権的で問題であるが、私なりの問題点を挙げてみる。協定は全二十八条からなる。第一条構成員、第二から四条施設区域、第五条船舶航空、第九条出入国、第十七条刑事裁判、第二十四条経費分担、等が重要と考える。

また本条約締結前の昭和二十七年四月発効のサンフランシスコ条約時の数多くの付属文書が生きていて悪条約となっている。私は通信と航空管制に興味を引かれる。昭和二十七年六月の日米周波数分科委員会で決めるという合意に、日本政府は口出しが出来ない。また航空管制についても米軍の発進権限が優先されている。日本を飛ぶ飛行機はトランスポンダを搭載しレーダ照射に自動応答することになっているが米軍機は応答スイッチを切っている。

何処を見ても日本の国家主権を無視するコトばかりだが、日本政府はイエスしか表明出来ないのが現状である。



理研パンフより



NTT労組新聞より

アメリカとはどういう国か

田原 敬

戦後七十年が経ち、当時のことは忘れる程の時間が経過した。

最近『この国のけじめ』（藤原正彦・文藝春秋社）を読んだが、その中で次のようなことが述べられている。

ルーズベルト大統領は、米英ソのヤルタ会談で、ソ連の対日参戦と引き換えに、満州におけるソ連の特権、南権太の返還、千島列島の献上を密約した。

ところが日本はソ連参戦の五日後、ソ連軍が日本本土に上陸する前にポツダム宣言の受諾を昭和天皇が聖断。あわてたスターリンはトルーマン大統領に対して、密約の内容と同じ要求をすると同時に、北海道の北半分をソ連領とすることを要求したが、トルーマンはこれを拒否し、アメリカの単独統治を決定。

スターインの要求が実現していれば朝鮮と同様に、日

本は南北に分断されていたであろう。

トルーマンの英断は日本を救うことになつたが、それ以降のアメリカの対日政策は、日本にとつて得たものと失つたものとでは失つたものがはるかに大きいと言わざるを得ない。

先ず、新憲法や教育基本法を押し付けられたことである。

一九〇七年のハーグ条約は「占領国は現地の制度や法令を変えてはならない」と決めているが、それに違反している。

もう一つは、アメリカ型民主主義の名の下に、武士道精神など我が国にあつた「かたち」や道徳を徹底的に破壊したことである。すなわち誠実、忍耐、正義、勇気、憚隠、公の精神、礼節、孝心、名誉と恥、卑怯を憎む心などは日本の至宝であったが、それらを破壊した。

さらにアメリカは日本弱体化のために、眞のエリートを根絶の意図で旧制高校を廃止した。その結果自由、平等、人権、個人の尊厳などの美辞麗句を後生大事に奉じ

続ける世論、それを代弁するメディアが三権の上に立つ結果となってしまったのである。

科書として使われ、NHKは十週間も、ラジオで「真相はこうだ」と放送させられた。

この他にアメリカが日本に与えた致命傷は、占領後間もなく実施した新聞雑誌、放送映画などに対する厳しい言論統制だった。

戦争についての罪の意識を日本人に植えつける宣伝計画に基づいたものである。

二発の原爆と大空襲で一般民間人三十万人を大量虐殺したアメリカの未曾有の戦争犯罪を日本軍の残虐性と一方的侵略を誇張することで、帳消しにしようと企んだものである。

その結果、占領軍や米国に対する批判、大がかりな検閲への言及、極東軍事裁判に対する批判、アメリカによる新憲法の起草への言及、天皇の神格性や愛国心の擁護、日本の大東亜共栄圏や戦犯への擁護が厳禁された。

さらに、昭和二十年十二月には各学校における歴史、地理、修身の授業を中止させ、「太平洋戦争史」の宣伝文書を新聞各紙に一週間連載、そして学校ではこれが教

以上の内容を読んで、戦後の日本とアメリカとの関係、アメリカとはどういう国か、ということについて考えさせられるものがあった。

(注) 藤原正彦著『この国のけじめ』の中の

「祖国愛—おまじないの解けない国民—」を参考



拙著『悪徳の世界史』から

浅井 壮一郎

マックス・ウェーバーは「歴史・社会学の見方は、立場によつて異なる。立場の明示が重要」とした。

『悪徳の世界史』の立場は腐敗史觀である。原点はフイリピンでのパートナーT氏が、白昼堂々射殺された事件で、連日CNNで報道された。直後、共産ゲリラが「T氏の会社の虐げられた労働者の復讐だ」という犯行声明をだした。彼の会社では十年で二十五人の死亡災害をだした。Tは常常々「できない悪い事はない」と豪語し、その通り実行し殺された。この背後に中国の帮という秘密結社があつた。近代の帮は反清抵抗の鄭成功軍の残党が少林寺に立て篭った地下組織で、義和團・共産党も上海の青幫・紅幫もこれから産まれた。蒋介石は青幫の殺し屋だった。こうした組織による陰謀・腐敗を悪徳と呼び、「できない悪い事はない」の利益追及精神を戦鬪意欲、反抗する精神を敢闘精神とし、歴史を両者の対立と見た。

ギリシア人は歴史を善と悪の循環と見た。キリスト教時代、西欧人は歴史の良い面しか見なくなり、その裏に他地域に対する蔑視的歴史觀があつた。ルネサンス以後の科学的諸発見に支えられて理性の勝利を確信し、この格差を「西欧の自由理性」「アジアの束縛理性」「その他の未開理性」の能力格差とした。このように歴史觀といふのは一方的で、だとしたら善の歴史觀に対抗してその裏の悪徳を検索するのも一理ある。

ギリシア人は「公正か、不正か」で政体を分類した。君主制と僭主制、貴族制と寡頭制、民主制と衆愚制に区分し、変らざる人間性によりこれらの政体間を歴史が循環すると考えた。権力が腐敗するのも人間性、腐敗権力に反抗するのも人間性。変らざる人間性は歴史の原動力で、戦鬪意欲と敢闘精神の世界だった。

日本でも、聖武天皇の仏教狂いが大災厄をもたらした。大仏は青銅製とされてきたが実は銅と砒素の白銅だった。砒素は高温で気化する。高温の鋳造作業が多くの砒素中毒を発生させ、金と水銀のアマルガム溶液を表面に塗り、

松明で水銀を蒸発させ金を固定する大仏表面の金鍍金がさらに多く水銀中毒を発生させた。

問題はこの大惨事は渡来人勢力によつて仕組まれたことで、僧良弁・行基が中心になり、新羅系の宇佐神宮や近江高島の白髭神社が協力し、多賀城の百済王氏が協力して、陸奥産金まで仕組んだ。当時、山口の長登鉱山が開発され、秦氏系の豊前香春岳の採銅所の銅が余り、価格が急落した。従つて、秦氏の寺で聖武天皇が望んだ丈六の乾漆仏像が、四百トンの大仏になつた。銅事業の救済策だつた。問題はこうした人々は皆渡来人で、その結果、互いに褒めそやし大榮転したことだ。

韓非子はこうした「臣下が徒党を組み互いに褒めそやし、利益をむさぼること」を、王権を蝕む最悪の害毒とした。このような事件は現在でもある。

明治時代、『大韓毎日申報』の編集者、申采浩は満州における朝鮮人を尖兵として満州回復を主張し、朝鮮史学会が支持した。朝鮮人はアメリカ・日本にも移住した。申らは外国の同胞が祖国に忠実に活動し、新たな国を創

造すべきことを熱心に進めた。現在の在米・在日の韓国人団体はその流れにある。慰安婦像だけでなく、トヨタ・リコールの米国での火付け役は在米韓国人が関わっている。最近の強制労働賠償提訴事件は裏で浦項製鉄が支援しているとロー・ダニエルは伝える。

先日、「えなりかずきが〈朝鮮は嫌いだ〉と発言したのでフジテレビで干される」という記事が新聞に出た。フジテレビは韓国系に乗っ取られたという。

日本で毎年二万五千人以上の外国人検挙者があり、半数が中国人で、韓国人は三千人だ。日本人は全世界で六百人。人口比率で見ると韓国は最悪だ。この事実をマスコミは何故取上げないのか。日本での慰安婦問題も、吉田清治の「濟州島で二百人の奴隸狩りをした」という告白捏造記事を朝日の韓国系の記者が大々的に取り上げ火がついた。このように、マスコミ・芸能界への朝鮮系の進出は韓非子のいう「互いに引き上げあう」害悪ではなかろうか。慰安婦像撤去は日本も韓国人犯罪碑を建てて対抗し、相手が恥と思えば同時に取り払えばよい。対待の論理を知るべきだ。

人工知能時代の社会

野瀬 隆平

人工知能がより進化したら社会はどう変わるのか。

二〇四五年には、全人類の持つ知能を超える人工知能（A.I.）が出来るという。本当なのかと疑問に思う一方、この分野が予想以上に速く進歩しているのを見ると、まんざら「未来の空想」ともいえない。自分が生きている内のことではないかも知れぬが、少なくとも孫たちが活躍する時代の話であり、全くの他人事ではないのだ。

ところで、いわれているようにA.I.が大きく進化した場合、社会や経済はどのような影響を受けるのだろうか。コンピューターやインターネット、更にはビッグデータの活用やI.O.Tで、すでに大きく変わっている。これまで存在していた仕事がいつの間にか無くなっている例も珍しくない。

働く場の環境は、今後も予想以上の速さで変わつてゆくだろう。これまで人間でしかこなせないと思つていた

作業も、A.I.やロボットがより効率的にこなし、その職場から人がいなくなる。

問題はそこで仕事をしていた人たちがどうなるかだ。より創造性を求められる分野か、あるいは心を持つた人間にしかできない仕事に移るしかない。

これまで社会の中間層を形成していた人たち、いわゆる事務系サラリーマンなどは徐々に少なくなり、代わってより所得の高い創造的な仕事か、あるいは逆にこれまで以下の所得しか得られない仕事をする人たちが増えてくる。その結果、格差が益々広がる。

A.I.やロボットという生産手段を持つ企業は富をこれまで以上に蓄積する。しかし所得が下がる人や新たな職が見つからない人が生まれ、働く者に支払われる総賃金は明らかに低下するであろう。これは単に所得が低下する側の人間だけの問題ではない。資本を持つ側にも問題が生ずる。いくら財やサービスを作り出しても、それを買う人がいなければ商売にならないからだ。

これまでとは異なった概念の新たなシステムを構築しなければ、経済・社会が成り立たなくなる。

一つ考えられるのがワークシェアリングである。少なくなつた仕事を分かち合う方法だ。しかし、一人あたりの労働時間が短くなつた分、賃金が減らされるかも知れない。その減少分を政府が補てんすることになるのだろうか。オランダに成功例があるが、日本でもうまく導入することが出来るのか。今日、問題となつてゐるサービス業などの悪しき労働慣行を無くすことが先決かも知れない。

もう一つは、社会保障の新たな考え方として、国民の一人ひとりに大人にも子供にも、お金持ちにも低所得者にも一律に同額のお金を配るという、ベーシック・インカム制度（B.I.）の導入である。これこそがA.I.とロボットが支配的となる社会で、最もうまく機能するシステムだと主張している人もいる。

日本には現在多様な社会保障制度がある。年金制度、生活保護、児童手当、奨学金制度、失業保険などなど。複雑で不公平感があるのは否めないが、このB.I.を取り入れれば、すべての国民に一律に給付するので、行政コストもかかりず、かつ公平で不正受給の問題も起こりえ

ない。従つてB.I.こそがこの問題の解決の切り札だとう意見だ。

この制度の財源も大いに議論の対象になるだろうが、それだけではない。働いていなくてもお金が貰えるというのは、人の労働に対する倫理観など、人間と社会のかわり方についての本質的な問題を含んでおり、そう簡単には結論が出せそうにない。

ところで、アメリカの新しい大統領、トランプ氏は労働者の雇用を守るために、海外に生産拠点を移すことを止めさせ、輸入品には高い関税をかけると公言している。このような対症療法ともいえる方法で問題が根本的に解決できるとは到底思えない。

A.I.やロボットの開発で最先端を行くアメリカにおいて、近い将来労働者が職を失う危険が迫つたときに、この大統領はどう対処するのであろうか。

まさか、産業革命のときの機械打ち壊し運動のように、A.I.やロボットを打ち壊せとはいわないが、どうだろう。

A I、B I、そしてH I

市川 忠夫

とある駅で電車に乗り、座席に座った。座席は全て埋まっているが、立っている人は少ない。ポケットでブルブルが始まつた。取り出してフタを開けると、メールが一通届いていた。読み終えて目を上げると、向かいの席の人たちはスマホに熱中している。座席の七人のうち五人がスマホを握っている。私はハツとして、右手のガラケーを握りしめた。得も言えぬ恥ずかしさが込み上げてきた。足元を見る。向かいの座席の人は皆、靴を履いている。私だけがわらじを履いているかのように感じた。パソコンが一人一台になつた頃までは、世の中についていつたが、この十年の間に遅れてしまつた。私が遅れたというよりも、世の中が急速に進んでしまつたのだ。

四勝一敗で勝つた。十一月には、日本のA I囲碁ソフトが、趙治勲名誉名人に一勝した。鋭い解説が持ち味の趙さんがA I囲碁に負けるなんて、びっくり仰天だ。囲碁は、チエスや将棋に比べ盤面パターンが桁違に多く、コンピュータは当面人間に敵わないと思われていた。しかし、コンピュータの高性能化と深層学習（ディープラーニング）なるA I技術が、こういう驚きの結果を生み出したようだ。学校を一夜漬けなる超浅層学習で乗り切つてきた私には、深層学習が何なのか全く分からない。しかし、このA I技術は極めて汎用的で、ビジネスなどで広範に応用できるといわれている。

このところ専門家が、新聞、本、テレビなどで、I T（情報技術）の急速かつ広範な発展に伴い、社会が大きく変わることについている。モノ作りやサービスが効率化し生活がより快適になるならば、よいことだ。しかし、労働者として長い間働いてきた感覚からは、生活を支える所得を仕事から得ることが最も大事と感じる。

昨年（二〇一六年）三月、米国のA I（人工知能）囲碁ソフトが、世界最強といわれている韓国のプロ棋士に

A Iをはじめとする最新のI Tは、普通の人間の仕事

を大部分代替していきそうだ。そうなると今後の仕事は、A I を駆使する仕事と A I に使われる仕事になる。前者は少数の人の仕事、後者は大部分の人の仕事になる。また後者は A I ではできず、人間はやりたがらない仕事であり、その量もあまり多くないであろう。その結果多くの人が仕事を失う社会、あるいはワークシェアリングによって労働時間が大幅に減り、所得も少なくなる社会になりそうだ。既に先進国の一端では、I T + 発展途上国での労働力で、似たような状況になつてているように見える。これは非常に困ったことだ。

仕事がなくなることを心配している専門家は、A I の次は B I (ベースツイーンカム) を考えなければならぬ、といつている。B I は、仕事とは無関係に一人ひとりの所得を保障する社会制度である。確かに、B I を導入すれば生きていくことはできるが、本当にそれで幸せになれるだろうか。

B I で思い出すのは、米国の先住民居留地に住む人々である。テレビのドキュメンタリー番組で見た。かつて

は、裸馬に乗り活き活きと暮らしていた人々が、今は一定区画に押し込められ、食料は適度に与えられているが全く活気のない生活をしている。A I が発達すると、A I に使われる人々は、この先住民に似たような状態になつてしまいそうだ。スマホを持つていなくても、A I が分からなくとも、日々を忙しそうに過ごしている私にはそう思えてならない。それでは、A I 、B I とともに生き活きと暮らすには、何が必要なのだろうか。

A I 、B I と来たのだから、次は C I に決まっていると思ったが、どうもピンと来ない。D I 、E I ……と進めていくと、「あつた！」

H I (ヒューマンインタレスト) だ。英和辞典を引くと、(新聞記事などの) 読者の関心を引き付けるもの、三面ネタとある。そうなのだ、人間が関心を持つものが仕事なのだ。絵や音楽などの芸術、詩歌や小説などの文学、陸上競技や球技などのスポーツ、仏教、キリスト教、イスラム教などの宗教、等々が H I だ。

A I 、B I 、そして H I の三つにしつかり取り組んでいかないと人間の未来はない。

ADSL問題

新田　由紀子

事の始まりはインターネットプロバイダーOCNからの「重要なお知らせ」メールだった。パソコンにつないでいるADSL回線によるインターネット接続が、来る三月でサービスを終了するという。寝耳に水の知らせだ。

考えると頭が痛くなりそうなので放つておいた。

数か月して舞い込んだのは折りたたみのハガキ。赤字で「重要云々」とある。しぶしぶ中を確認すると、ADSL接続に代わるサービスが「お客様限定特典付き・お早目に」と記されている。

代替選択肢は「OCN光」「OCN光二段階定額」、もうひとつは別枠で「OCNモバイルONE」とある。

それぞれに細かい字でごちゃごちゃ書いてある。さあ、面倒だ。調べて悩んで考えて決めて乗り換えなくてはならない。そういうえば、何年も前に「インターネットは高速ブロードバンドへ」とかで、「光」キャンペーンのDM

やメールが盛んに放り込まれていた。高速・大容量通信に飛びつくほど利用していないし、料金も割高だし、頑として旧来のADSLのままにしていた。それがいよいよ強制的にきたのだ。観念して、広げたハガキをベタツと冷蔵庫に貼って緊急案件とした。

巷ですなるインターネットをわが家でもと、勤務先からパソコンを下げてもらつて導入したのは、二十年以上も前のことだ。当初は電話回線によるダイアルアップ接続で、パソコンの背面に電話コードを差し込み、隣の口からのコードを電話機につなぐというものだつた。パソコンで接続操作を始めると、ジーコ、ジーコとダイアルを回す音がして、妙に納得する使用感があつた。

数年たつと、ダイアル接続はADSLに取つて代わつた。モデムとスプリッタを介して電話もインターネットも同時に使え、二階のパソコンも接続した。廊下や階段にケーブルを這わせ悪戦苦闘して開通させた日、子供たちと歓声をあげたものだ。

今パソコンはリビングのデスクトップ一台しかない。

定年暮らしの単身所帯には、オーバーなサービスと抱き合わせのADSL契約も見直しが必要な時にきた。

超高速・安定的な固定回線の主流「光」はまだまだ高いし、いまさら知らない。となると、選ぶのは「OCNモバイルONE」なのか。しかし、パンフレット一枚ついているわけではなく、内容がいつこうに把握できない。おまけに、「お申込み・お問合せ」はウェブサイトかカスタマーサービスへ、とつけない。こちらは、人間相手ならなんとかなる年配者、相互応答的な商品説明が欲しい。かけ続けた末にようやくつながった電話口では、「なんの用事だ」と問い合わせられてから、後日の予約日に向こうから電話がかかってくるしくみ。まだるっこしいつたらない。ウェブで入れば、IT通信用語や目新しい商品の密林に迷い込んで時間ばかりがどかつと過ぎる。「3G・4G/LTE」「MVNO業者」「Wi-Fi通信」「無線LAN」「モバイルルーター」「ポケットWi-Fi」「ギガ・メガバイト」「SIMカード」などなど。「モバイル通信」に的を絞り用語を調べて意味を組み立てる。

わが家のADSL問題は極めて満足のいく解決に至り、浮いた毎月の経費は異議なく晚酌代に回る。

それを切り分けて出てきた疑問を繰り返し問い合わせる。ある程度商品内容がわかつてきたところで、カスタマイズをしてみた。すると、代替案の通信容量一〇ギガバイトは過剰で、その三分の一で充分なこと、毎月の契約容量は随時変更できること、モバイルルーターはレンタルではなく購入が得策なこと、などが確認できた。

ネット注文の最新型NECモバイルルーターが届いた。バラバラの部品とナノSIMカードがセットになっている。頼りの取説はウェブからダウンロードを、と書いてあつたのには呆然としたが、もう戻りはできない。心を鎮めて準備を整え、吉日を選んで一気に組み立てた。爪の先ほどのSIMカードをおそるおそる差し込み、初期設定して始動する。パソコン側にも指定データを入れて段取り確認試行錯誤孤軍奮闘三時間。とうとう、ワイドスクリーンのデスクトップパソコンが手のひらの大きさの無線ルーターでインターネットにつながった。

シユガーボートがやつてくる、パナマからハバナへ

細 谷 博

「デーイ、デーイ！ シュガーボートがやつてくるぞー！」と電話の受話器を握ったまま私が叫ぶと、周り

の同僚たちがどつとどよめいて、それが歓喜の合唱に変わつていつた。現地では本来はバナナボートなのだろう

がパナマ運河を抜けてはるばる太平洋を越えて来る船便に積んでくるのは、まだ正式には国交が回復していないキュー・パからの砂糖きび、即ちシュガーケーンが主な積み荷だったので、その不定期便を我々はシュガーボートと呼んで、待ちわびていたのだった。シュガーボート到着のニュースで茨城の工場から三人の梶包のプロが、専門器具を手に直ちに横浜の埠頭に向かつた。

話はこの時から一年前にさかのぼる。東京駅にほど近いビルの八階の中会議室で鬱をたくわえた五人の外国人が我々と一週間缶詰状態で密度の濃い打ち合わせをして

いた。彼らは我が国とは国交のないキューバのカストロ首相の右腕だつたチエ・ゲバラ科学工業相直属の部下たちで、基礎科学や医学応用の広範な分野を一発でカバーする装置の買い付けに来たとのことで、一流国と肩を並べられる装置をそろえてくれとのご要望であつた。

今思えば、昨秋亡くなつたファイデル・カストロ氏の最大の業績は医療体制の整備だといわれている萌芽が、すでにこの頃からあつたのだ。

彼らのショッピングリストには、電子顕微鏡、NMRなどの電子装置、質量分析計、アミノ酸分析計などの分析装置、赤外や紫外可視域などの分光光度計などなど広範にわたり、彼らの期待に応えるための機種選択には、遠い未来における歴史的評価に耐え得る良心を込める必要があり、こちら側も一週間のあいだに工場の設計者、応用開発者に、中央研究所の先進技術研究者まで加えて全方位対応で臨んだ。

その結果として、当時の单一契約としては破格の二億七千万円で話がまとまつたが、いよいよ契約という段になつて、国交のない共産主義国にこれら高度な装置

を持ち込むことは国家犯罪を形成し、我々はその首謀者として牢につながれるのではないかという疑念が黒い雲のごとくもくもくと湧いてきた。

この思いを部長にぶつけたところ、話はトップにまで伝わり、副社長が直々に「万が一の時には君たちの骨は必ず拾うので、命がけでやつてくれ」とのお言葉を下さった。「骨を拾うとはどういうことなのかな」という大きな疑問を持ちながらも、その場での契約に踏み切った。そして約八か月後に装置は、横浜港向けに出荷された。出荷に当たっては盛大にお祝いをした。

ところが、この見込みは甘かつた。最高精密度の装置は長時間港の塩風に当てたくない。しかし、共産圏からの船は国際同盟に入っていないので寄港予定は船新聞には載つておらず、専門商社の裏情報に頼るしかない。

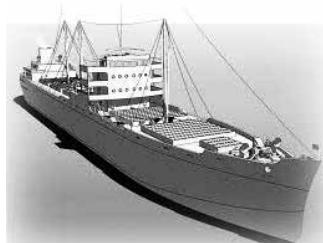
そういう状況がひと月、二月と続き、工場長からは「おいつ！ このままじゃ一器械がみな腐っちゃうぞ！」と脅しがかかってきた、その時の冒頭のシユガーボート到着の電話であった。

工場から来た三人は山下埠頭に到着すると早速工具を

取り出し作業にとりかかった。

七つに分かれた大きな木箱の腹に刷り込まれた仕向港PANAMAの文字からPとNとMを削り取るとAのみが三つ残る、その空いたところにH、V、Nと白く刷り込むと、なんとそこにはHAVANAという仕向港名が浮かび上がる。それはキューバのマエンポートである。

輸出記録にもないこれらの装置のなかには、現在も使われているものもあるらしい。きっと傍によると甘いシユガーケーンのにおいがすることであろう。



P A N A M A H A V A N A

『フィガロの結婚』ウイーン国立歌劇場日本公演

川口 ひろ子

二〇一六年十月、ウイーン国立歌劇場の日本公演、モーツアルトの『フィガロの結婚』を鑑賞した。会場は山下公園を見下ろす神奈川県民ホール。

舞台はアルマヴィーヴァ伯爵邸。伯爵は廃止と決めた領主の特権、初夜権を取り戻そうと必死だ。伯爵家の下僕フィガロと恋人のスザンナは晴れて結婚しようとしている。伯爵夫人は夫の浮気に悩み……というお話。

初演は一七八六年、時あたかもフランス革命前夜。新時代の到来を感じさせるこの時代の空気をモーツアルトは音楽で完璧に表現しているといわれ、オペラの最高傑作としての評価は高い。

以前は、下剋上の革命劇的な上演が多かつたが、現在はいつの世も変わらない人間の欲望を皮肉交じりに語る心理劇としての上演が多い。

多様な演出が行われ様々な舞台が出現する今日の日本で、今回の公演も大変ユニークだ。名舞台とされるジャン・リピエール・ポネルのこの演出は、ウイーンではもはや過去の作品として上演されていない。過激な新演出を嫌う保守的な日本のファンのための特別仕様の舞台だという。

指揮は、世界に君臨するカリスマ、リツカルド・ムーティ。股関節の病を克服しての来日というマエストロは、盛大な拍手に満足そうであった。年齢を重ねずつかり円満居士になつた感じで、かつて、彼の舞台に張りつめていたピリピリした緊張感はすっかり消えている。

先ずは序曲。この世のことをからかうような、モゾモゾと弦くファゴット、弦楽器が優しく応える。音色は柔らか、ウイーンフィルの演奏はたちまち私たちを夢の世界に運んでくれる。開幕だ。

今は亡きボネルの演出は、人物の性格描写や感情表現が極く控えめで、現代の過激なオペラ演出を観なれた者

には物足りないが、これが四十年前のスタンダードなのだろう。落ちついた色使いと細部にまで神経が行き届いた舞台装置が素晴らしい。当時の身分制度や人々の暮らしぶり等、子供の頃本で学び想像したこの時代のことを、

直ちに視覚で解させてくれる。

第一幕は半地下の使用人の部屋、続いて広々とした伯爵夫人の寝室、次に沢山の銃が置かれた伯爵の部屋、そして、フィナーレはデートの場となる夜の庭だ。特筆したいのは夜明けのシーンだ。たわけた一日の騒ぎは納まり、徐々に空が明るくなる。暗黒の闇に光、フィガロたちの新しい時代の到来を暗示しているようだ。

ムーティ門下の歌手たちは必死に彼のタクトを追つていたが何と言つても力不足、今後に期待したい。例外は、アルマヴィーヴァ伯爵を演じたベテランのイルデブランド・ダルカンジエロだ。脂ぎった広い額、オールバックの長髪、豪華なガウンを翻して、次々とパワーハラを試みる憎らしき御殿様。ホール一杯に溢れる凄みさえ感じさせるバスバリトンの響きは、今が旬。世界のトップシン

ガーの実力の程をまざまざと示している。

オーケストラの美音と妙技、格調高い演出、懐々としたテンポ、今回の公演はボネルの好みにすつきりと統一されていて、良き時代のオペラの美味を存分に味わわせてくれた。新人歌手への不満は伯爵役のダルカンジエロの好演で帳消しだ。

こみ合う終演後のロビーで、人波の向こうに同好の士S先輩の姿を発見。「どうでした?」の問い合わせに、親指と人差し指で丸を作つて嬉しそうにウインク。「もちろん最高よ」のサインを返してくれた。

しかし、私は先輩のように素直に賛美はできない。ここ数年、時流に乗り遅れるな!とばかり、活気のある古楽風演奏やドイツ系の濃厚な読み替え演出を必死に追いかけているうちに、私のティリストは変わったのだろう。保守的な日本のファンのためにという今回の特別仕様は、本場の最高水準の作品とはいえ、いま一つ私に合わなかつた。

ヴィオラの魅力

藤原 道夫

若い頃からコンサートによく通い、クラシック音楽に親しんできた。今は主に定期的にオーケストラの演奏を楽しんでいる。演奏が終わると指揮者は団員の熱演に感謝し、あるいは儀礼的に、必ずコンサートマスターと握手する。時にチェロ(Vc)の首席奏者に手を伸ばすこともある。そして活躍した楽器奏者(ホルンや打楽器など)に次々と立ち上がるよう指示する。そのたびに聴衆は拍手喝采、この場面はオーケストラを聴く楽しみの一つでもある。ヴィオラ(Va)奏者に注目すると、このような機会が滅多にまわってこない。聴衆にとってもVaがオーケストラの中でどのように音創りに貢献しているか分かり難い。ところが音楽を聞き込むにつれ、Vaの響が興味深くなつていった。

モーツアルトの時代、Vaはヴァイオリン(Vn)より低くみられていた。彼はVnがVnと同等に活躍できるこ

とを示すために、「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調」K364を作曲した。それぞれの音域で両者がメロディーをかけ合うのは確かに面白い。

私がVaの響を意識し始めたのは、Vaが二丁になる弦楽五重奏曲を聴いた時から。弦楽四重奏曲に比して音楽が一段と深くなり、音が立体的に聞こえる。私見では、「弦楽五重奏曲ハ長調」K515と「同ト短調」K516はモーツアルトの最高傑作に入るのではないかと思う。かつて音楽鑑賞団体「日本モーツアルト愛好会」に所属していた時、私が希望して頂いたケッヒエル(K)番号は516だった。この曲を生の演奏で聴く機会は滅多になかったが、これまで数回聴いている。K515とK516を収めたCDではアルバン・ベルグ四重奏団にVa奏者が入った演奏が素晴らしく、私の愛聴盤となつてている。同じ曲のメロス弦楽四重奏団を中心とした演奏も味わい深い。

Vaの音に注目したもう一つの理由は、モーツアルト作曲「弦楽四重奏曲ニ長調」(プロシヤ王第一番)K575を聴き込んでから。この曲では他の四重奏曲に比してVcが活躍する。その響きをVnの音に馴染ませてしているのが

Va の響き。」)う考えるといふの弦楽四重奏曲の演奏の成否は Va 奏者の力量にかかるべく思う。

最近世界的に活躍している数人の Va 奏者の演奏を聞く機会があった。中でも二〇一四年東京春音楽祭で Va 奏者今井信子らが演奏したバッハ原作の「ゴーレードベルク変奏曲・弦楽三重奏版」(シトコヴェツキー編曲)を聴く機会を持てたのは、私にとって画期的なことだった。音域の異なる三種の弦楽器の奏する音が混然一体となって音楽が展開される。三者の力量が高いレベルで一致している時にこそ、この曲の素晴らしいが發揮されると思う。当夜の演奏は理想的で、ピアノ独奏曲とは違った味わいを楽しんだ。その後 Va 今井信子、Vn J・ラクリン、Vc M・マイスキーによる同曲のCDを求めた。これまで聴いた中でも最良の音楽として愛聴している。

この所弦楽合奏団やオーケストラの演奏を聞きながら、無意識の内にも Va 奏者に目がゆき、彼らがハーモニー作りにどのように参加しているのかを聞き取ろうとしている。先年久しぶりにハーゲン弦楽四重奏団によるモーツアルト作曲ハイドン・セットの中から三曲の弦楽四重

奏曲を聴いた。この楽団の演奏はテンポが遅めで間のとり方がゆつたり、弱音の響きが美しい。そんな中で Va 奏者(ハーゲン兄弟のうちの女性)に釘付けになり、その響きを楽しんだ。二〇一六年十二月のN響定期演奏会(指揮S・デュトワ)でオネゲル作曲「交響曲第二番」を聴いたことは記憶に新しい。Va による暗い前奏に始まり、全体としても Va が活躍する。曲が終ると指揮者は必ずコンサートマスターと握手、次に中央近くの Va 首席奏者(当日の楽器配置によりそうなった)と固く握手、続いて Vc 首席奏者、コントラバス首席奏者の所に行つた。聴衆は勿論拍手喝采、この場面を大いに楽しんだ。

今ではオーケストラを聞く時に、Vaのみでなく楽器各パート奏者の動きにも注目しながら、それぞれの音がオーケストラの醸し出す音楽にどうかかわっているかを聴き取ろうとしている。そんな中で新たな課題も持ち上がりってきた。ファゴット(Fg)の響きだ。Fg 奏者はオーケストラの演奏後時々指揮者の指示で立ち上がる。どのように活躍したのか分かりにくい。今後これを聞き取れるよう能力を磨いていきたい。

ヴァイオリン

下山 健夫

今日日本には、世界的に活躍する若手のヴァイオリニストが多い。鈴木メソッドのおかげか、登竜門としての世界的なヴァイオリンコンクールで良い成績を上げる、特に女性の奏者が目立つ。大分前に諏訪内晶子のコンサートを聴いて帰ってきた時、たまたま点钟がTVでまだ十代の庄司紗矢香の迫力ある演奏にビックリし、彼女のコンサートを毎年必ず聴く様にしている。彼女の音楽的な成長を実体験している。

彼女達が使用する楽器も、いわゆる名器と呼ばれるものを、日本音楽財団、企業が余剰資金の税金対策、貴重品としての値上がり期待等から購入し有力な若手に貸与しているケースが多い。

フィレンツエのアカデミア美術館等にはストラディバリウスが美術品としてガラスケースのなかに陳列されているが、実際に演奏に使われている方が良いのではない

か。
ヴァイオリンの名器としてアントニオ・ストラディバリウスとガアルネリ・デル・ジェスの二つが著名なヴァイオリンであるが、現存する楽器数は圧倒的にストラディバリウスが多く、取引価格では希少価値からガアルネリ・デル・ジェスが高めと言われている。

昨年の初め渡辺玲子がヴァイオリンを受け持つ弦楽三重奏を聴き、彼女の受け持つデル・ジャスの音のパワーがありすぎ、チエロに比べバランスを欠いており、この楽器の特有の現象かと考えた。

其の為、同じ楽器を弾く神尾真由子とベルリン・バロック・クリステンの演奏会でバッハの協奏曲を聴きに行つた。彼女の演奏は決して全体の流れから離れることなく、奏法もふくめ私が懸念したことはなかつた。

六月になり五嶋みどりのコンサートにも行つてきた。彼女の楽器もガアルネリ・デル・ジェス。多分今、年齢からもあぶらの乗り切つていてる時で、シユーベルト幻想曲等の素晴らしい演奏だった。ただモーツアルトはもうすこし音が軽いものが私の好みでストラディバリウスの

音色が合っているのではないかと思った。この演奏会では彼女はスラックスで演奏したので如何に足を使って演奏するのかが良く判つた。女性の奏者がロングドレスで演奏する理由もただファッションだけではないと想つた。

私の聴観、庄司紗矢香も嘗ては日本音楽財団からヨアヒムと呼ばれるストラデイバリウスを貸与されて使用していたが、今は上野製薬から貸与された1729年製同じレカミ工を使用している。これに替えた当初一時音に迫力が落ちたとの評もあつたが今は自在に操つている。私が聴いた無伴奏リサイタルは後半に美智子皇后の臨席もあり、緊張感も一層あつて大変印象深いものだつた。彼女のレパートリーにモーツアルトの協奏曲があるので是非聴いてみたい。

今グアルネリ・デル・ジエスを使用している三人とも以前はストラデイバリウスを弾いていたので音のパワーを求めて楽器を替えているのだろう。



「リリー・マルレーン」を追いかけた男

松谷 隆

エッセイコラムに掲載された大平忠さんの『銀座八丁目のリリー・マルレーン』を楽しく読んだ。しかし最大

のショックは、それまでマレー・ディートリッヒのオリジナル曲と思っていたのが、別の歌手ララ・アンデルセンが一九三八年に歌っていたというくだりである。

ユーチュープでララを検索し、彼女の歌声を再生したら、マレーのとは全く違うマーチ風のテンポだった。

ノンフィクション作家、鈴木明の『リリー・マルレーン』を聴いたことがありますか』と分かった。
横浜市立中央図書館で八八年の新装版を借りた。まず前述の書評の記述はなく勘違いだった。だが、「ザグレブにはエレクトロニクス関係のF社の駐在員が八名」との記述で、当時のことを懐かしく思いだした。

物語は七〇年九月大阪万博ホールでのコンサートから始まる。著者はそれまでマレーを知らず、当然この歌を知る由もなかった。ただ、彼女のドイツ語のこの歌を聴き、胸に沁みこむ何かを感じたという。だが、何の行動も起さなかつた。

三年後、週刊読売のアンケート「私のすきな歌」で評論家の青地晨の「テレビでディートリッヒが歌った反戦歌が気に入った。タイトルを教えて」との依頼を見て、彼は「あの歌」と理解し、リリー・マルレーンのルーツ探しを決心している。

東京で、友人、知人やその伝手で音楽評論家たちから取材、そして戦争体験のある在日ドイツ人、フランス人、イギリス人たちと面談、情報収集している。特に、ドイ

スを開いていたので、記憶に残っていたのであろう。さつくネット検索すると、七五年文藝春秋社発行の

ツ人牧師からララの写真入り新聞記事を見せてもらい、彼女の生い立ちや歌手生活などの情報と七一年に彼女が自伝のキャンペーン中にウイーンで客死したことを知らされている。だが、日本ではルーツを探しきれなかつた。

ついに七四年四月、ヨーロッパに出かけた。フランクフルトを皮切りに、東西ベルリン、ボン、デュッセルドルフ、さらにララがナチに逮捕されたあと、脱走し隠れていた北海の孤島にまで足を延ばし、そこで彼女の名前がついた濃い暗紅色のバラを見つけていた。その後パリ、ロンドン、そしてユーロスマラビアのリュブリアナ、ザグレブそして最後はベオグラード放送局と約二ヵ月のルーツ探しは続いた。

作曲者シユルチエに三八年作曲のマーチ風の曲を弾いてもらい、著者が大阪で聴いたマレーの歌との違いを認識している。さらに彼がナチ党員だつたことで、印税の倍以上の罰金を科せられたことを聞かされている。

一方、四一年六月十四日二十一時五十七分にベオグラード放送局からのこの歌で、一躍ヒロインに祭り上げられたララは一年半後スペインで自宅監禁されるも、

四四年のベルリン大空襲のあと、終戦まで孤島に隠れた。その後、連合軍から大歓迎され、イギリス、アメリカ、カナダへ公演に出かけ、日本語に翻訳されている自伝まで書いていた。

マレーは三九年アメリカの市民権を取得し、ナチの帰還要請を拒否して四三年から二年強アフリカやヨーロッパ戦線の連合軍の慰問公演を行い、勲章を貰っている。

ヨーロッパ巡りの最後にベオグラード放送局を訪問し、ドイツ軍の命令でこの歌を四一年に流した担当者と面会した著者は訪問目的を話しても理解してもらえず、この旅行でのルーツ探しはできなかつた。

彼は七六年に『そしてわが歌』(TBS出版)を書き、その中で「マレーの最初のこの歌を万博で聴いていれば、ルーツ探しはしなかつたろう」と述懐している。そして他国でそれぞれのリリー・マルーンを探したという。男のロマン追求の姿勢に拍手だ。

『ゴジラ』『シン・ゴジラ』考

大越 浩平

六十三年前、一九五四年三月にビキニ環礁でアメリカの水爆実験があった。その実験（プラボーエクスperiment）は想定の倍以上で出力され、その結果設定されていた危険水域の六倍超に、死の灰が降り注いだ。水爆実験人災事故だったのだ。そのため設定されていた危険水域外で操業していた数百隻の漁船乗組員や周辺島民は、深刻な被曝を受けた。その中で第五福竜丸も操業しており、乗組員の久保山愛吉さんが死亡した。

映画『ゴジラ』は『キングコング』等の怪獣ハリウッド映画に刺激され、水爆実験に反対だったプロデューサー田中友幸が構想した怪獣映画だ。この怪獣特撮映画の企画は、東宝役員森岩雄一人が賛成し強硬に支持して実現がかなう。特撮には戦時中の国策映画特撮の異才円谷英二を据え、戦地帰りの本多猪四郎監督を配し『ゴジラ』が生まれた。

封切られた一九五四年に、『ゴジラ』は九六一万人の観客を動員した。当時の人口は八八二四万人だから、一割強の人々が押し寄せ大ヒットする。その後シリーズ化され、五〇年の間に米国作品も含め二八回制作された。

この年の『キネマ旬報』日本映画第一位は『二十四の瞳』で、『七人の侍』が三位だった。映画評論家の多くは『ゴジラ』をゲテモノ映画として酷評した。

ゴジラは、ジュラ紀以来、南太平洋の海底に棲息していた両棲恐竜が、原発実験の放射能を被曝し突然変異し発生した。それが水爆実験の刺激で活動を始める。そして日本に向かってくる。

何故なら、ゴジラは南太平洋の戦死者の靈が乗り移っている亡靈だからだ。さまよう靈はやつと帰国した。しかし祭られるべき行き場が見当たらない。ゴジラは荒れる、東京大空襲を彷彿させる程暴れまくる。日本国防衛隊（海上保安庁）の戦闘機に攻撃され、東京湾に沈み眠る。眠るゴジラに、殺戮の新開発エネルギーを使う。ゴジラは苦悶し一度海上に姿を見せ、命絶えて沈む。この光景に、沈みゆく戦艦大和に思いを重ねる観客もいる。二〇

一六年、映画『シン・ゴジラ』は大ヒットした。六〇年前、核開発国は大量の廃棄物を深海に捨てていた。それを食し、放射能に耐性を持つ新生物が米国海域で発見され、米国は極秘に調査していた。コードネームはGODZILLA。それが東京湾に現れた。

GODZILLAは、初代ゴジラのDNAを引き継ぎ、更に核エネルギー発生臓器を持ち、巨大な行動力と攻撃力、増殖力を秘め、未だに進化中の巨大不明生物だ。

そのGODZILLAが、三・一一、東日本大震災で発生した福島第一原発四基の核爆発によって目覚めた。

GODZILLAは広島、長崎、福島第一原発の核爆

発人災事故の三度の被曝国日本に向かい、ゴジラの墓場、東京湾を目指した。ゴジラは秘めたる能力を開花し進化させ、河川を遡上し巨大化して上陸、暴れまくる。米国

情報により、政府はこの巨大不明生物を「ゴジラ」と命名。

政府は、なすすべもなく危機管理に右往左往する。観

客は娯楽映画鑑賞から、いやおうなしに現実の東日本大地震災と福島原発の危機管理、避難生活を思い出す。

ゴジラ駆除に、総理は自衛隊の「防衛出動」を決定す

る。しかし自衛隊の作戦は失敗する。官房長官は、日米安保条約により駆除協力を在日米軍に求めた。米軍の攻撃により、ゴジラは東京駅で活動停止。ゴジラの活動停止はエネルギー蓄積時間であり、個体は増殖し再活動すると考えられた。再活動は三六〇時間後とされ、活動停止したゴジラ駆除に、核兵器の使用を日本は容認しカウントダウンが始まる。日本の科学者は、ゴジラを体液凍結凝固剤で活動を停止させるべく、薬剤の生産に全力を注ぐが完成に一日足りない。日本は何故かフランス政府に秒読みの停止を依頼し、聴き入れられた。薬剤作戦は成功し、ゴジラは東京駅で凍死する。

四度目の被曝が避けられた。

・石破元防衛大臣は、ゴジラは他国の意図を受けて攻撃していないのだから「防衛出動」ではなく「災害派遣」で対処するのが妥当と言う。

・東京駅で凍死したゴジラは「放射性廃棄物」だ。これは何處に捨てるのか。

・ゴジラ映画は考えさせる。

デイープ・スロート

平尾 富男

二〇一七年一月、第四五代ドナルド・トランプ米国大統領が誕生した。「不動産王」と呼ばれ、公職経験のない初の大統領となる。五十人以上に上る民主党の下院議員が就任式のボイコットを表明するという、就任前の大統領としては異例で、且つ記録的な低支持率が公表された。

折しもこのニュースをテレビで観ていて、四十三年前の一九七三年末にニューヨークに赴任した頃を思い出した。当時アメリカはウォーターゲート事件の真っ只中に在った。この事件はニクソン大統領の共和党再選支持派によって起こされる。七二年ワシントン市内のウォーターゲート・ビル内の民主党全国委員会本部に盗聴器を仕掛けるために複数の人物が侵入し逮捕されたのだ。

ホワイトハウスは関与を否定したが、ワシントン・ポスト紙が調査報道で追及。もみ消し工作も明らかになつ

た。アメリカ合衆国第三七代大統領（一九六九年就任）ニクソンは、ベトナム戦争を拡大した後、その収束に苦しんでいた。財政難にも苦しみ金とドルの交換停止に踏み切り、遂にこのウォーターゲート事件によって任期満了を待たずに辞任したのだ。その大統領職を辞任する際に、大粒の涙を流しながらテレビのブラウン管の向こうで国民に向かって口惜しさと怒りを顕にしていたのを思い出す。

大統領による盗聴行為を探るようワシントン・ポスト紙の記者に指示をした謎の人物は「内部告発者」「情報提供者」を表す「ディープ・スロート」と呼ばれた。当時のニクソン政権内部の重要な情報源の通称でもあった。ワシントン・ポスト紙は、記者が握る捜査情報なくしてウォーターゲート事件の真相を解明することはできなかつた。

しかし、「ディープ・スロート」の身元についてはへイグ元大統領首席補佐官など様々な名前が取りざたされていたが、記者は「情報源との約束で本人が死去するま

で公表できない。生存している間は明らかにするつもりはない」として口を割らなかつた。こうして、ディープ・

スロートの正体は、しばらくの間「米メディア最大の謎の一つ」とされてきた。一方で、沈黙を守つた記者魂にも賛辞が送られたのだ。

その後二〇〇五年になつて、ウォーターゲート事件の内部情報を提供し続けた謎の情報源ディープ・スロートの身元が明かされた。連邦捜査局（FBI）のナンバー2だったマーク・フェルトが「私がディープ・スロートと呼ばれていた男だ」と自ら語つて謎を解いたのだ。歴史はいつかその真実を明らかにするものだ。

因みに一九七二年に公開された成人映画の題名が『ディープ・スロート』（Deep Throat）だつた。リンダ・ラヴェースの主演で公開されると世界中で上映されるようになり、興行的に大成功を収めた。ビデオ化もされるといつの間にか我が家（当時は米国に住んでいた）にもビデオ・テープ一巻が隠匿され、それを伝え聞いたアメリカの友人・知人から貸してくれとの要望が頻繁にあつ

て、いつの間にか行方不明になつてしまつた。今考えると「何ということも無い」内容の映画だつたのだが。

『ディープ・スロート』の公開の半年前に制作されたハードコア・ポルノ映画『グリーンドア』（Behind the Green Door）は『ディープ・スロート』と共に、容貌抜群の女優を起用する「洗練されたポルノ」のブームを巻き起し、現在の「ポルノ黄金時代」の先駆けとなつた。主演女優はマリリン・チエンバース。すでにアメリカでプロクター・アンド・ギャンブル社のアイボリー石鹼のモデルとしてその顔が売れていた。

話をドナルド・特朗普大統領に戻そう。元モデルだったというスタイルも顔立ちも申し分のない妻を自らの横に侍らして、テレビの画面から世界中に笑顔を振りまく金満家、アメリカン・ドリームの体現者。アメリカ国民はヒラリー・クリントン元大統領夫人との一騎打ちの選挙戦で、僅差とは言えトランプ氏を選んだ。英語でTrumpとは、「切り札」、「頼りになる（立派な）人」を意味する。名は体を表してくれるだろうか。

マドンナのカレンダー

中村 晃也

友人からイタリア土産に「マドンナ」というタイトルの今年用のカレンダーを贈られた。ラファエロ、コレッジヨ、ボッティチエリなどのイタリア画家によるいろいろなマドンナが描かれている。

泰西名画を初めてナマで見たのは、メトロポリタン美術館である。ラファエロの描く聖母の着衣（ビロード）の色彩があまりにも鮮烈で、これまで見た美術史本の写真とは大違い。やはり本物を見なければ駄目だと痛感し、以後海外で機会があるたびに美術館を巡り歩いた。

ロンドンのトラファルガーの国立美術館は入口のロビーからすぐに印象派の展示室があるので便利だ。国民的画家ターナーの描いた田園風景やゲーンズボロの「夫婦像」が往年の英國を髣髴とさせる。

ルーブルにはガラスのピラミッド建造前から何回も足を運んだ。名画「モナリザ」の前で子供たちが床に座つ

て先生から説明を受けている様子を見て、フランスの子供達は幸せだと思った。デイビッドの「戴冠式」の緻密な描写や、ルーベンス工房による、メディチ家からフランス王妃になる「マリーの生涯」を描いた十数枚の大画面に圧倒された。ラ・トゥールの、少年イエスの持つ蠅燭の光に浮かぶ「大工ヨセフ」が特に印象的だ。

古い停車場を改装したオルセー、モネーの「睡蓮」で有名なオランジエリーも素敵だが、ブローニュの森の中にあるシャンティイーのコンデ公の城はミニルーブルといわれる珠玉の美術館だ。ニースのシャガール美術館やジベルニーのモネーの館、バルビゾン村のミレーの家、エクサンプロバンスのセザンヌのアトリエも訪ねた。いずれも個性があり捨てがたい。

マドリッドのプラド美術館は手軽な広さで、ゴヤ、ムリーリョ、グレコなどの作品が充実しているので、好きなところのひとつだ。スペインの誇る宮廷画家ベラスケスの「女官たち」に見られる立体感は感動なのだ。

マドリッド郊外にある夏の離宮エル・エスコリアルは、長大な廊下の左右に無数の絵画が展示され、歩く靴音が

不気味に思えるほど静かで、バルセロナでの有名な「ゲルニカ」の前の人だかりとは対照的だ。

アムステルダム国立美術館はレンブラントの「夜警」やフェルメールの「台所の召使」、ハルスの「愉快な酒呑み」など特長ある作品が並び、ゴッホ美術館では日本の浮世絵の影響をもろに感じる数々の絵が見られる。

ウイーンの美術史美術館はブリューゲルの「雪中の狩人」、「バベルの塔」などのコレクションが素晴らしい。 フィレンツエのウフィツツイ美術館では、宗教画の並ぶ暗い展示室から、明るい色彩に富んだボッティチエリの「ヴィーナスの誕生」の部屋に入った途端、これこそルネッサンスなのだと感激したものだ。

ヴァチカン美術館の豊富な絵画の並ぶ回廊を抜けて、

リニユール前のシスティナ聖堂のすすけたような天井画を見上げた時は、広い天井の隅から隅までの空間をデザインした構成力と、高い天井に上向きの姿勢で速乾性のフレスコを用いて素早く描いた画家の努力に驚嘆した。 ミラノのブレラ美術館はダ・ビンチの種々の設計図の下書きとともに「キリストの埋葬」があるが、建物全体

が古ぼけて薄暗い印象しかない。

ロシアはモスクワのブーシキン美術館も良いが、なんといつてもサンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館の膨大なコレクションと、エカテリーナ女王の西洋美術に対する関心の深さ、そして当時のロマノフ朝の財力は脱帽ものだ。

ボストン、シカゴ、ワシントンの各美術館の充実したコレクションや、グッゲンハイム美術館の抽象画や、大好きな印象派の絵画などについて書くには紙面が足りないのが残念である。

美術館の各展示室を出るときには、必ず振り返ってみることにしている。何気なく素通りした絵でも距離を置いてみると目立つ絵が必ずある。

現地で購入し、苦労して運んだ分厚い美術本が書斎に積んである。古本屋は市場性がないと、図書館もスペースがないとの理由で引き取ってくれない。

絵を描くのが不得手なくせに数々の世界の名画を見る機会を得たのは本当に幸せだったと思う。
最後に前述のカレンダーの贈り主に謝意を表したい。

二上達也先生を偲ぶ

鶴 飼 直哉

二上達也先生を偲ぶ

昨年（二〇一六年）の十一月一日、将棋の二上達也先生が亡くなられた。

我々の世代なら、将棋を知らなくても二上達也九段の名前は聞いた覚えがあるはずだ。タイトル戦挑戦権をめぐる升田幸三九段との死闘や大山十五世名人との壮絶な争いは、昭和四〇年代には一般紙面でも話題であつた。若い人には、羽生善治三冠の師匠といえば多分分かるだろう。二〇〇二年まで十四年間に亘つて日本将棋連盟会長を務められたり、アマチュアの指導にも熱心で、二上王将会や将棋ベンクラブの名誉会長も引き受けて下さっていた。

忘れられない光景

先生について、私には忘れない光景がある。二上

王将会で年に一度開催される旅行に参加して将棋の町天童に行つたとき（二〇〇五年）の事である。

一泊の将棋三昧の旅を終えて先生を囲む我々約十人の一行は、未だ時間に余裕があるので駅に行く途中にある駒彫師の店に立ち寄つた。先生が顔馴染みと言われる店主と話し込んでおられる間、記念のために駒に自分の名前を彫つて貰つた。そのあと「先生は今二階の展示室ですよ」との店主の声に階段を上つて行つた。

展示室の入口のそばに先生のお姿を見つけて近づいてみると、先生はお一人で、欄間に掛かった一枚の額を真剣な眼差しで見ておられた。先生の目線を頼りに見ると、木村義雄（第十四世永世名人）以下そうそうたる名人の名前を書いた永世名人一覧表であつた。その中でも大山康晴十五世永世名人の名の前で先生の目はまるで釘付けのように動かない。凜然とした光景であつた。大山名人の名前の前で先生は何を考えておられたのだろう。

自分の地位を脅かす若手棋士に対し情け容赦なく叩き潰しに掛かつた天敵とも言うべき大山名人との激戦の跡だろうか？

事実、そこには二上達也の名前は見当たらない。先生は大山名人から王将位を一年間奪取されたものの、名人位を賭けたタイトル戦に三回登場しておられるが、三回とも大山名人の牙城を崩せなかつた。

そんな事を勝手に考へてゐるうちに十分も経つただろうか。人の気配に気付かれた先生は一瞬照れたように見えたが、私に向かつて「やあ」とおつしやつたときにはその表情は、棋士でなければ大学の学者風と言われたいつも見馴れたものだつた。

二上王将会

二上王将会に入門してから先生が毎週顔を出して下さった三年間、先生との戦績は三十五勝一〇三敗だから勝率二割五分四厘、つまり四回に一回しか勝ち星はない。こんなはずではなかつた。

きっかけは将棋ペンクラブ主催駒落ち指導対局に二枚落ちで申し込んだことだつた。王将会の会場をお借りしての対局であつたので、入会のお誘いがあつた。

初陣は金星ではなかつたが「二枚落（上手が飛車と角

とを落すハンディ戦）で二上先生に三連続で金星を頂くのが目標です」と団々しく宣言して入会した。

将棋好きのアマチュアには、トッププロに指して頂くのは憧れだ。ましてや二上先生に教えて頂くことなど、夢のまた夢である。おそらくプロヒアマ全体の中で日本将棋連盟会長に一〇〇敗も喫した人はいないのではないか。だからこれは私には名譽ある栄光の記録なのだ。

午後八時になると先生を囲んで飲み屋で一杯やるのがまた楽しい思い出だ。熱爛がお好きな先生から将棋の世界の裏話など伺つていると、目の前におられるのが、一時代を築かれた二上達也九段であることを忘れてしまう。「私はプロの勝負師。たとえ二枚落ちであつても負けるのは悔しい。そうやすやすと鵜飼さんに三連勝などさせせるわけにはいきません」と言つて杯を傾けられる。こうなつたら蛇に睨まれた蛙である。目標達成は淡く消えて、いまや私は王将会の二枚落ち永久会員になつてゐる。

ここに改めて先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

ノンフィクション～クーデターと坊主頭～

大西 宏

〇が50代で、M社の研修部門を担当していたときのことである。思いもかけず、会社のサッカー部長のおはちが回ってきた。

「時間的に無理だろう、断つたほうがよい」と上司である担当副社長は反対したのだが、学生時代のサッカーの血が騒ぎだした〇のヤル気を止める力は誰にもなく、人事部のシエルターに逃げ込んだ形で、上司の指示は無視された。

チームは弱かつたが、いくつかのタイトルの中で、トーナメント勝負の天皇杯一本に全てをかけて「まぐれ」を狙うこととした。そんな心理状況や籤運に恵まれて、チームはベスト8まで勝ち進む。

ところが、ちょうどそのころ、〇のところへキヤプテンを含む3人の中心選手が、深刻な顔をしてやってきたのである。

「それは分かるのですが、僕らも優勝するためには覚悟を決めてやって来たのです」

彼らの顔色を見てこのままでは済まないと判断した〇は、「考えてみる」と、とりあえず彼らを追い返して、その夜、監督にキャプテンの申し出をそのまま伝えたのである。

そうしたら、監督は、とても読み切れない複雑な表情を浮かべて一言言った。

「一晩考えさせてください」

そして、翌日の午後のこと、頭を丸めて辞表をもつてきてさっぱりした表情で告げた。

「選手たちの信頼を失った以上、これ以上監督を続け

「部長、お願ひがあります。監督がどんなサッカーを考えているのかさっぱり分からぬ。この際、監督がほくらの考えた戦術によつて戦うようにしてくれませんか」

この時期の想定外の直訴に慌てた〇は、

「今この時期になんということだ。最後は監督が決めるもの。選手はそれに従わなくてどうするか！」

と強くなしなめたのだが、

「それは分かるのですが、僕らも優勝するためには覚悟を決めてやって来たのです」

彼らの顔色を見てこのままでは済まないと判断した〇は、「考えてみる」と、とりあえず彼らを追い返して、その夜、監督にキャプテンの申し出をそのまま伝えたのである。

そうしたら、監督は、とても読み切れない複雑な表情を浮かべて一言言った。

「一晩考えさせてください」

そして、翌日の午後のこと、頭を丸めて辞表をもつてきてさっぱりした表情で告げた。

「選手たちの信頼を失った以上、これ以上監督を続け

るわけにはいきません」

この時期に、監督を交代させるのは不可能だ。できたとしても新聞記事となり、みんなが傷つく。Oは動転しながらも、言葉を選びながら言つた。

「それだけ、自分が無になることができたのなら、無のまま選手たちの言う通りにさせてみてはどうか。彼らも子供ではないのだから」

しばらくの沈黙が続いたが、監督の答えは、

「分かりました。彼らの言う通りやらせましょう」

その後、「選手だけのミーティング」がくりかえされて、連帯意識と連帶責任によって、士気がこれまでになく盛り上がり、みんなの知恵がホンネで掛け合わされた。そして監督は後ろに回つて必死になつて選手たちをバックアップしたのである。あの言葉は「投げやり」ではなかつたのだ。

そして大晦日、決勝の前日がやつてきた。選手たちは新大阪の駅頭でもファンの声援に励まされ、新幹線に乗り込んだ。彼らの合言葉は「負ける気はせん!」——鼻歌交じりであった。

翌日の新聞各紙の2ページにある「人物評」にわが監督の功績が讃えてあつた。戦術が選手たちのものであつても、いやそうであるからこそ当然彼が受けるべき栄誉であった。他方Oの胸中には秘かに36年前の高校時代、全国大会の決勝で潰えた夢をやり遂げた思いがあつた。ところが——この選手主導のサッカーチームは、天皇杯を終えると「天国から地獄」とばかり連戦連敗したのである。下克上の規律がなかなか元にもどらなかつたからだ。選手たちは、若さの無限の力を知つたあと「タテのマネジメント」のないチーム力の限界を思い知らされることとなつたが、これは偏にOの責任である。

しかし、選手のクーデターと監督の坊主頭がなければ、日本一はなくG大阪も誕生していなかつた。

ザ・ブック

新井 良侑

うちに、思いが徐々に変わり、半年ほどしてイエスが救い主であると信じる者になった。まさにミイラ取りがミイラになつた。

学生時代、クリスチャンの友の下宿に遊びに行つた。

その時、彼が聖書を手に、モーセが紅海を分けてイスラエル人をエジプトから脱出させた話やイエスが死んで墓に葬られた人を生き返らせた話などを熱っぽく語るのを聞かされたとき、自分にはとてもついて行けない話だと思った。そして、彼からイエスを信じるように勧められたときも、「自分は宗教に頼るほど弱い人間ではない」と、うそぶいたものである。

そんなわたしが聖書を読むようになつたのは、社会人になつた年の夏、大学の後輩から誘われ、参加したあるクリスチヤンの集まりがきっかけであつた。実は、彼女が変な新興宗教に引つかかつたのではないかと心配になり、様子を探りにいったのだった。しかし、その集会で聞いた、「あなたがたは善をしようとしてはならない」という言葉が後々まで耳に残り、心の中で反芻している

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道のひかり」「一灯を掲げて暗夜をゆく」は多くの人の座右の銘である。わたしも、折々に聖書から光を得ながら、その言葉を自分なりに咀嚼し、親しみのある言葉に解釈しながら、糺余曲折の道を五十年あまり歩んできた。

聖書の言葉の「あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう」は、人は朝に生まれ、夕べに死すということであろう。一日は一日限り、今日は今日、明日は明日である。今日の思い煩いを明日に持ち越さないように、一日一日を懸命に生きてきた。石原裕次郎の主演映画の題名で流行語になつた、「明日は明日の風が吹く」である。

「わたしの欲している善はしないで、欲していない悪いは、これを行つてはならない」は、昭和の高度成長時代に植木等の名セリフ「わかつちやいるけどやめられない」である。

いろいろな難題に直面し、負けそうになつたとき、深い自己嫌惡に落ち込まないで、立ち直るきつかけを与えてくれた言葉だつた。

「治める者の歓心を得ようとする人は多い。しかし人のことを定めるのは主である」。人は、自分の利得のため、権力を持つてゐる人をおそれ、これに迎合するものであつて。少し寄り道し、地元に研究所がある化学会社に希望どおり研究者として就職できたわたしは、職場に馴染むまで、成績査定や転勤問題を非常に気にしていた。しかし、上司や同僚に恵まれたこともあるが、上司にゴマをすつたり、周りの人たちに余計な気遣いをすることもなく、充実した、生きがいのある会社生活を三五年あまり過ごすことができたのは、この言葉がいつも心にあつたからである。

また、相手からほめられると、すぐに木に登つてしまふわたしは、相手の頬みごとを無理と思いながらも安請けあいし苦しんだことがしばしばあつた。「るつぼで銀をためし、炉によつて金をためし、人はその称賛によつてためされる」とある。人は艱難辛苦でためされるもの

と思つていたが、人は称賛によつて試される者であることを身をもつて知つた。

「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものである、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である」は異邦人世界に、ナザレ人イエスを神の子、キリストと宣べ伝えた使徒パウロの言葉である。二千年來今日まで、世界中のあらゆる国にいる天の星の数ほどのクリスチヤンは、「聖書は神が息吹かれたものであること」をそれが置かれた地で実証してきた。今のわたしも、無きに等しい者であるが、その一人である。

会社を定年退職後、組織社会から解放され、この世のことにつづられない自由な日々を十二年あまり積みかさね古稀をこえたが、「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄つて、『わたしにはなんの楽しみもない』と言うようにならない前に」を感謝の心で、しみじみと玩味している。

あなたがたの内に いますキリスト、

栄光の望みである(コロサイ人への手紙二章二七節)

カツパドキアの遺跡

阿 部 典 文

現役時代トルコの首都アンカラを商用で訪れた際、近隣のアナトリア高原・カツパドキアのステップの中に、多数のキリスト教の修道院遺跡が残されていることを知った。現在はイスラム教国であるこの国に、何故、キリスト教の修道院遺跡が残されているのか大変な興味を覚え、余暇を割いて遺跡を訪問した。多少古くなつた記憶と、最近改めて学んだキリスト教発展の歴史を参照しながら、原始キリスト教宣教活動の残渣とされる遺跡の物語を以下に紹介してみよう。

キリスト教はローマ帝国のコンスタンティヌス帝による三百十三年のミラノ勅令により容認され、三百三十年、ローマ帝国の首都がコンスタンティノポリス（現在のイスタンブール）へ遷都された後は、アナトリア高原には多くの聖堂（教会）や修道院が建設され、キリスト教布

教の重要な拠点と化していった。

アナトリア高原は平均高度千二百メートルを超える寒冷の地であり、当時多くの大地震がエーゲ海・地中海東岸地方を襲い、都市や教会堂が破壊された。その為、イエスの「最後の審判」の前兆として人々は慄いていた。

このような状況で世の終末観が広がり、隠修士と呼ばれる特殊な宗教者が現れる。世に終末観が波及していく中で、彼らは、自己の地位や財産のすべてを捨てて、自ら孤独を求めて荒野に入り込んで行く。そこで極貧の生活を送りながら、世界の成り立ちについて深い思索をめぐらし、祈りの時間を重ねていた。そして高原の過酷な自然の中で、修道院を建設して神に祈りを捧げたのが、多数の遺跡として残されて今日に伝えられているのである。

ここでカツパドキアの自然の特徴にまず触れてみよう。遠い昔高原の東に連なる三千メートル級の幾つかの火山の噴火活動で堆積した溶岩や火山岩が降り積もり、広い範囲にわたり玄武岩や凝灰岩などの岩石地帯を形成した。

そして黒海からの湿った空気が、タウルス山脈に遮られ、この地方にもたらされた風雪と雨水の浸食、加えて寒暖差の激しさが岩を不思議な形に削り、カッパドキアの奇観を作り上げた。

この荒涼たる岩石地帯にキリスト教徒は何を求めたのか。あまりにも現実離れした景観であった事が、神への祈りと修業場所を求めた教徒たちを惹きつけたのである。原始キリスト教時代の一世纪から四世纪にかけて彼らはこの地に入ってきた。彼らの建設した洞窟聖堂や修道院は、カッパドキア全体で千を超えるといわれる。

四世纪中ごろ、この地方を襲つた大地震により、多くの聖堂や修道院が破壊された頃、この地方出身の修道士「聖バシリ」が現れて、東方正教会（ギリシアやロシア）に多大な影響を与えた「修道綱領」を著した。

聖バシリ（～三七九年）は、エジプトやシリア、メソポタミアなどを訪問。その砂漠の中の修道院で、飢えや渴きと闘いつつ、一人で黙々と、ひたすら神に祈る隠修士の姿にすくなからず疑問を抱いた。その為修道士の修業を規定した五十五項目よりなる『修道士大規定』を

著し、修道士の共同生活を推奨し、ここに現代もギリシア・アトスの修道院にみられる修道生活の基本原理を確立し、その実践の場として、アナトリア高原が選ばれ、多数の洞窟修道院や聖堂がこの地方に残されている。その中心がカッパドキアのギョレメ渓谷である。

一方このカッパドキア渓谷には、十世纪ごろ造られた人々の目を引く巨大な地下都市の遺跡が三十六ヶ所も確認されている。そのうちの最大の地下都市は収容人員が一千人に達する規模を持ち、地下八層にわたり、日常生活を維持するための諸施設が設けられている。内部空間はかなり広く、祭室や学校、台所やワイン醸造所、井戸やトイレ、そして最下層に墓所も設けられていた。このような巨大な地下都市の目的は、異教徒からの迫害を恐れ、最上層の入口は、緊急時に通路を遮断する石の扉が設けられていた。

以上に紹介したカッパドキアの遺跡は、十一世纪頃まではイスラス教徒との共存が保持されていたが、オスマン・トルコのイスタンブールの占領（一四五三年）によりキリスト教徒の祈りは終焉を迎えていた。

狐と獅子

松浦俊博

『君主論』が書かれた時代のイタリアを思い浮かべながら、昨年の夏、ボローニャを拠点として北イタリアの七都市を巡った。ボローニャ、フィレンツエ、ラヴェンナ、リミニには何度も行つたことがあつたが、フェラーラ、モデナ、パルマは初めての都市だつた。ボローニャは北イタリアの鉄道のハブ駅に当たり、訪れた都市はボローニャから普通列車でも片道二時間以内の距離にある。切符を自動券売機で買うたびに、難民だと思われる人が近寄つてきたのでかなり緊張した。

マキアヴェリが『君主論』を書いた頃のイタリアはまだ統一されてなく、ルネサンスの中心と言われるフィレンツエでさえ五強国の一につすぎなかつた。自動券売機での出来事から「ルネサンスのフィレンツエ」よりも「迷惑のイタリア戦争」が頭に浮かんだ。

イタリア戦争は、ヴァロワ家のフランス王シャルル八世による一四九四年のイタリア侵略で始まつた。一五五九年にハプスブルク家のスペイン王フェリペ二世とフランス王アンリ二世がカトーリカンブレジ条約を結んで和約するまで、六十年以上にわたりイタリアを舞台に行われた戦争である。名前はイタリア戦争だが、イタリアは舞台を提供しただけであり、イタリア各国と諸都市はこの時期に絶え間のない戦争と外交努力に駆り立てられた。生き残るためには、マキアヴェリが例えた「狐の狡知と獅子の勇猛」が必要であつた。近年のイタリアにおける難民問題も、地中海を渡つて一番多くの人々が到着する場所にあるから起こる。外国人が国境を越えて侵入するという点では、イタリア戦争に似ている氣がする。

イタリア戦争では、ナポリ王国の王位継承の要求をローマ教皇に拒否されたシャルル八世が自ら軍隊を率いてイタリアに侵入し、ナポリを占領して王に即位した。ナポリへの進路上にあつたフィレンツエでは、ロレンツオ^{二世}メディチの息子で無能な長男のピエロが単独でシャルルと交渉して、屈辱的な条件を認めたことから市民が

立ち上がり、メディチ家はフィレンツエから追放された。

そして、フィレンツエとフランスの外交交渉が始まるが、ここで登場するのがサヴォナローラである。托鉢修道会の一つであるドミニコ会修道士の彼はフェラーラ出身で、大聖堂やエスティンセ城に銅像がある。一見怪僧の風貌だが、フィレンツエではサン・マルコ修道院の修道院長を勤め、フィレンツエの腐敗やメディチ家の独裁体制を批判した。彼はシャルル八世のフランス軍を短期間の駐留でフィレンツエから撤退させ、市民から喝采をうけた。しかし、極端な教会改革を説く彼は、ローマ教皇から破門され、市民の反感を買いつき、シニヨーリ広場で火刑に処せられた。

その後もフィレンツエでは政争が続いたが、稳健な共和政のもとでマキアヴェリは書記局のポストを得て、フランス、ローマ、神聖ローマ帝国への大使を経験し、外交力を磨いていった。もちろんイタリア戦争は続いている、「昨日の友は今日の敵」の状態が続き、フィレンツエ共和国はかつての敵だったフランスと手を結んだ。

しかし、メディチ家は教皇やナポリ王の力を借りてフイレンツエを君主として再支配する。マキアヴェリは、反メディチだとみなされ書記局のポストを解任された。この時期に彼が再雇用を願つて著したのが『君主論』である。このような歴史を学び、それを生きた知識として蓄えている現在のヨーロッパの政治家は、正攻法だけが物事の解決法ではないことを十分に心得ている。

マキアヴェリが解任されている間に、フランスではフランソワ一世が即位し、神聖ローマ帝国では彼に皇帝選挙で勝利したハプスブルク家のスペイン王カルロス一世がカール五世として即位し、イタリア戦争はさらに激しさを増した。さらに、ルターが宗教改革を始めたことから、ヨーロッパ各地は混乱を極めた。

結局、イタリア戦争はハプスブルク家とヴァロワ家の双方ともに、財政的に戦争継続が困難になることにより終結した。終わつてみれば、得をしたのはハプスブルク家、巻き添えを食つたのはイタリア諸国と諸都市ということになる。これもイタリアが現在、難民に対する多額の経済負担を負つてることに似ている。

孫が幼稚園の後輩になる

上原 利夫

孫は昨年四月、東京都武藏野市の保育園から、大阪府吹田市桃山台の幼稚園の年少組に入りました。今年四月からは、大阪市西区鞆幼稚園の年中組へ転入し、鞆公園の南側に隣接するマンションへ移ります。この辺は私の幼少期の生活圏でした。昭和一六年三月まで二年間鞆幼稚園に通い、四月から隣接する鞆国民学校一年生になりました。孫が後輩になるとは、まさに驚きです。

鞆幼稚園は大阪で最も歴史が古く、昨年創立一三〇周年を迎えました。明治生まれの私の母も同じ幼稚園で世話になっています。私の祖父が鞆で事業を始め、昭和二〇年三月一三日に空襲で焼失するまで、この地でやつてきました。大正末に婿養子になつた父が家業を継いだのです。私が通つた幼稚園と学校は戦災を免れて、他は焼けました。戦後は焼け野原となり、整地されて進駐軍

の飛行場に。昭和二七年に返還後は広い鞆公園になりました。焼け残つた学校は、一時期大阪市立大学の校舎として利用され、住吉区杉本町の校舎が進駐軍の接收解除になってから学校の建物が解体され、跡地に大阪市が竹中工務店に発注した一四階建ての大型マンションが建ちました。ここに孫が住み、隣の幼稚園に通うのです。

広々とした鞆公園の環境を四歳の孫は気に入つたようです。二年後の小学校は武藏野市へ戻る予定ですが、幼稚園時代は私の出生の地を観察することになります。

昭和一六年三月に私が卒園した時の記念写真を見ると、男子四三人、女子五二人です。クラスは三つ。担任は藤本（水色）、後藤田（紫色）、八巻（緑色）の各先生（女性）です。水色と紫は二年保育、緑は一年保育の組です。各クラスは対抗心が強く、水色にはガキ大将が何人かいりて、私の紫はおとなしかつたです。国民学校では男女別の二組となり、校長と園長は同じ先生でした。

私達が入学した年から小学校は国民学校になりました。

一年生の国語教科書は「サイタ サイタ サクラ ガ

サイタ」から「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」に変わり、軍国調が忍び寄りその年の一二月に日米開戦。昨年は真珠湾攻撃から七五年でした。二年生のとき鞆国民学校は、北へ徒歩一五分の江戸堀の東江国民学校と合併し、西船場国民学校に名称が変わりました。鞆の校舎は商業学校へ、次に工業学校になりました。終戦後は大阪商科大学（旧制）が他の大学を併合し大阪市立大学になりました、鞆に仮校舎を置きました。鞆は昔の町が殆ど消滅して公園となり、大変革を来ました。

私の生家の敷地は鞆下通一丁目、現在は鞆本町一丁目で、昔の西横堀川の上の阪神高速道路の西側です。七月二三日から瀬戸物市を開きます。御靈神社のお祭りはどうでしょうか。因みに、祖父の命日は七月二三日で、北御堂での法事に参拝しました。

鞆の住民だった人は、戦後疎開先から戻り大阪市内か周辺に住んでいます。私は大阪市住吉区遠里小野に疎開してそこに定住、学区制の府立住吉高校へ進学しました。東京で大学生活を送り、卒業後大阪北浜で一七年勤務し、

転勤でオランダに五年駐在したあと東京に移り、東京生活は通算四一年（人生の半分）になりましたが、本籍は鞆本町一丁目の大阪人です。

孫の母である私の末娘は、オランダ生まれ、東京育ち、結婚するまでの本籍は私と同じ大阪です。住んだことのなかつた大阪への関心は強く、鞆に住むことになったのもこんな事情です。最近、「大阪船場のおかみの才覚「ごりょんさん」の日記を読む」（平凡社新書）を見つけ、ごりょんさんだった私の母の人生を窺っています。

私は国民学校四年生までの十年間を鞆で過ごした友達との同窓会に毎年出席します。疎開で分散した友達が三三年後の昭和五二年に有馬で再会。四二歳の時でした。その時の参加者は六人、努力して増やし二人まで増えつけましたが、死亡や健康上の理由から、昨年の第四〇回は一〇人（男女同数）に減りました。鞆で生まれ鞆で生涯を閉じた鰐節商の細野君は終身会長を引き受けましたが、昨年亡くなりました。哀悼の意を表します。

母の一生

浜口 須美子

♪懐かし遠い日 幼い私 若く美し 母の姿
上の娘は無口で可愛い 次の娘はおしゃまで朗らか
次の娘は素直で優し 末の娘はどうかな
かく言う私

母の背なに腕わきに膝ひざに
もたれて歌つた歌の数々♪

歌いでてくる末娘が母である。娘時代の生活のようすを聞くと「谷崎潤一郎の『細雪』と一緒」と答える。大阪天満のイトサン コイサン 中イトサン コイトサンと呼ばれ、大正ロマンの栄華を極めた少女時代だつたとか。四姉妹の様子を母が自ら作つた歌で聞かせてくれた。それぞれの姉たちが家と家の縁で結ばれ、母もまたひとまわり上の父と見合い結婚した。

父は大阪堂島の商家の三男。慶應大学から東京の会社に就職。母は東京大阪八時間の時代に東京に嫁いだ。お

手伝いさんを伴つての新婚生活だつたが、父は優しく、インテリで、でも心がつかみきれない人だつたという。ある時、父のようすがいつもと違うので「何か気に入らないことがあつたら言つてください。言つてくれないとわかりません」と聞きただしたそうだ。父は、「智に働く角が立つ。情に掉させば流される」という夏目漱石の『草枕』の冒頭部分の言葉を引用して、「理に適つた言葉は、なるほどと思うけれど、聞く側は寂しいものや」と言う。なんのことやらわからず、具体的に言つてほしいと頼んだら、父は数日前の出来事を話したそうだ。庭の水道で洗い物をしていた母のところへ手を洗おうと来た時、「あちらの水道で洗つてください。水道はここだけじやないし」と言つた母の言葉が、もつともだけれど寂しく感じたと言う。

この話で猛反省した母は偉いと思う。自分が知らないうちに無神経な言葉を使つていたとしたら申し訳ないと、父の気持ちを逆なでする言葉を慎む努力の反面、こんなにデリケートな父に気に入つてもらえる奥さんになれるだろうか心配になつたと母は言う。晩年、父は母が大好

きだった。「母さんは料理も上手やし、氣立てもいいし」と言ひながら、いつも語尾は涙声だった。新婚時代の母

の努力が数十年後に実り、父は母の一番のファンになつ

た。知らないもの同士の歩み寄りの努力が、その後の父と母の仲良し生活の礎になつたのだと思う。

母の子育ては、疎開、防空壕、配給など戦争とともに

あつた。敵飛行機が洗濯物を狙つて威嚇射撃してきたときには縁側に寝かせていた子供の上に覆いかぶさつて守つたら、背中に下の子供をおぶつていることに気づき、ぞ

つとしたという話など、生活以上に命を守る大変さを経験、野坂昭如の『蛍の墓』の映像はいまだに正視できぬいという。でも母は、自分ひとり大変なのではなく国中全員が余儀なくされた生活の中でキャベツにソースをかけて豚カツ気分を味わい、持ち前の明るい性格で多くの人の出会いを財産に戦争の時代を生き抜いたようだ。

戦後、父は大阪堂島で家業の紳士帽の仕事につき、母は婦人帽部門の仕事を参加することになる。帽子のデザイナーの世界はどうだった?と聞くと、「山崎豊子の『女



母96歳、干支の年賀状

♪チックルンルン チックルンルン

氣に入りましたわ このお家

太ったお父さん のっぽのお母さん

優しい三人の子供♪

昭和四〇年代、母の望む通りの家族ができあがりつた時代に母が作つた歌である。

当時飼っていた手乗り文鳥の気持ちで作つた歌らしい。その子供たちも家庭を持ち、今の気持ちは?と聞くと、「田辺聖子の『姥うかれ』と一緒に」と答える。

母は、各時代を通して、細雪、蛍の墓、女の勲章、姥うかれを主役で演じてきた。二曲の歌と共に今後も百歳現役の女の一生を演じ続けてほしい。



わがヘモグロビン戦記

山縣 正靖

ヘモグロビンとは糖尿病の検査データ HbA_{1c}のことです。実は小生、三十年前に壮年検診を初めて受けた頃からこれが悪かつた。糖尿病は自覚症状が全く無い、それでいて悪化が静かに進行するサイレントキラーです。ヘモグロビンの数値だけが敵の正体を示すわけで、小生は二十年間もヘモグロビンと戦つてきましたといえます。

厚労省によると糖尿病患者は予備軍を含めると全国で二千万人、いやその二倍の四千万人という推定もあり、まさに国民病です。糖尿病が悪化すると、足の壊疽、腎臓病、網膜出血の三大症状が知られていますが最近は心筋梗塞、脳梗塞、認知症の引金になることが明らかになりました。これで判るように恐ろしい糖尿病の予備軍の方が身近にいらっしゃる訳で、放置すると小生の様に悪化しますよ、と私の反省を込めてヘモグロビン戦記を書きました。

まず HbA_{1c}（以下ヘモグロビン）は血液検査の項目で、6・0は体温でいえば36度とこそ迄は正常です。ところが7・0は体温37度でこれはもう糖尿病予備軍、8・0は38度、9・0はなんと39度の高熱で重篤な糖尿病になります。それでいて当人の自覚症状は全くない。小生が初めて検査した時点では7・0だったのですから薬を処方されると共に、カロリー制限1500 kcal、禁酒をすすめられました。しかしこれでは企業戦士にはエネルギー不足で元気がでない、結局中途半端な制限を続け、病状が悪化してより強い薬を呑み、薬の種類を増やしてヘモグロビンを抑え込んでいました。

ところが三年前に先生から、もう薬で抑え込むのは無理です、脾臓が疲れてインシキュリンが出なくなる、もうすぐインシキュリン注射が必要になりますよと注意されました。これは大ショックで、ここで思い切って当時流行り始めた糖質制限食に切り替えました。

糖質制限食は歐米では一般的な糖尿病の食餌療法です。糖質制限食では一日の糖質摂取量を必要最小限に抑える、小生の場合はご飯で茶碗2／3杯程度で十分です。その

かわり、肉、魚、チーズは好きなだけ取る、野菜もたっぷり、オリーブオイルもたっぷり使つてよい。ただ一つコツがあつて、食べる順序はまず野菜、次に肉、魚、最後にかなり満腹になつた処でメニ糖質を食べるという地中海風のグルメであり、これなら小生もできる。

やつてみたらヘモグロビンが改善して体重が3kg減り大成功となりました。ところが幸せは長く続かないもので、半年前にヘモグロビンが再び悪化し8・0、9・0と悪い状態になる。先生の予告どおりインシュリンが出なくなり、何時心筋梗塞が起きてもおかしくない状態で、すぐインシュリン注射をなさい、そのために教育入院をしなさい、という騒ぎになりまして十日間入院して勉強してきました。

そこで糖尿病予備軍の皆様へのご参考までに教育入院の成果をお話します。まずインシュリン注射は朝、昼、晩食の前にやりますが、全然痛くない。テルモ社が開発した極細注射針のお陰です。次に血糖値の自己検査は朝、昼、晩、就寝の前に自分で血糖値の検査をしますがこれも痛くない。しかし、この血糖値の時々刻々の変動たるものが皆様にお伝えしたい事です。

以上がわがヘモグロビン戦記です。反省としてはヘモグロビンが7・0になつた時点からカロリー制限か糖質制限かのどちらかを「きちんと」とやっておくべきだつた、小生はカロリー制限を中途半端で放置したので失敗した。あの頃から糖質制限食をきちんとやるべきだつたというのが皆様にお伝えしたい事です。

妻ががんになつた

矢澤 正二

「日本人の一人に一人はがんになる」と言われている。始まりは市の健康診断だった。血液検査の数値に少しの異常が見られるが疲れているとの程度のこともあるので一ヶ月ぐらいしてからの再検査を勧められた。そこで妻は二ヶ月後、軽い気持で大学病院へ再検査に行つた。

するために病院に来ている。治療しないという法はない。だが医師が言うには、治療するとなれば化学療法で、今後の闘病と副作用を覚悟しなければならない。一方放置しても今すぐ生死にかかることはない（がんと闘わないという考え方もある）。この選択に私たちは躊躇することなく治療を選んだ。

私はここで子供達を呼び、母親ががんであること、それも全身にがんが進行していること、これに絶対打ち勝つこと、そのためには家族が一致団結してこれにあたることを宣言した。

ところが妻は朝から出かけなかなが戻つてこない。病院では血液検査、緊急のCT検査、その後のPET検査、MRI検査等と事は流れるように運んだ。やはりがんとの診断だった。（がんの告知）

それを聞いたとき私はショックで頭の中が真っ白になり「嘘だろう」。脳天にハンマーを打ち付けられたようだ。妻は痛みなど全く無く健康そのものだったのに。治療の説明に際して医師は、治療するかそのまま放置するか、と聞いた。何という事を聞くのだ、私達は治療

私達の周囲は、がんと闘う態勢が整えられた。

私は親族にがんである事を伝え、治療することを報告した。皆が一様に驚き、米寿を迎える義父は「自分より先になどまかりならん」と声を震わせた。週末には妹弟全員集まってくれた。これに夫婦とも勇気づけられた。立ち止まってゆつくり考えている間などはなかつた。もちろんセカンドオピニオンも行わなかつた。医師を信頼して治療を託したのだ。

次に〇氏に相談した。〇氏は以前妻と同様のがんを経験し、それを見事に乗り越えたという実績がある。「絶対に治る、それには家族の団結が何より大切だ」と力強く語った。

それから数日後、〇氏から一抱えもあるダンボールが届いた。中にはすっぽんスープ、せんべい等が満載であつた。とにかく食べろ、食べることによりがんに打ち勝つ体力をつけることが必要だ。これは〇氏ががん治療中病院食を受けなくて、三〇キロも痩せたという経験があつたからである。

告知から一ヶ月後には治療に入っていた。初回は入院し、二回目以降は通院という形をとつた。妻は入院中私が一人になるのを心配したようだつた（私は以前脳卒中をしている）。病院は近かつたので大いに助かつた。病院を選択する上でこれは大きな要素だつた。

そして治療が始まつた。朝九時からの点滴が夕方五時まで続くのである。それが一クルーで三週間おきに計六クルー行われる。いわゆる標準治療である。吐き気、食欲不振、脱毛に悩まされることになる。治療も終盤になるとには体力も落ち、治療を延期せざるを得なくなる状況で夫婦とも落胆したこと也有つた。

治療開始から半年後医師から「寛解」と告げられた。ほぼ健康体になるまで更に半年程かかつた。思えば市の健康診断から丁度一年ぶりであつた。一年間は正にがんとの闘いの毎日だつた。

そして同時に、支えてもらつた多くの人達への感謝の気持ちで一杯である。応援して助けてくれた友人・知人、常に支援してくれた親族、迅速な対応で治療に当たつてくれた医師達、この人達の助けがなければ闘病できなかつたと、心底そう思つた。

皆様本当にありがとうございました。

追記　がん保険のことである。数十年前に入つたものでそのままになつていた。これは全く新しいがんの治疗方法に合致しないものだつた。がん保険を見直して、最新の医療に即した保険契約にすることをお勧めする。

がんの正体

廣澤 重穂

ふと、思つた。なぜ彼女はがんと闘おうとしなかつたのか、なぜ無治療を「選択した」のか、と。物語には、その肝心な部分が描かれていない。

二〇一六年十一月の掌編小説勉強会に、『或る男と女』

を出した。がんに罹患した女性と、その彼女を見守る男の物語だ。

この小説のモデルはいた。遊び仲間の一人で、周囲にがんであることを知らせず、あつという間に亡くなつた女性(48)だ。その女性は「無治療」を選択し、旦那は東々とその彼女を見守つた。

その二人の「潔さ」にグッと来て、「いい女」と「いい男」を描きたいと思つたのだ。書き終えた当初、それなりの満足感はあつた。書き出しOK、締めもバツチリ。しかし読み直すと、何かしら物足りない。いまひとつ面白みに欠けるのだ。野球でいえば、「おつとお、これ大きいか? スタンドに入るか、入るか? いや失速してしまつたあ!」というガッカリ感にも似ている。その小説のどこが、何が、悪かつたのか?

亡くなつて数か月後、がんに関する多くの本を彼女が読んでいたことを、偶然知つた。ほとんどは専門的な解説書だったが、その中に『がん 生と死の謎に挑む』(立花隆、文春文庫、2013年)があつた。闘うことを選択しなかつた彼女の、その心の内を知れるのではないか、と手に取つてみた。

その本で、立花隆は次のように述べている。

ほとんどの病気は人間によつて克服されてきた。しかしがんだけは、未だに抵抗を続けている。なぜか?

人類はがんの正体を完全に知り得ていかないがゆえに、治療法も確立されていないという。

とはいゝ、がんは細胞の病氣だ。「生まれては死ぬ(新陈代謝)」を繰り返す正常細胞にあつて、「死なない」細胞が発生し、ただただ増え続け、そして細胞の塊となる。

その塊が正常な細胞の活動を阻害するのだ。

ではなぜ、そのような細胞を駆逐できないのか？

それは、生物が進化の過程で、生き残るために獲得してきた遺伝子を、がん細胞自身が持つからだという。

その遺伝子こそ、がんの本質だという（H—I F—I 遺伝子というらしい）。

厳しい環境の中で進化してきた生物（人間だけでなく、あらゆる多細胞生物）は、その進化の過程で「生き残るために」のメカニズムを、遺伝子として獲得してきた。「体内に侵入した毒物を吐き出す仕組み」や「自然界での過剰な放射線から生き延びるシステム」である。

多くの抗ガン剤は、摂取しているうちに効かなくなるというが、「侵入した毒物を体外に吐き出せ」と命ずる遺伝子が、がん細胞に薬剤耐性を獲得させるのだ。

また、放射線治療でも、その遺伝子を持ったがん細胞が正常細胞より余計に耐性を持つがゆえに、がん細胞より先に、正常な細胞がやられてしまう危険が大きいのだ。結局、がんという病気は、生活習慣病のように産業社会が生み出した病気ではなく、「生命そのものが持つ、

ひとつ避けられない運命」という側面を持つ、という。がん告知を受けた彼女も、最初は「鬱うんだ！」「克服するんだ！」と思つたに違いない。立花の著書が正しいかどうかは別にして、この本を読み終わつて思ったことがある。

彼女は心のどこかで、「がんを克服できると思つている人間の傲慢さ」に思い至つたのではなかろうか。地震や台風、水害といった自然の脅威の前では、人は立ち尽くすしかないのと同様に、生命という自然の摂理の前では、いまだに人間はちっぽけなものだ、と。

確かに、無治療を選択したのは「諦め」だつたかも知れない。しかし彼女の心の深層に、自然の摂理を受け入れる覚悟が、そして謙虚な心が生まれたのだろう。

だからか、無治療を選択してからの彼女は、僕らの前では明るく「健康的」だった。

さて、そんな「潔い」彼女を『或る男の女』の中で、どう描き直せばよいか……。今度は、こちらの覚悟が問われた気がした。

大平忠

福岡での正月を四十八年ぶりで迎えた。昨年の三月に福岡・香椎浜に移り住んで九ヶ月が過ぎた。この『悠遊』が出来上がる頃にはちょうど一年になる。

半世紀前には北九州・黒崎に六年住んだ。学校を出て勤めた最初の場所である。独身で三年、結婚して三年、最初の子どもも生まれた。思い出深い六年間だった。

勤務は従業員採用の部署で、高度成長のスタート時期だったせいもあり、忙しかった。学校や職業安定所によく通つた。工場へ戻つてからデスクワークである。残業も多かつたが、仕事は面白かった。残業の後も仲間と街へ出て一杯飲んで帰つた。飲み屋の大将、女将たちは、口は悪いが、からつとして親切だった。

それにしてよく飲んだ。仕事は忙しいのになにせ飲む機会が多かつた。職場での歓迎会、送別会、忘年会、旅行。工場での盆踊り。職場対抗のスポーツ大会も盛ん

だつた。これには打ち上げが必ずある。独身寮での春祭や寮対抗の試合もあつた。

結婚すると、また大変だつた。夜、ストームと称して若い連中が新婚の家に押しかけてくる。大量の酒だけは準備が必要だつた。以来、妻には頭が上がらない。

ある先輩は火に油を注いだ。「貯金なんかしなくていい、みんな飲んでしまえ、それが男の財産だ」と。

当時北九州は、八幡製鉄が高炉を増設し、私の勤める工場もプラントが次々増えていった。昭和三十八年には北九州市が誕生した。同じ年に三井三池炭鉱の事故が起きた。筑豊の石炭は、石油が台頭し、全盛期を過ぎて、輸入炭にも価格と品質で押され始めていた。

しかし、まだまだ筑豊、北九州には川筋気質の男たちが数多く働き、飲み屋も繁盛していた。昭和三十七年、川筋男の映画『花と竜』を観に行つた。映画館は満員、石原裕次郎が登場するや醉客からかけ声がかかつた。

五十年経つた今、北九州から高炉は消え、筑豊の炭鉱も無くなつた。ぼた山も草木が生え緑の山になつた。勤務していた工場も従業員数が激減し、黒崎の飲み屋街に

昔の面影は無い。石炭を消費する製鉄や化学工場は、産業の変遷に従い姿を消してしまった。北九州市の人口はピーク時は百万を超えていたが今は切っている。

私が現在住んでいる福岡市は、政令都市の中では人口増加数、人口増加率、若者の割合（十五才～二十九才）が一番である。五十年前の人口がほぼ倍増して百五十万人を突破した。日本での一極集中化が東京であるように九州での一極集中化が福岡市で起つたのだ。JR、高速道路の発達で九州のどこからでも短時間で福岡へ来られる。アジアその他の国々から、飛行機、クルーズ船がやってくる。貨物船も多く、博多埠頭は拡張され物流量も増加した。九州の拠点としての存在感が増したようである。人口は増えたと言つても、中心地の博多駅、天神に東京のような雑踏はない。歩いていても疲れない。

ただし、祭りとなると博多三大祭りに集まる人は大変なものである。五月の「博多どんたく」は市内三十数箇所に「演舞台」が設営され、歌、踊り、博多にわかなどが演じられている。広場のパレードは延々と尽きない。

七月の「博多祇園山笠」は、最終日の「追い山」のスタートが早朝四時五十九分である。見物客のため、地下鉄、バスは三時過ぎから特別ダイヤを組んでいる。

九月の筥崎宮の祭り「放生会」は、一キロの参道に五百以上の露店がひしめき、見世物小屋、射的場まで立ち並び壯觀である。これらの祭りは、面白いことにいざれも見物客は一日百万と発表される。あまりに多くて数える術がないのではないか。福岡の人々の祭りにかける情熱とエネルギーには降参だ。

全国、町興しのため祭りは盛んになっているが、福岡の場合、「博多祇園山笠」は、五十年前から、いや、はるか以前からそうだった。山笠が終わつた最終日、打ち上げの「直会」で、山笠の舁き手たちが、百人もいたらうか、盛大にビール・日本酒を老いも若きも飲んでいた。「放生会」では、露店でいい機嫌で飲んでいる人は数知れずであつた。その片隅で私も飲んだ。

福岡の酒飲みは、筑豊、北九州で減つたとはい、今でも祭りと共に大いに健在であることが分かつた。地域を明るくするのに酒飲みの存在は必須である。

銀鼠の海

浜田 道雄

昨夜の雨は明け方にはあがつたらしい。今朝の海は雲に覆われてはいるものの明るく、その色は鈍色から銀鼠に変わろうとしている。

いつものようにコーヒーカップを手にして変わり行く沖合を眺めていると、子供のころよく眺めた大森の海が思い出される。

生まれる直前にはじまつた戦争が終わって、母と妹とともに疎開先の母の故郷から父の待つ東京に帰った。

しかし生まれ育つた街は戦火で焼かれてしまっていたので、私たちは父のいる城南の大森に落ち着いた。叔父の経営する工場がある街の一角だった。そこも一面の焼け野原ではあつたが、私たちの移つた周辺だけはわずかに焼け残っていたのである。

大森は以前住んでいた下町とは違つた意味で活氣ある

街だった。あちこちから旋盤やフライス盤を動かすモーターの唸りや金属板を激しく叩くハンマーの音が交錯する騒々しい町工場の続く街だった。だが、そんな工場は子供たちの遊び場でもあつた。ベーゴマの肩が丸くなると工場に行つて、職人に「コマを削つて」と頼んだ。

職人たちはみな子供たちに優しかった。こここの子供たちは学校を出ればすぐに工場に入つて、やがては自分たちのように戦士になると知つていたからである。だから彼らはベーゴマを削つてもくれたが、コマを削るグラインダーの扱い方の手ほどきもしてくれた。

あかあかと燃える炉の火に魅せられて、川沿いのガラス工場をのぞいたりすると、そこの職人は私たちをなかに呼び入れて、ガラス吹きをもたせ、その吹き方を教えてくれたりしたこともある。

なかでも、Sさんは私に目をかけてくれていた。小学校を終えて中学に入ると、Sさんはいつも私を工場によび入れて、

「お前も、じきに仕事を覚えにやならんのだから」

と言いながら、自分の横に並ばせて仕事の手順、旋盤やフライス盤の扱いなどを教えてもらつた。ときにはガス溶接の手伝いなどをすることもある。

だが、私はSさんなど職人たちの親切さ、優しさに甘えてはいたが、彼らのようにこの街の職人になるつもりはなかつた。この街は狭すぎた。人々が親しすぎたのだ。私はもつと広い世界に出て行つて、人々と競い合う生き方をしたかった。

そんなとき、いつも大森の海岸に行つて海を見た。水平線のさらに彼方を思いながら、「この海は太平洋に、そして世界の国々につながつてゐる。いつか、ここを出であの海の向こうへ行くのだ」と考えていた。

それから何年かが過ぎた。大学を卒業し労働省に勤めることにした私は、その報告のためにSさんを訪ねた。

Sさんはそのころもう六〇歳を過ぎていたので、工場勤めは辞め、自宅の狭い玄関に「蹴飛ばし」と呼んでいる小さな足踏みプレスを置き、気の向いたときに内職仕

事をする半隠居に入つていた。

玄関で「蹴飛ばし」を踏んでいたSさんに「労働省に入る」と話すと、Sさんは顔を引き締め、じつと私の目を見つめてから言った。

「そう、お前は俺たちの敵討ちをするんだな」

それからまた五〇年が過ぎた。その間に日本の社会も経済も大きく変わつた。高度成長期を経て、職人たちの職場環境も驚くほど向上し、彼らの生活も豊かになつた。

私は労働省、経済企画庁、外務省、国連機関のILOさらにはタイ政府政策顧問など様々などところで仕事をしてきましたが、一貫して労働問題に関わつてゐた。

目の前に広がる海を見ながら、Sさんの「敵討ちを」という言葉を思い返し、彼の期待に私はどれだけ応えたのだろうかと自問してみる。

銀鼠に光る海は、そんな昔の思い出でもある。

さよなら 二つの母校

木村 敏美

近の墓が大切に残されている。

終戦の年に生まれた私は二つの小学校へ行つた。三年生迄福岡県の山奥で、四年生からは福岡市の中心部にある学校だった。その二つの学校が廃校になった。
遡れば明治五年の学制発布により「村に不学の家なし」全ての国民に教育をと考えられ沢山の学校ができた。

八歳まで私はこの地の大自然に包まれ、川で泳ぎ野山を駆け回り、のびのびと過ごした。「兎追いしかの山、小鮎釣りしかの川」の歌のとおり、思い出多いこの学校も過疎により平成九年に創立百二十一年で廃校となつた。
都心の大名小学校は明治六年に設立、昭和四年、當時としては珍しい鉄筋コンクリート造りに建てかえられた。場所は福岡市の中心地、天神に近く、裏門の前は市のメイン道路で西に行くと福岡城がある。名前からも武士の町だったことが伺える。外壁が赤レンガで出来た所は、土台部分が外堀の石垣跡である。昭和二十年の福岡

山奥の学校は明治九年に設立され、剣持小学校と呼ばれた。この学校から出た歴史小説家安部龍太郎氏は、平成二十五年直木賞を受賞している。氏は廃校後の平成十八年、講堂で行われた同窓会でこの地の歴史を講演され、私は初めて歴史的な地であったことを知つた。南北朝時代に北部九州の山奥に逃れた南朝側最後の良成親王を守り、剣を持って宮を守るということから剣持という地名が生まれた。武将達はその後も奥八女のこの地に残り、六百数十年間生活を続けた。小学校のすぐ側には側

大空襲でも焼失を免れ、校舎内の重厚な石造りの手すりのある階段や、廊下の天井の梁はアーチ型で柱と共に白く、よく磨かれた廊下はその白さを引き立たせた。玄関も石造りの柱と屋根で造られ、ホテルの様だった。転校した時は戦後のベビーブームで児童数も二千人を越していた。山の生活しか知らなかつた私は、人数の多さと服装の違い、建物の立派さに圧倒された。戦前の首相広田弘毅や和田三造等多くの芸術家も出している。学校は戦争の悲惨さや戦後の復興、博多の祭りや文化等いろいろな歴史を見てきた。しかし、ドーナツ現象や少子化で児童数が激減、平成二十六年三月、百四十年の歴史に幕を下ろし、小中連携校となり、市立舞鶴小中学校と名前も場所も変わって再出発した。

お別れイベントに参加した。在校生と一緒に伝統の両手をついての廊下の雑巾掛けをしたり、石造りの階段の手すりを滑る姿を見たり、給食や授業の再現を味わつたりと懐かしかつた。

夜は満開の桜の咲く運動場に、大名アリガトウの文字が蠟燭で灯され華やかな別れであつた。帰りに、裏門のが

も石造りの柱と屋根で造られ、ホタルの様だった。転校

した時は戦後のベビーブームで児童数も二千人を越して

いた。山の生活しか知らなかつた私は、人数の多さと服

装の違い、建物の立派さに圧倒された。戦前の首相広田

弘毅や和田三造等多くの芸術家も出している。学校は戦

争の悲惨さや戦後の復興、博多の祭りや文化等いろいろな歴史を見てきた。しかし、ドーナツ現象や少子化で

児童数が激減、平成二十六年三月、百四十年の歴史に幕を下ろし、小中連携校となり、市立舞鶴小中学校と名前

も場所も変わって再出発した。

お別れイベントに参加した。在校生と一緒に伝統の両

手をついての廊下の雑巾掛けをしたり、石造りの階段の

手すりを滑る姿を見たり、給食や授業の再現を味わつた

りと懐かしかつた。

夜は満開の桜の咲く運動場に、大名アリガトウの文字

が蠟燭で灯され華やかな別れであつた。帰りに、裏門の

正面にあるツンドラというロシア料理店に立ち寄った。

初任給を貰つた時母を連れて行つた店で、思い出深い場所だ。

聖火ランナーも通つたメイン道路の電車は姿を消し、明治通りと呼ばれるようになった。

戦禍をくぐり抜けてきた鉄筋の美しい小学校、隣接する西鉄グランドホテルの側で、その建物は今も残つている。



すかし模様のある階段(大名小)

小学校時代

濱田 優ゆたか

昭和十九年に赤坂の檜町小学校に入学した。

だがすでに太平洋戦争の末期、縁故疎開に続いて強制的な集団疎開が進められ、学習どころではなかつた。

大方の学童が疎開した後、僕たち一年から六年まで二十人ほどの居残り組が、お寺の境内に集まり、青空教室で勉強を教わつたことを憶えている。

その年の年末から東京の市街地の大半が焼き尽くされる猛烈な空襲がはじまり、赤坂も昭和二十年五月二十五日の山の手大空襲で一面の焼け野原になつた。

その中で、鉄筋コンクリート造の檜町小学校は講堂こそ焼夷弾の直撃で使えなくなつたものの、幸運にも建屋の主要部分は残つた。この校舎は、白い三階建ての長方形の組み合わせで潇洒と安定感を兼ね備えており、学校建築の模範と僕は勝手に思い込んでゐる。なのにその後、建て替えられてスマートだけれど馴染めない校舎になつ

た。これが母校といわれてもね……。
僕は疎開をしなかつたが故に大空襲で命を落とす危険に晒された。疎開をした子も親元を離れ、疎開先で虐められたりして辛い思いをした。戦争は罪のない子供も苦しめる。大人はその罪をもつと噛みしめるべきだ。

戦後、学校が再開されたとき、僕らは戦時教育をまともに受けていないので民主教育にはすぐ馴染んだ。だが教員不足で担任がなかなか定まらず、三年のはじめ村岡キクエ先生が担任になつてやつと落ち着く。その後卒業するまで担任は村岡先生で変わらなかつた。

先生は師範学校出の大ベテラン、随分お婆さんに見えたけれど、実際は五十歳だった。身体は小さいのに、ともかく元気で体操の時間も先生が受け持つた。

先生は生徒の好き嫌いが結構激しい。お気に入りは、子供らしい子、反対に生意気そうな子は嫌われた。

父兄会のとき、母は先生に「濱田君をK君と遊ばせないよう」と注意された。彼は上目使いに大人の顔色を窺う——、可愛くないと言う。K君は早くに母親を亡くし、父親に厳しく育てられて甘えることが許されなかつ

たから自然そうなつたのだろう。

僕は、甘ちゃんを自認していて、大人びたK君を頼りにしていた。母はその辺の事情を心得ていたのか、先生が言うことを笑つて聞き流してくれた。

僕は先生のお気に入りだったものの、良いことばかりではなかつた。先生の指示で級長を命じられたのに、児童と一緒に悪いことをすると、「濱田君は級長のくせにこんなことをして」と三倍叱られるのだ。

小学校では女の方がよく勉強し、成績も良かった。僕は学校から帰るとカバンを放り出してすぐ遊びに行き、日が暮れるまで友達と遊んでいた。宿題以外の勉強をした記憶がない。だから僕の上に女子が二、三人いた。

高学年になって、村岡先生の偏見や考への古さに反発した時期もある。隣の組の若い男の先生は進歩的でまた女子に人気があつた。僕も彼女達の話を聞いて、隣の組が羨ましいと思つていた。

しかし、卒業後十年くらいして時代の潮目が変わると、その先生は平氣で前言を翻し胡散臭い。多少の偏見があつても考へが古臭くとも、教育者はぶれない方がいい。

その先は自分で考へるべきだ。

卒業後はそれに忙しく、同期会も間遠になつたが、四十を過ぎて女性陣が子育てから解放される頃になると、同期会または小グループで集まることが多くなる。

その中で僕たちは、男女十人くらいのグループで年に一、二回、乗鞍高原のMさんのログハウスに行くツアーや二十年余り続けた。

そこに着くと近くの温泉に入り、途中で仕入れた食材で料理をし、酒盛りをして駄弁るだけだが、これがまた楽しいのだ。仲間の中にはこのツアーワーのために車をみんなが一台に乗れるワゴン車に買い替えた男もいる。みんな敗戦直後のバラック暮らしから一緒の幼馴染で、見栄を張るものがないからだらうか。

今年は同期が当然ながら一齊に傘寿を迎える。今まで同期会を仕切つていたTさんの調子が悪いようなので、あなたが幹事をやって、と元気な女性に迫られている。……重い腰を上げざるを得ないか。

古傷五十年

原田 信

六十代半ばのある日、庭の敷石につまずいて倒れ込んだ。その直後から右手に鋭い痛みが起きはじめた。パソコンなどとても打てない。痛みはどうも小指の付け根の辺りから来ている。そこには小さな手術の痕がある。五十年以上も前のことで、これまで痛みはおろか不具合も全くなかった。その傷痕を見ていると、時には身が震えるような懐かしさに包まれる。

その頃、というのは戦後五年ほどでまだ小学生だった。東京郊外の千歳烏山から港区赤坂に移った。近くに青山通りがあり、下には地下鉄・銀座線が走っていた。すぐ近くに女学園があり、その周りは敷地の広い屋敷町だつたのだろう。鉄筋コンクリートの床も壁も崩れ落ち地下室には雨水が不気味によどんでいた。中には半地下室でひつそりと暮らしている老夫婦もあつた。また、新築の

小さな平屋もあり、そのおじさんに声を掛けられ縁側でラジオの野球放送を一緒に聴いた。おじさんは阪神ぼくは巨人だから、半分けんかのようなおしゃべりだつた。子どもはいなかつたから新婚さんだつたのだろう。女学園の南側の谷を隔てた丘には戦災者用の大きな長屋が三棟並んでいたが、以前は近衛歩兵第三連隊があつたといふ。丘には鉄筋コンクリートの大きな塊がゴロゴロしていた。そのがれきの中でロウ引きの紙箱をいくつか見つけた。クラッカーやキャラメルなどがぎつしり。「アメリカ兵の弁当だな」と父は言つた。

通つている赤坂小学校まで二百メートル足らず、その向こうは赤坂一ツ木通りの商店街で、その先に黒屏の料亭が続いていた。同級生に料亭の子がいて、遊びに行く度に「おひねり」をもらつた。だがその後、この種の黒屏に親しあなことは残念ながら記憶にない。一ツ木通りには、一と六の日に縁日があつた。金魚すくい、バナナの叩き売り、イカ焼きの匂い。前にいた千歳烏山の鎮守の森の夏祭りでは、田んぼに群れ飛ぶ蛍を追いかけた。

森のへりの小川で泳ぎ、魚を突いた。忘れ難い思い出だが、都会の縁日はさらに魅力に満ちていた。豊川稻荷の豆まきもあつたし、祭の山車に付いていったこともある。

でも山の手で育ったせいか、下町の行事は少し遠くからうらやむ景色だつたし、さらに残念なことに、親は買食いするような小遣いはくれなかつた。

空き地で見つけた「赤がね」の破片を近所の「ばた屋」がいい値段で買ってくれた。「朝鮮特需」が始まっていた。同じような焼け跡から金属やガラスを拾い集めて持ち込んだ。赤坂見附のお堀の向こうに見える李王家の洋館は、辺りの森に溶け込んでよく写生した。その手前の弁慶橋のお堀では、するめをエサにザリガニ採りに熱中した。バケツにあふれた獲物を、でかい外車から降りてきた進駐軍のガキに強奪され、交番に訴えたが、どうにもならなかつた。

新婚さんの隣の空き地でゴロベースをよくやつた。三塁ベースに頭から滑り込んだ時、右手から血が噴き出し、すぐ病院に運ばれて二針縫う手術を受けた。ガラスの破

片で裂けたらしい。麻酔なしだったから、その時の凄まじい痛みは今でも覚えている。

さて、五十数年後、痛みに耐えきれず、近所のクリニックに行つた。X線写真では五ミリほどの異物がある。ガラスのかけらのようだと医師は言う。では、あの時の手術で取り残したのか。取り除く手術になつたが、若い医師はメスを持った手が震えて「もうできない」と言う。それほど手の手術は難しいらしい。「手の手術の名医」を探した。こういう場合、なぜかすぐ見つかる。手術の前に、「右手は回復しますか」と質問した。「それは絶対ない。切れた神経はほとんどつながりませんから」。愚問と言わんばかりの医師の答え。

このお医者さんは信頼できる、そう思つた。

それから十年、右手には気づけばいつもしびれ感が残る。鋭い痛みが走り、何もできないこともある。

五十年以上鎮まつていたものを、「君は起こしてしまつたのだから」と言われているような気がする。

祖父母のふるさとへ

福本 多佳子

夏草で覆われ、ミニジャングルのようになつていて、その日は朽ちた草木が柔らかなカーペット状になつていて、人を招き寄せる小径のようだつた。

「これは面白い。庭に入つてみようよ」という友人の誘いに乗り砂地の庭に回つた。古びたガラス戸越しに表廊下に沿つた客間と祖母の和室、沓脱ぎ石からタローが家のなかを覗き込んでいたものだ。応接間の窓からも内部が見えていて、当時の応接セツトやピアノまでが見える気がした。向こうにも二間続きの和室、その先に台所、風呂場、裏庭に面した納戸、廊下——全ての間取りが目に浮かんできた。海水浴から戻つた時は先ず井戸端で砂を流し、浴室の裏扉から風呂場へ入つたものだ。井戸の釣瓶にスイカが冷えていたり、祖母手作りの草餅が待つていたりした。小学生の私一人が泊まる時も、卵にソーセージ、トーストにコーヒーを用意してくれた。壁にかかる電話に背伸びして話をしていた祖母の姿が浮かんで、ハミリフィルムでも見てているような気がした。

去年、友人と稻村ガ崎から七里ヶ浜へと歩いた。江ノ電の線路から山の上の家へと通じる階段を登つてみると懐かしい祖母の家がひつそりと佇んでいる。五年前の夏、車を停めてその廃屋を見た時は玄関も傍の応接間も

私たち姉妹は優しかった祖母との思い出を共有している。姉妹で遠縁に声をかけ、祖母のふるさと飯田市駄科

で五十回忌も執り行つた。祖母は本家から分家の跡取りとして養女になつた。長兄は学生時代に東京で病死、弟も若くして亡くなり、祖母の妹が本家を嗣いだが子供が出来ず、養女にした姪は東京で恋愛結婚して家を出てしまつた。結局、遠縁の男性が既に傾いていた本家を嗣いだと話していた。彼女の温かい人柄と本家の兄弟姉妹の中で唯一長寿だったことで、親類縁者が昔の話を聞きに訪れていた。古都鎌倉に近い海辺の家は訪ねる人々にとって魅力的な場所でもあつたのだろう。

阿智川沿いの静かな昼神温泉に宿泊、朝市を楽しんだ後、祖父母の墓がある丘陵へと向かつた。南アルプスに向かいあう墓地の横の念通寺の階段を上つてみた。両側の石像、ことに逆立ちした狛犬が可愛い。又従兄も合流し、古い墓石を見回りながら江戸時代の文字を読み取ろうとした。各分家の墓誌には新しい文字が記されていた。本家の新しくなつた墓誌を読むと、本家をついだ祖母の妹夫婦の名前のために、平成になつて亡くなつた夫婦の名前が彫られていた。年齢から察するに、私が小学校六年の時に祖母の家で会つたご夫婦だ。私より一歳年下の男の子と海水浴をした——ということはあの時の男の子がこの新しい墓石と墓誌を建てたのだろう。あれから五十年以上がたつていて、不思議な気がした。彼はこの地に来て何を感じたのだろう？

今回、菩提寺の開善寺に位牌を納め、ご住職に昔の話を伺つた後、祖父の実家に向かつた。途中の山道で、ナビをセットした。「手紙には村の名と氏名だけ書くの、番地なんて無いみたい」と姉が言うので、村名と苗字を打ち込むと名前を選択するようになつていて。途中の道には色づいた市田柿が鈴なりになつていて。南アルプスと向かい合う丘陵に、記憶に残る家の門と松の木、蔵が見えて來た。段々畠の中に車が三台停まつていて。ピンクのコスモスと、白、黄の可憐な花が迎えてくれる。手

家襲刀剣五種

羽田　壽夫

椎谷藩大礪方（ほう）であつた曾祖父羽田好昌佩刀五種につき述べる。

一、大刀加賀住行光

好昌佩用の大刀である。（図1）

刀箱には縁に当家家紋違い鷹の羽が示されている。作者は相模国（神奈川県）鍛冶の行光である。東京国立博物館に加賀前田家に伝来の国宝指定名称・短刀銘行光が収蔵されている。行光の銘のある作はごく少なく、これと宮内庁所蔵の短刀が代表作とのことである。なお、亡父遺品の飯村嘉章著「刀剣要覽」（昭和四〇年）によれば価格は三十五万円とある。

三、脇差天龍子正隆（無銘）

好昌佩用の脇差である。本脇差は無銘であるが、天龍子正隆（無銘）作としたのは、銀座五丁目の株刀剣柴田の瑞喜堂柴田光男氏の鑑定による（図3）。前掲「刀剣要覽」によれば価格は二十五万円とある。

四、短刀（無銘）

好昌愛用の短刀である。（図4）

二、脇差上総守藤原兼重

好昌佩用の小刀である。図2には金象眼にて「寛文元

五、薙刀（無銘）

好昌愛用の薙刀である。（図5）

年閏八月廿九日／山野嘉右衛門永久花押／貳ツ胴裁断」とある。山野嘉右衛門永久は幕臣で死体斬切により刀の刃味を試したもので、山野流からはのちに山田浅右衛門が山田流として試刀術の派を立てて、明治初期まで御様（おためし）役を担っている。また、前掲「刀剣要覽」によれば価格は百万円とあり、室町時代の古刀大刀加賀住行光よりは高価な値付けがなされている。



図2



図1



図3



図4

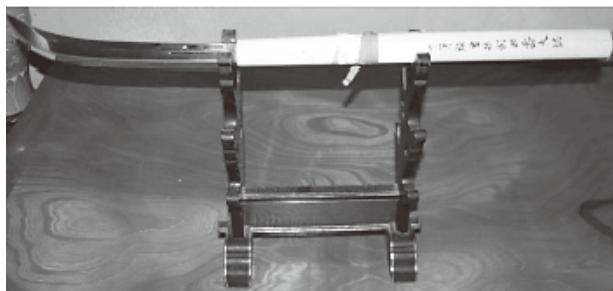


図5

次に書きたいもの

高橋 孝蔵

私が次に書きたいものは幕末から維新だ。

特に一八六二年の生麦事件から、一八七一年の岩倉使節団の旅立ちに至る九年間に心を奪われる。武士中心の封建社会が根底から崩れ去り、今のような日本になる青写真が作られようとする激動の時代である。

既に多くの人がこの時代を著述しているが、私は日本で懸命に生きてきた外国人を取り上げたい。彼ら異人の目から見た日本はどうだったのだろうか。

生麦事件は一八六二年九月の快晴の日曜に起きた。薩摩藩主の父であり公武合体派の有力者島津久光の大名行列に、川崎大師の觀光にいく騎乗の四人のイギリス人がすれ違った。イギリス人は大名行列に乱入したとして藩士に斬られ、一人は斬殺、二名が重傷を負った。

生麦事件だけでも何人かの異人を登場させたい。

まず、現場に最初に駆けつけたのはイギリス公使館付医官のウイリアム・ウイリスである。殺された香港商人リチャードソンを抱き上げた彼は、「薩摩藩に復讐。すぐさま殴り込みをかけろ」という横浜居留地の総会一致の決議を覆したイギリス代理公使ジョン・ニールを優柔不断で日本には全く向かない男と軽蔑した。それ以上に薩摩藩は絶対に許せないものとした。しかし、運命は皮肉なもので、戊辰戦争が始まり、官軍は負傷者の治療をイギリスに頼み、ウイリスが派遣され、不眠不休の大活躍をした。そこで西郷隆盛の知遇を得る。その後、東京の医学校兼病院で教鞭をとるだけでなく、病院の指導も行つた。順調に進めば「日本の医学の父」と言われる可能性もありえたが、日本はイギリス医学よりドイツ医学を正式に採用することになった。ウイリスは東京を去らざるをえず、西郷隆盛に拾われ、鹿児島の医学校長、附属病院長に就任した。東京では看護婦を積極的に起用し、日本のナイチンゲールの創始者である。

このウイリスと無二の親友となるのが、イギリス外交官のアーネスト・サトウである。

サトウは日本に憧れて来日した。達者な日本語を武器に、幕末から維新にかけてのキーパーソン、伊藤博文、西郷隆盛、勝海舟、後藤象二郎、木戸孝允などと親交を深めた。彼が得た情報はイギリスの対日外交方針にどれだけ役に立つことだろうか。

徳川慶喜が第十五代将軍となり、各国公使より彼なら幕府を立て直すだろうと高く評価された時、サトウは西郷隆盛に革命（討幕）のチャンスを逃すとそそのかした。西郷の方もいよいよ戊辰戦争が始まる際、英國の腹の内を探るべく、「イギリスは苦勞ばかりしているが、貿易の利はフランスが独占しようとしている。イギリスはフランスの使い走りか」とサトウをつかと怒らせ、本音を吐かせた。イギリスは幕府側につかないとの心証を確認した。

徳川将軍は多くの大名の一人にすぎず、日本の支配者でもないのに一八五八年に諸外国と協定を結んだのは欺瞞だという意見をサトウは持っていた。天皇が協定を結ぶべきで、そのもとで諸藩連合が政権を握るべきだとした。彼の考えは翻訳され「英國策論」として頒布され、

尊皇の志士に回し読まれ、彼らに討幕への思いを募らせた。

ウェーリスや横浜居留民に臆病者と軽蔑されたニール代理公使は本国の外務省からは戦争を引き起こしかねない居留民の行動を抑えたのは冷静な判断と正確に評価された。彼は粘り強い交渉で生麦事件に対する巨額の賠償金を幕府から獲得した。その過程でフランス公使デューシース・ド・ベルクールと組み、外国奉行竹本正雅に幕府に反対する雄藩を攻撃する際、軍事支援を与えると共同提案した。この話が漏れると、尊攘派に命を狙われると幕府関係者はこの共同提案を一切の記録から外した。

生麦事件当時横浜港にはキューパー提督がいた。薩英戦争、下関戦争の指揮を執り、後に東インド・中国方面艦隊の司令官となる。彼は日本との戦争の可能性は高いと読み、陸軍省と海軍省に対日戦争プランを作成させた。しかし、一触即発の状況の中でなぜか戦争は起こらなかつた。

その後も多くの外国人が日本の歴史の舞台に登場し、去っていった。

勝負の綾

皆川 和徳

巨人軍の長嶋さんが言つたとはつきり記憶している言葉があります。その言葉を読んだ時は、いかにも長嶋さんらしいなど感じただけでしたが、最近その言葉を思い出し、なかなか奥の深い言葉ではないかと思うようになりました。その長嶋さんの言葉とは、テレビで解説していく、アナウンサーから「この試合はどういうことになるでしょう」と聞かれ「これは点を沢山取つた方が勝つでしょう」と言つたというのです。

私は週三日から多くて五日テニスコートに立ちます。多くの試合にも出ます。数多くのゲームをこなす中、ショットも切れスピノも良く落ち、自分でもいい出来だなと思う時があります。それでもゲームは何となくもつれ敗れることが少なからずあります。一方で、体が重くシヨットも芯を食わず、出来の悪いゲームもあります。そんなテンポの悪い凡戦でも勝つことがあります。

そこで、長嶋さんの言葉です。点を沢山取つた方が勝つのは当たり前です。野球を極めた長嶋さんの真意とは思えません。多くの試合の中には「点は相手より沢山取つたが、これは負けだな」と感じる試合もあるのではないか。逆に「負けたけれど勝つたな」と感じる時も。その時の長嶋さんは「これは、多く点を取つた方が単純に勝つ凡戦だな」と思い彼流の表現をしたのではないか。私自身を長嶋さんと並べて、勝負の機微を語る厚かましさは持ち合わせていませんが、勝負のプロセスと結果の機微について、素人テニスプレイヤーも同様に感じることがあります。

又、もう一つ思い起こします。元南海の野村さんが「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議な負けなし」と言つています。私の体験では前段は正しいが、後段の「負けに不思議な負けなし」は一寸違う。「負けに不思議な負けもある」であろうと思います。

いずれにせよ、「勝つたけど負けた」と思う勝負の結果への謙虚さを胸にコートに立ち続けます。それが、上達への第一歩と信じて。

臨死体験

松田 昌康

思った。

それは、孫のお遊戯会を翌日に控えた九月中旬の未明のことだった。

何の脈絡もなく、突然全身が強烈な白い光に包まれた

と感じた。何か強烈な爆弾、原子爆弾か何かが爆発した

のではないかとの思いが、一瞬頭をよぎった。気付いた

時には、肉体はなく意識だけになつて空間を飛ばされて

いる感じた。飛ばされながら、この意識が無くなつたら

自分は死ぬんだという気がした。これが死なのかと思

いつつ、死を目前にすると走馬灯のように自分の一生が

浮かんでくるということが頭を掠めたような気がするが、

そんなことはなく、ただただ死ぬんだという気がしてい

ただけだった。

浮遊して移動しているのを感じながら、あれ？ まだ意識がある、と氣付いた。もし死んだのならこの意識自体がないはずだ。だとすると、まだ生きているのかと

えが浮かんだ。

これが、これま

での人生で一度も

味わつたことのな

い意識だけになつ

た感覺を味わつた

顛末である。

いまだにあの時
の奇妙な感覺が鮮
明に思い出される。



「掌編小説勉強会」この十年を振り返る

短編より短くて入門し易い掌編小説を書いて小説作りを勉強しようと六人のメンバーが集い、この勉強会をはじめて十年経ちました。

この間、隔月開く合評会は一度も途切れることなく、今年の一月に節目の六十回を迎えることができました。

勉強会の成果の作品は四百二十編を上回ります。

この十年を振り返ると、よくぞ長い間メンバーの皆さんが書き続けられたものと感慨無量です。

勉強会は、隔月原稿用紙二十枚程度の作品を書くだけでなく、合評会の前に他の人の作品を精読してコメントをまとめ、評議の後にその結果を反映させた改訂版を仕上げます。それにタネ探しや資料調べをしていると、すぐ次の作品の締切りが迫ってきます。それでも皆さん頑張つて着実に作品を積み上げました。

現在のメンバーは女性三名、男性十名、それにコメンテーター二人を加えて総勢十五名です。年齢層は五十代から九十代まで、キャリアもさまざまの個性的な仲間が、

喧々諤々批評し合いながら楽しく勉強しています。

この勉強会の発足当初の目的の一つは、メンバーの作品集を出版することでした。しかし出版不況の中での実現は困難と判り、形を変えて実績のあるペン川柳会と協力して『卒サラ人の文芸館』(青蛙房)を四年前に出版しました。その本に掌編小説九編を掲載することで一応の目的を叶えることができました。

その後、長老の玉山和夫さんと新山章一郎さんが、それぞれ勉強会で書いた小説を編んだ自分の作品集を一昨年オンドマンドで出版しました。

さらに新山さんは昨年個人作品集の第二弾として『ある老女の死』(グッドタイム出版 オンデマンド、Kindle版)を上梓しました。概要はアマゾンでご覧になれます。

この勉強会発足十周年はおめでたいのですが、メンバーの高齢化は避けがたく、まだ少数ですけれど退かれた方もおられます。次の十年を担うフレッシュな人の参加を期待しています。(プロマネ 濱田、西川、廣澤)

創作短編



油彩 福本 多佳子

【小説】カジノ談義

清水 勝

《場面①》宗三郎組の幹部会議

組長.. どうも稼ぎが足らん。そこでダ、稼ぎを増やすための知恵を組幹部諸君から聞かせて貰おうというのが、今日の会議の目的だ。まず、組の大蔵大臣から現状を説明してくれ。

大蔵.. 警察の厳しい取り締まりもありまして、「みかじめ料」が大幅な減少です。それに代わる植木リー スの伸びが振るいません。

組長.. 何かいい話はないのか。

大蔵.. 伸びているのはアダルト・風俗への紹介と出会い系サイトによるもの。それに振り込め詐欺です。

そうそう、法学部出身の兄貴によるセクハラ・パワーハラのトラブル解決は大きな伸びです。

組長.. 弁護士代りのシノギだな。他にはないか。山上.. 市兵衛組では、ヤクが良い稼ぎだそうですぜ。

住田.. 組長、賭博をやりましょうや。今の丁半や花札では客を呼べません。これからはカジノですぜ。シノギは仮の宗三郎には出来ん。

会沢.. そうそう、お国がカジノ法案を成立させ、洋式賭博ということで解禁するようになりましたぜ。工崎.. 聞くところによれば、ギャンブル依存症対策に入場制限をするようですな。

松岡.. そこよ、入場資格のない連中こそが狙いよ。我らがそういう奴らに門戸を開放してやらなくちゃ。

稻山.. 今賭博には抵抗のある連中もカジノならやつてみたいと思うでしょう。名案ですぜ。

組長.. 金持ちは国営に任せて、我らは一攫千金を夢見る庶民を相手とするか。

大蔵.. 稼ぎどころが無くなれば、国であれ、我々であれ、やっぱり賭博が一番手つ取り早いシノギですな。組長.. 方針は決まった。国の動きを見ながら抜け穴を探し、庶民のニーズを掴むべくしつかりやつってくれ。

『場面②』 パチンコ業界での噂話

玉箱.. カジノでパチンコ客が奪われるのでは……

風車.. ほとんど影響ないでしょ。パチンコは街角にある気楽な遊技場ですよ。カジノは煌びやかなホテルの中にあるのですから、正装して行くくらいの

敷居の高い所ですからね。

玉箱.. 業界の幹部が落ち着いてるのはどうして?

図柄.. 今回、議員立法での提案をしたのは国際観光産業振興議員連盟（IR議連、カジノ議連）の代議士先生方です。この中には遊技業振興議員連盟にも所属している先生も多くいらっしゃるのです。

回転.. なるほど、我らの悲願であるパチンコの換金の合法化をお願いしている先生方ですよね。

図柄.. もうお解りでしょう。カジノのスロットマシンなら換金が出来る訳ですから、同じような遊技としてパチンコの換金の道も開けるというわけです。

点滅.. だけど、それなりの規制があるのでは……

図柄.. そう、カジノ業者と同じように収支決算の明確な

信用ある企業が条件とされるでしょ。

回転.. ほうほう、大手中心にパチンコ業界の再編成がおこなわれる訳ですか。

風車.. そうなれば、業界への影響は大きいですね。

図柄.. パチンコ業界の中にはカジノ進出を狙っている会社があると聞いていますよ。

玉箱.. 確かに、アメリカ企業だけに儲けさせる訳にはいかんヨ。我らもカジノ企業になれるわけダ。

回転.. 問題は一つ、ギャンブル依存症対策がパチンコ愛好者にどう影響するかです。

点滅.. 自己責任という言葉もありますから、法で全てを規制できないように思います。

風車.. この点は先生方にお願いしましょ。

『場面③』 日本経済を語る勉強会

黒田.. 今回の『統合型リゾート推進法案』により、ホテルや国際会議場、カジノ機能を備えた統合型リゾート施設を作り、外国人観光客を誘致し、地域の活性化や税収の向上を図るという狙いですが、如

何お考えですか。

白川.. まあ、こんな法案は経済成長期であれば考えられ

なかつた。当時は我が國の成長と発展・繁栄は新しい技術や製品の開発に國を挙げて取組もうとの機運に満ちておりました。それだけにこんな虚業に頼るなんて情けない國になりましたな。

福井..二〇二〇年東京オリンピック後、國家經濟のあり方が見通せないといふか、そういうことを考えない政治家にも問題がありそうです。

速水..そうですね。昨今は海外からの観光客が増加しているので、それに乗つからて、より多くの外国人観光客を誘引するためにはカジノしかないといふわけです。発想の貧困が極まりですな。

松下..アメリカの投資銀行の報告によれば、日本のカジノ収入は一兆五千億円と見積もっています。施設

建設等を含めた経済効果は七兆円との予測もあるようで、そこに魅力を感じるのでしよう。ただ、この見通しは少し甘い感じがしています。その理由はパチンコ愛好者の半分がカジノに向かうという仮定をしているからです。

三重野..確かに、入場者を制限すると言つてゐるのです

から半分という訳にはいきませんな。それにマカオの成功事例から中國の富裕者層が来るとの考えもどうですかね。

澄田..重要なことは、かつては世界を制覇した造船業やカメラ・工作機械、ソニーに代表される高度な音響機器や液晶技術が今や発展途上国に取つて代わられてしまつてゐる。今、日本を代表するのはトヨタ等の自動車産業くらいしかないと感じますよ。

佐々木..要是は日本の産業のあり方を考え、経済界も内部留保をたんまりと持つだけではなく、それを有効に使う意欲を示してもらいたい。今こそ新しい産業を興す革新性が求められていると思う。

その他、観光業者の集まり、海外事情通の現地報告、大阪庶民のお喋り、錢湯談義と賑やかです。

三十三通目の手紙

三 春

一九一三年、一家はハルビンに呼び戻された。私が生まれたのはその翌年の一九一四年である。

これは実話に基づいた物語である。友人の叔父上ボリスさんのことを耳にする度に、時代に翻弄されながらも懸命に生きた人々への愛おしさと物悲しさを覚えたものだ。いつか書きたいと思いながらまとめられずにいたところ、残念なことについて先ごろ天寿を全うされた。心からの哀悼の意を込めてこの物語を捧げたい。

まもなく父が蒸発。博打で大負けして行方をくらましたきり音沙汰がない。チエ一族は裕福で、ハルビンと天津に製粉工場を持つていたが、幼児を抱えたロシア人妻を援助してくれることはなかつた。途方に暮れた母は満鉄病院の看護婦となり、女手一つで子供たちを育てた。

私の名はボリス・ウラジーミロヴィチ・チエ（Борис Владимирович Чэ）。チエ（Чэ）は父親の中国姓「車」のロシア語表記だ。ロシアと中国のハーフである。

母エカテリーナ・フョードロヴナは十三歳で孤児となり、ペテルブルグの親戚に引き取られた。ペテルブルグ大学で学ぶ中国人留学生のチエと結婚したのが十六歳のとき。まもなく娘が生まれる。私の姉ムーザだ。

やがて成人した姉は満鉄職員の日本人と結婚した。私はといえば、大学を卒業したものの就職口がなかつた。工面して大学まで行かせてくれた母にこれ以上の負担をかけることはできない。そこで、幼いころから得意だった音楽の才を生かして、上海のロシア人ジャズバンドでトロンボーンを吹いて稼いだ。当時の上海は自由貿易都市として繁栄を極めており、生活を切り詰めれば家族へ

の手紙に仕送り金を忍ばせるくらいの稼ぎにはなつた。

この頃、日本は満州事変を機に満州全土を占領し、更なる進出を狙っていた。日中戦争を経て戦線は拡大を続け、ついに第二次世界大戦へと突き進んだ。

そして終戦。ソ連軍の囚人部隊が満州に侵攻して暴行と略奪を繰り返した。日本人たちが次々と引き揚げる一方で、我々ジャズバンドにはソ連に移動せよという当局の指令が下る。この移動と自分の無事を家族に知らせなければならぬ。だがいくら手紙をだしても返事がこない。家族の安否が気がかりで夜も眠れない日々が続いた。シベリア鉄道に揺されること数日、初めて訪れる母の祖国の風景にも心は晴れない。しかも、バンド仲間はモスクワへの移動を許されたのに、なぜか私だけは遙か手前のスヴェルドロフスク（現エカテリンブルグ）に留め置かれた。そこは閉鎖都市。一九一八年にロマノフ朝最後の皇帝ニコライ二世の一家が監禁され惨殺された地である。これは日本人を義兄に持つ私を体よく幽閉したものといえる措置だ。この苦境を乗り切るために、それまで独学に過ぎなかつたピアノや作曲を正規に学んで資

格を得る以外に道はない。

こうして二年が過ぎた。家族への手紙はこれで三十三通目。もう駄目か……と諦めかけた矢先、とうとう母から返事——母の嬉し涙が滲んだ手紙——が届いた。母も姉夫婦も幼い甥や姪もハルビンで無事に暮らしながら、二年間も行方不明の私を案じていたのだ。ということは、これまでの三十二通の手紙は、日本との繋がりを警戒する当局に没収されたのだろうか。姉夫婦はまもなく日本に引き揚げるそうだ。だが母を連れてはいけまい。それなら私が母をこの地に迎えて一緒に暮らそう。幸いにも音楽学校のピアノ教師として就職できることになった。

別れたジャズ仲間たちは、その後オレグ・ルンドストレーム・オーケストラとしてソ連に本格的ジャズを広めて名を馳せる。仲間の成功を喜びつつも、自分もあの時モスクワまで行けたなら……という思いがよぎることもあつた。だが今は教職に生甲斐を感じ、この美しい古都を愛している。想いを寄せあう相手がいなかつたわけではないが、母を一人にしたくなくて生涯独身を通した。

定年まで勤めあげ、その後は近隣の人々や教え子たちとの交流、そして自然との触れ合いが私を支え続けてくれる。母を亡くしてから一度だけ、日本に住む姉たちを訪れたことがある。だが、雑踏とコンクリートの街は性に合わなかつた。金も名譽も要らない、麗しい音楽と豊かな自然に包まれた慎ましい暮らし、それで充分だ。

二〇一四年十二月二十六日、百歳の誕生日、大病もせず、頭も足腰もしつかりしている。健康の秘訣は医者に一切かからないことだ。その日は私のためにコンサートが開かれ、街中の教え子や友人たちが祝つてくれた。幸せ者だとしみじみ感じる。しかし百歳ともなればさすがに少々ガタがきて、心臓が時々いたずらをする。私に残された時間はそう長くないだろう。エカテリンブルグにも外国人の立ち入りが許されるようになつたことだし、日本から甥を招いて、母が遺した十九世紀のコーヒーミルと銀のスプーンを渡さなくてはならない。

二〇一五年九月、どうしても会いたいという手紙を出してから半年後、日本からついに甥がやってきた。四十

年ぶりの再会だ。一緒に母の墓参りをし、花を供える。

母はこの甥を誰よりも可愛がつていたから、きっと喜んでいるだろう。ぬかるんだ道を軽い足取りで歩む百歳の私に、七十八歳の甥が「叔父さん、この分なら僕のほうが先に逝きそうだよ」と冗談を飛ばす。母の遺品を託せた今は思い残すこともない。いつ最期を迎えるとも、

友人たちが万事取り計らつてくれるに違いない。

二〇一六年十二月二十一日、百二歳あと五日。暖炉の前で隣家の夫婦と食卓を囲む。今夜はラフマニノフのピアノ協奏曲を弾いてからベッドに入るでしょう。

その深夜、見えない大きな手が私の心臓をつかんだ。だがそれもほんの一瞬のこと。胸にそつと手を当てたまま、私は静かに旅立つた。



かぐや姫のその後

内藤 真理子

大臣はそう言うと、ひなたを見てスコップと大きなバケツを両手で持ち上げた。

「わたちも、行く！」

窓を開けたら風さんがひなためがけてぴゅーつ。

「ちやむい」ママのサンダルを履いてベランダに出て十階から下を見ると自動車のライトが光っている。上を見たら真っ暗なお空にお星さまがいっぱい。

「きれーえ、おほちちやま」ひなたがつぶやいたら、

「綺麗じやろう、お嬢ちゃん」空から声がした。

「ええーつ、お嬢ちゃんじやなくて、あたちはひなたよ」

「ほー、ひなたつていうのかい、お日さまみたいでちょうど良い名前だね。これから星を取りに行くのじやが、

一緒に来るかい」見ると鼻の下にくくんとカールした

鬚のあるおじいさんが浮かんでいる。

「行つてもいいけど、あなたはだあれ？」

「宇宙のかなた、かぐや星から来た大臣じやよ。女王様の命令で、星をこのバケツいっぱいにとつて帰るのじやが、お嬢ちゃんじやない、ひなた姫もどうじや」

大臣はひなたの頭に全身がすっぽり隠れてしまう透明のカプセルのようなものをかぶせた。そして水色のバケツとスコップを大事そうに左手に持ち、右腕でひなたのカプセルを包み込むようにしてお空にふわりと浮かび、星空めがけて一直線にグングンと登つて行つた。

「さあ、ここが天の川銀河じや」大臣が急停止をして言つた。「わあー、おほちちやまがいっぱい」

「星は自分で光を出しているのじやよ、熱いから気をつけて掬つてくだされ」

「はーい」

ひなたはカプセルについているアームに手を入れキラキラ光るお星さまを小さなシャベルで掬つてバケツいっぱいに入れた。

「これだけとれば十分じや。女王のかぐや様が星が見たいと言われるのでわしがとりに来たのじや。地球に銀河カーを待たせてあるから、ひなた姫もかぐや星に来る

がよいぞ」

「ママが帰つて来たらいっちょに行くわ、ママはちょっとお買い物に行つてているの」

「まあ、ひなたつたらベランダの鍵をいつの間に開けられるようになったの。だめよ、早くお部屋に入りなさい」

ママが帰つて来て慌ててベランダに出てびっくり仰天。

「眩しい！ あなたは誰？」空に浮かんでいる大臣と、バケツの中でキラキラ光つている星を見ながら言つた。

「ママ、この人は、かぐや星の大臣なの。今、ひなた

といつちよにお星さまを採つて来たのよ。これからかぐや星に持つていくの」「かぐや星つて、あのかぐや姫の？」

「そうじやよ。かぐや姫は地球が気に入つて何度もお忍びで来られたのじやが、女王様になられ、お忙しいので旅行もできない。それでわしを遣わされたのじやよ。さあ、急いでひなた姫をお連れしなくては」

「星をとりに来たのに、どうしてひなたを連れて行くの」

「おー、そうじやつた。女王は地球を懐かしがつて、とりわけ日本人に会いたいと仰せなのじや。ママさんも

ご一緒に如何かな？」

「そんなことを急に言われても……でもひなたを一人で行かせるわけにはいかないわ。私も行きます。かぐや姫の星も見たいし……面白そう、さあ、行きましょう」

大臣は流線型の長い乗り物をベランダに横付けにして蓋を開け「銀河カーはカッコ良いじやろう」と言いながらひなたとママに「どうぞ」と手の平を上に向けた。

「カッコいいじやなくて、ステキでちよ。カッコいいは男の子が使うことばよ」ひなたはそう言いながらママと一緒に乗り込んだ。

大臣はコックピットの左側の席に、真ん中はひなた、右側にママ、と三人は並んで座つた。

沢山の計器が並んでいる中央のボタンを大臣が押すと、一瞬で周りの景色が変わつた。ひなたは手を伸ばして計器に触りたいけどシートベルトがあるので動けない。

「ひなた姫、銀河カーは自動制御ですので、目的地を設定すれば、後は流星が飛んで来ても宇宙塵があつても、全部回避してくれます。この計器類は自動制御を解除しなければ動かすことは出来ません」

「あ、つ、あの向こうにボーッと見える赤いのは何ですか？」ママが言つた。

「あー、あれはオリオン座の恒星、ベテルギウスじゃ。あの星はもう死にそうなのであんなに赤い色になつたのじゃよ。巻き込まれないよう急いで通り過ぎよう」

銀河カーは瞬間移動を繰り返しながらかぐや星に近付いた。「あれがかぐや星じゃよ。アポロンという恒星の周りをまわつている地球と同じような惑星なのじゃ」「大臣、アポロンは赤くないですか」

「まあまあ、女王様がお待ちじやから宮殿に……。さあ着きました。女王様、ひなた姫をお連れしました」「おう、ひなた姫、よく来てくれました。この星にはそなたの光が必要なのです」女王が言つた。

「どういうことですか」とママ。

「アポロンはこんなに赤くなつてしまつてもうすぐに亡びてしまいます。人身御供を神に捧げればアポロンはよみがえり、このかぐや星も助かるのです。日本にいる時に教わったやりかたです」

「人身御供？ 何を言つているの、冗談じゃないわ。

ひなたは幼稚園に行くのよ。女王様、かぐや姫は日本でとても親切にもてなされたのでしよう、恩を仇で返すつもり」「私どもの星にはエネルギーが必要なのです」「そんなの知らないわよ、ひなた、こっちにいらっしゃい」「大臣、その子を離さないで」

「ひなた！」ママが叫んだ。

「大臣、銀河カーにその子を乗せてアポロンの中心に突き進むのです。そしてそなた諸共、神の生贊におなり！」

ママは大臣に飛びかかり、ひなたを引きはがして抱きかかえると、大臣を押しのけて銀河カーに乗り込んで鍵をかけてしまつた。そして急いで

「行き先は銀河、太陽系、地球、日本、東京」とコンピューターに向かつて言つた。

「目的地を設定しました。ごゆつくり宇宙の旅をお楽しみください」コンピューターの返事が返つてきた。

「かぐや姫のその後」はどうなつたかつて？

大臣に無理難題を言つて、何とか解決したのじゃないかしら。今もどこかで生きていますよ、きっと。

きみを守りたい

馬場 真寿美

急がなくては――

僕はひどく焦っていた。

目の前に広がる道はどこまでも続く一本道。僕よりひと足先に彼女がここを通ったことは間違いない。そして、まだそれほど遠くにも行つていはないはずだ。

だから、この道を行けば、必ず彼女に追いつくことができる、見失うはずはない、そう自分に何度も言い聞かせながら、僕はひたすら歩みを速めた。

けれども……、

（アラボー！ 奇跡だ！ 信じられない！）
風になびく亞麻色の髪。きらきらと輝く大きな瞳。彼女を見ているだけで、僕は最高に幸せだった。

ずっと彼女を見守っているうちに、気づいたことがあ
る。明るい笑顔の裏で、彼女がその実、心の中に抱えていた様々な不安、葛藤、そして失望――

（平気よ、これぐらい。こんなことぐらいで私は挫けない）

彼女と出会ったのは半年前。
当時の僕は人生に躊躇、信じていた人々にも裏切られ、すっかり自暴自棄になつて殻に閉じ籠り、ひとり孤独に生きていた。自分の存在価値が全く見い出せず、空虚で無意味な日々を送つていた。そんなときだったのだ、彼女と知り合つたのは……。

心配する僕に、健気にも君はいつもそう答えるけど、

初めて彼女に出会ったとき、僕は頭をガツンと殴られたような強いショックを受け、その瞬間から彼女のどんな小さなしぐさからも目が離せなくなつた。彼女に見つめられると、僕の許しも得ずに心臓が勝手にぴょんぴょんと踊り始める。そう、僕はまさしく恋に落ちたのだ。
(ああ、こんな日が来るなんて……)

灰色一色だった僕の人生は色彩を取り戻し、僕を取り巻くすべての風景が一変した。しかも、あるうごとか、彼女もこの僕に好意を寄せてくれているという。

（アラボー！ 奇跡だ！ 信じられない！）

風になびく亞麻色の髪。きらきらと輝く大きな瞳。彼

そんな言葉を鵜呑みにするほど僕だって馬鹿じゃない。
だから、決めたんだ。命をかけて君を守ろう……と。

いつしか道は細く曲がりくねり、けもの道のようになっていた。辺りは薄暗く、歩けども歩けども一向に先が見えない。ここに来るまでに、どこかに脇に逸れる道でもあつただろうか。まさか……、道に迷った？ 一本道で？ 不安が頂点に達しようとしていた、ちょうどそのとき、

「やあ！」

誰もいないと思つていた背後からふいに声を掛けられ、僕は死ぬほど驚いた。恐る／＼振り返ると、若い男が笑みを浮かべて木に凭れかかるように立つていた。綺麗な顔立ちだが、どこか油断がならない、そんな印象の男だ。それでも、心細くて堪らなかつた僕には、周辺の地理に明るいらしい彼の存在が頼もしく、旅は道連れとばかりに連れだつて行くことにしたのだつた。

彼は無口だった。僕の方も人見知りで、初対面の人間にはなかなか打ち解けられない。なのに、どういうわけ

か彼には色々話を聞いてもらひたかった。僕は、彼女とこの先で合流するために急いでいること、どれだけ心細い思いをして、彼女が僕を待つてゐるかを考えると切なくて居たまれないことなどを彼に語つて聞かせた。ついでに、僕の恋人がどれほど才能に恵まれてゐるか、僕はつけ加えて語らずにはいられなかつた。

「彼女は歌手を目指していてね、歌の上手さといつたら、それこそ誰も敵うものはなかつたよ」

僕は、誇らしげに夢中になつて彼に話して聞かせた。

「テレビのオーディション番組で、ずいぶんと勝ち進んだんだ。彼女の歌を君に聞かせてあげたいぐらいだよ」「……知つてるさ」

それまで黙つて聞いていた男が、突然、僕の話を遮るように低い声で話し出した。

「それについては、僕からも君に言つておきたいことがあるんだ。彼女は何の努力もせずに、あの舞台にたどり着いたわけじやない。長い間、それこそ血を吐くような思いをしてようやく手に入れた栄光なんだ。いや、もうちょっとで手にいれるところだつた。それを、どこの

誰かも分からぬ糞野郎が、すべてを台無しにした」

僕の顔から血の気が引いていった。

「何の事だか……」

僕は喘ぎながら訴えた。

「彼女はもがき苦しんでいたんだ。僕は彼女を深く愛していた。そのままスターになれば、彼女はいつそう辛い道を歩いて行くことになつただろう。そんな目に彼女を遭わすわけにはいかない。だから、僕が……」

「殺した——んだね」

「——そうだ」

ぼくはしぶしぶ認めた。だが、少しも後悔なんとしている。すると、男は空を仰ぎカラカラと笑い始めた。

「なるほどね。それなら、僕も教えてあげよう。君が行くこの道だけど、どれだけ行つても彼女に出会うことは絶対に——ない。なぜなら、この道は地獄へ続く道だからだ。彼女はここにはいない」

「嘘だ！ そんなわけはない」

僕は絶叫した。だが、男はせせら笑いながら、

「彼女が君の恋人？ それは君の勝手な思い込みじゃ

ないかな。彼女の方では、君という存在すら知らなかつたはずだ。だつて、君は彼女の一つアンにしか過ぎないんだからね。知つているかい？ 君のようなクズを世間で何て言うか？ 知らないなら教えてやろうか。『ストーカー』って言うんだぜ。彼女を愛していただなんていうのも嘘つぱちだ。大方、今まさに夢を叶えようとしていた彼女を殺し自分のものにすることで、おのれの存在価値が上がるでも考えたんだろう？」

あまりの言葉に僕は絶句しながら、残つていたすべての気力を振りしぼるようにして叫んだ。

「君は……、いや、おまえはいつたい何者なんだ？」

すると、男はゆっくりと僕の顔に焦点を合わせ、

「君が彼女を探していたように、実は、僕もあの場所で人を探していたんだ」と答えると、僕を指差しニタリと微笑んだ。

「君を……ね。地獄へ、ようこそ」

二〇一六年。アメリカで歌手を目指す少女がファンの男による凶弾に倒れた。犯人は彼女が息絶えたことを確認すると、自らも続き、腹を撃ち抜き自殺している。

講演会をふりかえって

二〇一六年外部講師をお迎えして（講演会スナップ）

（十一月）「これからのお墓のあり方」

嵯峨基生氏

（二月）新春スペシャル

「津軽三味線」 村上豪氏

会員の飛入りも現れて…



（三月）慶大日吉構内の

旧連合艦隊司令部跡の

保存活動について

小山信雄氏



（十二月）Dandy Fourの合唱と

植木園子さんのピアノ演奏。

最後はロシア民謡を全員で！



（七月）ラグビーワールドカップ

など最新情報

ラグビーマガジン編集長

田村一博氏



活 動 報 告



写真 平尾 富男

ペソ俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

俳句は何年やっているかが問題ではない、どれほど読んで、どれほど作ったかが肝心。などとよく言われる。その点、ペソ俳句のメンバーは熱心さにおいて引けをとらない。ロビーにあるコピー機を駆使して時間を生み出し、毎回全句について鑑賞がなされ、熱心に批評が展開される。探究心旺盛なのがなによりの特徴。その後の二次会ではリラックスした俳句談義が続く。

今年のニュースは、新メンバーとして斎藤征雄さんが参加されたことである。吟行にも参加してくださり、大いに盛り上がった。毎月の句会で熱心に健吟されている。

その一方、体調を崩されて、重子さん、令華さんが後半休みがちであったことも触れなければならない。なによりも、回復されて、またおふたりの仲の良い掛け合いが聞きたいものと心から願つている。

今年の吟行は、十一月七日から箱根仙石原の湿生花園に一泊の吟行を敢行し、初冬の箱根を満喫した。

ここに一年間の成果を纏めさせていただく。プロマネを始めメンバーのご協力がなによりの力である。

陽溜りに冬の薄の膨れるし

七草の名札たてゑて園枯るる

木道に寒き靴音背に夕陽

冬麗や影を離さず鯉眠り

日面の中蓮池の枯るる音

宴席に二人足らざる冬紅葉

特別投句

二人居ることが幸せ年新た
友征きしそよ風に散る桜かな

玉碎の声なき声や敗戦忌

無人駅と成りし故郷の良夜かな
開戦忌使われぬままの日本刀

玉山 和夫

防人の多摩の横山梅香る

安藤 晃二

池の面の衣となりたる花筏

輸送機の霧中にどかと横田基地

庭師らの疳高き声冬日和

ゴスペルを妻と歌ひし大晦日

いつも句会をよくまとめてくださっている。多彩な趣味を持つておられる作者は、句柄が豊富。今回も多様な句

が並んだ。二句目、花筏は、桜の花びらが重なつて流れ

ていくさまをいう纖細な季語である。季語の意をくみ、花筏が水の面の衣だという作者の発見がこの句の眼目。

春浅し割つて取り出す貯金箱

上田 信隆

雪解けや海に傾く能登瓦

山笑ふ上り下りも同じバス

山の端に鳶の旋回晩夏光

ほろ酔ひの膝から醒めるおでん酒

.....

これからは身の丈暮らし松納

猪股 重子

一椀の温み手にあり寒蛻

早春や地球儀の青一廻し

拋り所探して宙に瓜の蔓

一幕の綾帳下りて冬ごもり

.....

最後の句は、しばらく療養されるというメールに添えられていた句である。一幕というところに、作者の願いと救いがある。その芝居いや人生の場面は二幕、三幕と続くという希望を詠う。俳句は向日性こそが骨格をなす。春を迎えるための力を蓄えつつ冬に籠るのである。

五句目。ちかごろ、おでんはコンビニの冬の風物詩となつた。おでんに詩情を詠いこむことはなかなかに難しい時代になつた。しかしこの句には、勤め人や、庶民が隙間風の入るような常連の集まる居酒屋の風情が良く出てゐる。企業O Bの共感を得た句となり、高得点句だった。

武藏野の水湧き出でて花菖蒲

大泉 子泉

五月晴れ了々として富士青き

徽の香の古き手紙を整理せり

四色に咲く朝顔や妻を呼ぶ

細きまで高さを競ふ冬の木々

八月の句会に鮮烈デビューされた。一句目は、その時の高点句。闇と闇の間をつなぐのが遠花火であつた、といふのは作者の詩的発見が眼目。五句目は箱根の初吟行句。物をよく観察して句を作るのが吟行の原点。紅葉の中に冬芽がもう青い色を持つていた発見は嬉しい。。

日常を句に、作句は私の歴史と位置づけておられる。その姿勢は迷うことなく、一徹の人である。四句目、ペラ

ンダの朝顔であろうか、ある朝、四色の花をつけた。見

つけた喜びと、その喜びを分かつ妻が近くにいるという二重の喜びが下五の措辞に現れている。

齊藤 征雄

寺山修二は若い頃、盛んに俳句を作つた。今も古びない句に老若に拘らず魅了されるファンが多い。一句目、五

句目は修二俳句の雰囲気を持つてゐる。作者の青春性が溢れる。俳句は精神を若く保ち、自然を観察することが大切であることを、思い起こさせてくれる句である。

早春の野は貧しきか雀群る

志村 良知

手毬花冴えみて雨の野辺送り

田水張る泥の轍は国道へ

願纏ひ七夕竹の香り立つ

峰雲の暗き底へと道の伸ぶ

闇と闇その間をつなぐ遠花火
風の押すままに遠出し秋の暮

秋雨に降り込めらるる一人酒
ビルの群に霧のかかりてはぐれ鳥

紅葉の一樹の蔭に芽吹く青

内も外も声やはらかや松の内

首藤 しずを

卯月波巨き廃墟を洗ひけり

子雀の巣立ちたるあさ空ひろく

盛り場にうすき月あげ夜の秋

己が囲に脚の絡まり冬の蜘蛛

一句目、現代の俳句に新年を普遍性を持つて読み込むのは難しい。この句は成功している。年を重ねて平穀が一番居心地がよいという作者の身辺を感じさせる。言い過ぎず充分に言い尽くす俳句の良さである。二句目、営々と続く海の営みと人間の営みの空しさの対比が秀逸。

校庭の雪の融けだす四時間目

中村 晃也

逃水の立ち止まりる交差点
枡酒を呷る揃ひの祭り足袋
浅間嶺に雲の乱れや蕎麦の花
手渡しに風送りだす芒原

一句目、下五の四時間目がこの句を際立たせる。チャイムがなつたあとの子供の表情が見える。給食か弁当を食べ終わつたら、昼休みの校庭はきっと子供たちの声で充たされることだろう。日が高くなつたからという条件描写ではなく、人間の営みが下五の措辞から膨らむ。

撫牛の薄目の先や薄紅梅

保坂 令華

薄墨の魚影の遊ぶ水の春

結界や夏蝶白き神の杜

作務僧の砂利均す音霧の中

穏やかに生きること良し残る虫

仲良しの重子さんと句柄がまったく違う。俳句の愉しさでもあるし、コンビが絶妙な所以だろう。纖細な情感を詠うことが得意である。二句目、水の春という難しい季語を使いこなされて、春の季感がよく出ている。四句目は作者の得意な景、霧の中の音が秋の気配を濃くする。

一筋の航跡白し夏立つ日

森田 元斐

山間の植田清爽握り飯

煤竹の籠に紅白こぼれ萩

縄文の石残る谷戸冬日さす

灯油売る声町渡る冬の朝



多趣味の作者である。三句目はお茶室の設えを詠つた。
地味な煤竹の花器に萩は鮮やかな色彩である。始まる御
点前はさぞ、楽しい集まりであろうと読み取れる。五句
目、一転、現代詠。灯油の引売りの声が町の遠くから近
づいて、また遠ざかる。中七の渡るの措辞に感心した。



二〇一六年「ベン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

クラブ内で川柳を勉強しようという声が上がったのは、二〇〇三年七月でした。クラブの長老で、自ら川柳の会を外部で立ち上げていた小林正憲氏を宗匠に仰ぎました。

クラブ初の文藝本『不良老人たちの溜息』が青蛙房から出版されたのは、今を去ること十年前の平成十八年四月でした。その出版を記念して、有楽町の日本外国人記者クラブで出版記念パーティーを盛大に開催。

昨年十二月には百四十四回を迎えたベン川柳分科会を記念して、第四冊目の出版を敢行するに至りました。今回は諸般の事情で過去三回の商業出版（青蛙房）とは異なり、オンデマンド方式でT E M出版（アマゾンコム）から出版し、会員諸氏にもご購入ご協力を頂きました。改めて感謝する次第です。

以下に、二〇一六年一月～十二月各月のお題ごとに、作者の自薦或いは世話人の選んだベン川柳メンバー十三名の各一句を世話人の無手勝流講評と併せてご笑覧に供します。

●一月 お題【舞う】

ボーナスが舞った昭和は今何処

(ふげん)
(不言)

作者が現役時代、給与、ボーナスは現金支給でした。ボーナスの分厚い札束は机の上で縦に立つたと豪語しました。古きよき時代です。

●二月 お題【豆】

鬼嫁に面は要らぬと豆が言う

(めいめい)
(明迷)

節分に撒かれる豆が言うには「あんな恐ろしい鬼の顔をした鉄面皮のお嫁さんには、遠慮なく思いつ切り投げつけて下さい」。豆を蒔くご主人が日頃お嫁さんに虐げられていることを知っているのです。

●三月 お題【泊める】

女狐を泊めたあの日が曲がり角

(ウォツカ)
(火酒)

今は亡き旦那に成り代わつて女狐が詠みました。他人も羨む大の仲良し夫婦だったと、古くから作者を知る人が教えてくれました。夫婦円満の秘訣は、夫が強い妻（女狐）に首を垂れて従うことだったと知らされたとか！

●四月 お題【屑】

アルバムも他人が見れば屑の山

(不言)

アルバムには、持ち主の人生の喜び（と悲しみ？）が詰まっている宝の山ですが、他人さまには何の価値もない屑の山だと作者は詠んでいます。その通りですね。

●五月 お題【叩く】

痴漢の手叩くどころか握りしめ

(火酒)

後ろからお尻を触った痴漢は、触られた女性（作者？）の顔を見ていません。生涯触られたことがなかつた女性にとつては、天にも上る？感触だつたようです。嬉しさの余り、思わず痴漢の手を握つてしましました。作者の経験を詠んだわけではないとは、作者の弁です。信じましょう。

●六月 お題【虹】

すぐ消える選挙公約そして虹

(零門)

選挙公約を虹に例えるとは、名人ベン川柳子でなければできません。分かり易く、しかも眞実を突いた立派な

時事川柳です。

●七月 お題【揺れる】

揺れ惑うユニオン・ジャックの表裏

(鬼瓦)

英国のEU離脱を詠んだ時事川柳です。ほぼ満点の高得点を得た作者渾身の作品。作者のお得意はお色気路線だけではないことを証明しました。

●八月 お題【ビール】

天罰かぬるいビールに大年増

(明迷)

今月の川柳子たちは、「温いビール」と「大年増」を一緒にしてしまいました。これでは天罰が下ること間違いないなし？です。尤も、温いビールよりは大年増の方がよっぽど良いと言う川柳子もいます。「年増の深情け」は怖いとも聞いていますが……。

●九月 お題【漏らす】

無礼講本音を漏らし窓際に

(零門)

宴席で上司から「今日は無礼講だ」の言葉を信じた作

者の失敗は、大方の正直川柳子の思い出です。素晴らし
い「サラ川」です。

●十月 お題【壁】

真夜中のトイレ通りも壁伝い

(零門)
(れいもん)

九月に続いて最優秀獲得の作者は、日頃から「折り紙」「太極拳」を後期高齢者のおばさま方に教えながら川柳を考えています。(お年寄りの)生徒さんたちと話をしていると川柳のヒントが沢山あるのだそうです。

●十一月 お題【示す】

どこへ行く行方示せぬゼロ金利

(ウイスキー)
我々好

作者は貯まつた巨額の銀行預金の使い道を知りません

が、過去には毎月の利子の増え方を楽しんでいたのにと
眩いています。お金は使つてこそ価値があるということ
を教えて差し上げたいと思う世話人の今日この頃です!

【醉雅】

(西川武彦)
(にしかわ ぶげん)

「豆」…指先で豆を撫ぜなで味探り
「読む」…くされ縁読んで読まれて五十年
「叩く」…減らず口叩き交わして五十年
「揺れる」…パンチラでページ進まず心揺れ
「バス」…夜行バス空けた隣席美女はバス

作者が現役の頃、通勤に利用していたバスの中で夢見
心地の時間を味わっていたそうです。警察のお世話にな
らなかつたということは、その技が知能的だつたからな
のだと今自慢気に打ち明けています。

●十二月 お題【バス】

バスの搖れ乗じて触る知能犯

(不言)
(ふげん)

尚、世話人推薦の憂愁(ー)五句を以下に。(順不同)

【不言】

(岩崎洋一郎)

- 「豆」…糖尿も豆大福に勝てやせぬ
 「揺れる」…大地揺れ妻よりボチを抱いて逃げ
 「ビール」…ビール泡消える長さの祝辞かな
 「漏らす」…高齢者漏らして暮らす愚痴と尿
 「バス」…バスの揺れ乗じて触る知能犯

【井波】

(稻宮健二)

- 「豆」…核だっこ胸張りゆする豆国家
 「ビール」…除染完ビールで祝うは役所だけ
 「示す」…トランプの占い示す魑魅魍魎
 「壁」…明(ミン)のまね壁を築けて侮られ
 「バス」…朝のバス(ほ)の字あの人今ダルマ

【醉深】

(平尾富男)

- 「豆」…ひよこ豆一粒ごとに違う顔
 「治める」…朝起きて誰を治めたか覚束ぬ
 「叩く」…窓叩き呼び出す筈がパパの顔
 「示す」…政(まつりごと)誠意示すは札の束
 「バス」…無償バス持つ客ばかり昼のバス

【だし】

(大野 星)

- 「叩く」…できてるな叩く仕草がにくらしい
 「虹」…梅雨休み虹と紫陽花妍競う
 「漏らす」…銀座ママ吐息漏らしたよき時代
 「ビール」…ビール飲む時間惜しんで励んだが
 「壁」…年取れば「壁に耳あり」過去のこと

【零門】

(松谷 隆)

- 「虹」…すぐ消える選挙公約そして虹
 「揺れる」…ゆらゆらと揺れる谷間に顔も見ず
 「漏らす」…無礼講本音を漏らし窓際に
 「壁」…真夜中のトイレ通いも壁伝い
 「示す」…子に示す手本は耐えた五十年

【損得】

(細谷 博)

- 「肩」…仰ぎ見る肩は肩でも星の肩
 「虹」…ツキがない虹を掴めず雲掴む
 「ビール」…新ビールカロリー抜けば気も抜ける
 「壁」…馬鹿の壁剥がした向うに次の壁
 「バス」…再雇用還暦過ぎたバスガール

[安兵衛]

(山縣正靖)

- 「揺れる」…酒呑めど揺れる心は納まらず
 「ビール」…取り敢えずビール枝豆まず乾杯
 「漏らす」…地下の水誰が漏らしたシヨンベンか
 「示す」…指示ばかり道示すのが總理だぞ
 「バス」…早く乗れバスが出るぞと大統領

[晃二]

(安藤晃二)

- 「漏らす」…ここだけと漏らし舌禍にあゝ痛恨
 「屑」…屑屋かい？古物商だと言ひ張る子
 「示す」…判断の正極示す磁石欲し
 「壁」…壁壊すマイト使わズノーベル賞
 「叩く」…酌量す会社も叩けば埃出る

[火酒]

(三春)

- 「泊める」…女狐を泊めたあの日が曲がり角
 「叩く」…痴漢の手叩くどころか握りしめ
 「揺れる」…桃尻が揺れて血圧跳ね上がる
 「漏らす」…色仕掛け漏らす吐息も罷のうち
 「壁」…壁書きの「今日のお薦め」グチとキス

[鬼瓦]

(富田佳瑞)

- 「屑」…カラスやえ諦め顔の食えぬ屑
 「読む」…搖れ惑うユニオン・ジャックの表裏
 「漏らす」…太閤が漏らし三成連れ小便
 「壁」…壁にドン障子をブスリ食えぬ奴
 「バス」…バスの中目線で探る人の情

[明迷]

(八木信男)

- 「泊める」…「ねえ泊めて」言われてみたい春の宵
 「虹」…虹さえも細切れにするビルの街
 「ビール」…天罰かぬるいビールに大年増
 「漏らす」…明細にため息漏らし発泡酒
 「バス」…間違えて押したボタンで降りるバス

[我等好]

(浜田道雄)

- 「豆」…豆知識ネットでさらう現代っ子
 「泊める」…友泊めて酒屋と女房に借りが増え
 「叩く」…尻叩く女房の愛情五月蠅がり
 「ビール」…ビヤホール女ばかりの怪気炎
 「示す」…どこへ行く行方示せぬゼロ金利

ペン・フォト句会

早いもので、当会は、平成二十二年八月にO B ペンク ラブとしては二十年振りに生まれた新しい勉強会として発足してから、本年で七年目を迎える。

メンバーの弛まぬ研鑽のお蔭で作品のレベルは毎年に向上し、句はともかく写真は非常に上手になった。

いつも作品を意識して面白い被写体を探す体质が身につき、単なる風景写真ではなく、普通とはチョット違ったアングルから、他人なら気に留めないようなシーンをカメラに収めておく習慣が醸成された。

写真は情報のビット数が圧倒的に多いので、美しいま たは珍しい写真はアイキャッチャーとして重要な役割を果たす。

これまでの成果を取り纏めた作品集を編纂するために昨年の九月から毎月一回、勉強会の始まる二時間前に全員集合して、PCの講習会を開催している。

目的は自分の撮った写真画面に自作の句を挿入する手法の習得である。具体的には画面のどの位置に文字を並

べるか、文字の大きさ、色、字体、行間の調整やらあら ゆる手法を学ぶのである。

画像もただの長方形でなく橢円形などの特殊形の枠に入れる必要も生じ、画面に合わせた枠の幅や色の選択によつて作品の品位が左右される場合もある。

一方、写真のシャッターを切る前に、写真画像のどのあたりに文字を挿入するかを考えて、そのスペースを念頭に置いて構図を決める場合もある。

一作品を仕上げることだけでも大変なのに、計画中の作品集のように、複数の作品を一枚の紙面に載せるときには、画像自体の大きさや色彩など、全体のバランスを考慮して図を配置する美的センスと構成力が要求され、同時にPCの機能を十分發揮できる技術的センスが要求される。

当会のメンバーのような年輩になると全てを習熟するまでには時間がかかるが、これも老化防止の一手法と割りきつて研鑽を積んで戴いている。

近々出版される作品集が楽しみである。

（プロマネ 中村晃也）

英語を読もう会

当会は、一旦休会状況から、二〇十六年心機一転再開しました。英語の文献から言語表現の面白さを学ぶこと

1月 安藤さん

- New Japan, Old Japan. Oil Prices and Global Growth

2月 野瀬さん

- As the world's refugee problem grows,
Japan pulls up the drawridge 他2編

3月 森田さん

- China, U. S. cite progress on N.Korea sanctions deal.
But there's no quick fix. 他

4月 安藤さん

- 元ドイツ副首相Joschka Fischer 氏による
“Ever Closer Union or Common Market?”

5月 富岡さん

- Media are ruining English • Article of Myanmar Times 他

6月 上田さん 佐藤さん

- Panama Papers and America's problem

7月 下山さん

- 2009.4.5 のオバマ大統領のチェコ、プラハ演説の映像

9月 安藤さん 大泉さん

- NO WHERE MAN • PAPERBACK WRITER • HEY JUDE
他に数曲、音と映像で回顧、鑑賞

10月 野瀬さん

- New York Timesの社説 “Hillary Clinton for President”
他を題材に、米国大統領選挙を議論

11月 森田さん

- ドナルド・トランプ大統領の功罪、米大統領選について
Donald Trump Appears to Soften Stance on Immigration,
but Not on Abortion 他7編

12月 安藤さん

- Javier Solana : Why Multilateralism Still Matters 他

は勿論、都度、題材が「何でもあり」の広範囲なので、各プレゼンターの意図が興味深い議論に繋がって行きます。新メンバーの参加を歓迎します。

(プロマネ 安藤、大泉)

ホームページ関連

ホームページ関連での昨年最大のトピックスは、組み込み検索システムの稼働である。ホームページ公開サイトの『800字文学館』『エッセイコラム』『ペン写真館』の三つのジャンルについて、作者名から作品が検索できるようになった。

特徴は簡便迅速性で、トップページの検索システムのアイコンをクリック、作者一覧から作者名をクリック、指定の作者のジャンル別作品一覧から作品名クリック、の計三クリックで希望する作者の作品を閲覧できるようになっている。まだ使った事がないというホームページ愛読者の方は是非触つてみて頂きたい。

検索システムの稼働で、過去のある特定複数の作品へのアクセスが激増するという現象が起きた。新規作品へのアクセス数が減つたわけではないが、その何倍ものアクセスがある。この結果、会員の意識に「新しくアップする作品を読んで頂くにはどうすれば良いか」が強く登るようになった。アクセスして頂くための題名の工夫、

本命たる文章の切磋琢磨、等々。読者への利便性提供のための検索システムであるが、併せて会員の「読んで頂きたい」という意識が高まつたことで、検索システムへの投資の回収は成った、と考えてよいであろう。

昨年のもう一つの目標は、毎月一日のトップページ更新である。これは諸般の事情から一、二日遅れた月もあつたが、ほぼ達成できた。毎月一日の更新は、企業OBペンクラブの活動の質そのものを問われる重大事項とらえて、今年も確実な更新を目指す。

スマホ対応は全く出来ていない。会員の多くがまだガラケーだから、という冗談はさておき、近い将来考えなければならぬ課題である。その時は、ホームページの改善というより、完全リニューアルということになるのであろう。頭の体操の種は尽きないのである。

(プロマネ 志村良知)

企業O・B・ベン・クラブ本年の歩み

平成二十八年（二〇一六年）

（会員への敬称略）

一、役員人事

前年十二月に役員の改選が行われ、左記の新役員が、以後二年間会の運営に当たることとなつた。

名誉会長	西川武彦
理事、会長	大越浩平（理事留任）
理事、副会長（総括）	安藤晃二（理事留任）
理事、副会長（財務）	清水勝（理事留任）
理事、運営委員長	森田晃司（理事留任）
理事、事務局長	志村良知（理事留任）
理事、広報・涉外担当	・新年会（二十二日）
理事、副運営委員長	・会員…四十七名、ゲスト十三名参加
監事	第七回「800字文学館賞」入賞者表彰
会計担当	・二月例会（十八日）
	・会員講演＝藤原道夫
	・山縣正靖（留任）
	・宍戸三春（新任）
	・首藤静夫（新任）
	・新井一郎（新任）
	・松浦俊博（新任）

二、年度方針

新執行部が大分若返つた。いかに上手く世代交代が出来るかが、今年度運営の鍵。

- ①各プロジェクトの更なる活性化努力
- ②P・E・N・活動結果の外部発信の多様化推進
- ③財務健全化の維持

三、各月の活動報告

一月例会（二十二日）

・新会員＝児玉寛嗣

・新年津軽三味線演奏会＝村上豪氏

『よされ節』『十三の砂山』『じょんがら節』
『ベンチャーズ・メドレー』など全十一曲

会場に歌い手をつのり、『花笠音頭』の伴奏も

『免疫のはなし』

・二〇一六年版会員名簿確定配付 会員数七四名

・第八回何でも書こう会熱海合宿（八、九日）

会員一九名が一泊の勉強・懇親に参加した。

三月例会（十七日）

・ゲスト講演＝小山信雄氏・日吉地下壕保存会

『日吉キャンパスにある戦争遺跡』

（連合艦隊司令部跡）

・大平 忠会員＝九州支部へ転出

四月例会（二十一日）

・会員講演＝松浦俊博

『放射線によるがん治療技術』

・『悠遊』二十三号配付

五月例会（十九日）

・『悠遊』二十三号合評会

六月例会（十六日）

・会員講演＝塚田 實

『経済のグローバル化と私の会社生活』

七月例会（三十一日）

・会員講演＝西川武彦とダンディー・フォーパン演

ダンディー・フォー

・新会員＝皆川和徳

・ゲスト講演＝田村一博氏（ラグビーマガジン編集長）

『日本ラグビーの行方。ワールドカップの魅力』

八月（夏休み）

九月例会（十五日）

・会員講演＝首藤静夫

『古代史は面白い—卑弥呼のいる風景』

十月例会（二十日）

・会員講演＝野上浩三

『英語で読むクリスティーの楽しさ』

・ペン川柳の会＝『不良老人の溜息』TEMより出版

十一月例会（十七日）

・新会員＝浅井壯一郎

・ゲスト講演＝嵯峨基夫氏

『これからのお葬儀とお墓のあり方』

十二月例会（十五日）

・ペン俳句会＝箱根仙石原吟行（七、八日）

トップテナー … 根岸紀雄氏

セカンドテナー … 久富有道氏

バリトン … 山下健二氏

ベース … 西川武彦会員

ピアノ伴奏 … 植木園子さん

ダンディー・フォーの合唱、植木さんのピアノ独奏、

最後に全員でロシア民謡の合唱を楽しんだ。

二〇一六年は新役員の第一年目。会員数七一名でスタートし、大過なく推移した。年度中三名の新会員を迎えた。健康上の理由等で退会する方が、会の創生期会員も含めて七名。淋しいことであるが時の流れということで。

十二月付での退会者

猪股重子さん、田富實さん、中川路明さん、保坂令子さん、松浦武弘さん、横内則之さん、吉寄清己さん。

ベン川柳の会が、川柳と小咄を集めた『不良老人の溜

息』＝懇々自適の巻＝をTEM出版から出版した。

他の勉強会においても、出版に備えて、写真入りページを自分の手で編集するパソコン勉強会も開かれ、出版への意欲は高い。

分科会活動

「サロン21」は、会員と外部のプレゼンターによる基調講演と討議のスタイル。二十一世紀の諸問題を広く深く。論議の成果はホームページにアップされている。

「英語を読もう会」はしばらく休会していたが、プロマネの努力で復活し、海外マスコミに載った時事の話題の紹介を輪番で行っている。

「何でも書こう会」は、年間二十一回の会合に皆勤者が二名、惜しくも逃した人数名、各会合には二十名近い出席者があつて益々盛んである。

「ベンフォト句会」は、六十八回を重ね。フォト句専門の句会としては、おおげさでなく日本屈指の歴史と内容だと思われる。今年はその成果を集め句集を出版するべく準備中である。

「掌編小説勉強会」は、十一月には第五十三回を数えた。

勉強会にはここに絞り研鑽を積むディープなメンバーもいる。

「ベン俳句」は、十二月で二百六十八回目の句会を迎えた。年一回の一泊吟行、今年の箱根仙石原は好天に恵まれ名句が並んだ。そろそろ句集を、の声も出ている。「ベン川柳」は十年目を迎えた句会も百五十二回を数えた。

遠隔会員も投句参加で活躍中。句集『不良老人の溜息』を出版した。

企業O Bベンクラブの活動を支えるホームページは、昨年並みのアクセス数で、やや伸び悩み。その中で三月から運用開始した著者検索システムへのアクセス数が月平均三百五十件あまりにのぼり、この効果かアーカイバル作品が多く読まれるようになつた。今後はいかにトータルアクセス数を増やすか、特に新しい作品を読んで頂くか、作品の質を上げる努力と共に、ホームページのあり方を考えて行きたい。

(事務局長 志村良知)

一般の方の体験出席も歓迎です。

(プロマネ 首藤)

「何でも読もう会」発足

今年四月から「何でも読もう会」がスタートした。

次頁の当会紹介文のとおり「書く」ことに重点を置いた当会だが、書くこと・読むことは表裏の関係で、良く読むことが次に書くための動機づけになる。

また、小説、紀行文などの名作を自分だけに内蔵するのは勿体ない、感動を分かち合いたい、意見交換したいという思いも当然生まれる。

読むこと、しゃべることは大好きだけど、書くのははちよつと? という方が気軽に参加できる、肩の凝らない読もう会にしたい。

当面は、月に一回、二時間×二作品を鑑賞する。当月の担当が読後感想や作品の生い立ち、背景などを話したあと、ワイワイガヤガヤと意見を述べ合う。

最初に『北越雪譜』(鈴木牧之)と『草枕』(夏目漱石)を読んでいる。古典から現代物まで広く読みたい。

企業OBペンクラブの紹介

当会は平成元年（一九八九年）、世に物申したいサラリーマンOBの集まりとして発足しました。現在の会員数は約七十名。男女を問わず、「書く」ことに興味を持つ方々、PENを通して論じ外部に発信したい方々に参加を呼びかけながら、輪を広げています。

サラリーマンの現役時代、日本の経済大国への過程で少なからず貢献した自負はありますが、それだけでよかつたのか、との反省もあります。今からでも遅くないとの思いで、本当の豊かさを求めて、日本という国のあるべき姿を探りながら、自前のホームページを充実させて外部に発信しております。

クラブには、月例会のほか、エッセイ、小説、俳句、川柳、フォト旬、時評など、勉強会・分科会が多数あり、会員に切磋琢磨の場を提供しています。更には、各界からゲストをお招きして講演会で知識を磨いております。

年一回発行の同人誌『悠遊』は、二〇一三年に創刊二十周年を祝いました。

著書は、『知らぬは日本人ばかりなり』『あつと驚く國際マナー常識・非常識』『ゆつたり生き生き年金暮らし心得帳』など共著・編著が十八冊。

書きたい人、物申したい人、大歓迎です！ ご一緒に、遊び心を忘れず、人生を心ゆくまで楽しみませんか？

最近の出版物としては、文芸書『卒サラ川柳』シリーズとして、『不良老人たちの溜息』『卒サラも遠くなりに

入会金は不要、年会費は一万五千円です。

氏名	出身会社
玉山 和夫	通産省、日英協会
塚田 實	日立製作所
都甲 昌利	日本航空
富岡喜久雄	フジタ(藤田組)
富田 佳瑞	三菱商事
鳥海 博	山一証券
内藤真理子	
中村 晃也	三菱化学
新山章一郎	在日米国海軍基地
西川 武彦	日本航空
西川 知世	三菱倉庫
新田由紀子	シュプリンガー・ジャパン
野上 浩三	日本生命保険
野瀬 隆平	石川島播磨重工業
橋本 政彦	日商岩井
羽田 壽夫	三菱重工業
馬場真寿美	ヤマハ
浜口須美子	稻畑産業
浜田 道雄	労働省
濱田 優	三菱化学
原田 信	NHK
平尾 富男	キヤノン
廣澤 重穂	シータス
福本多佳子	日本航空、Creative Tours
藤原 道夫	日本赤十字社(現職)
細谷 博	日立製作所、日立メディコ
松浦 俊博	東芝
松谷 隆	富士通
松田 昌康	東芝
水原亜矢子	東急電鉄
皆川 和徳	富士通
三 春	住友商事
森田 晃司	三菱商事
八木 信男	浪速学院高校(現職)
矢澤 正二	信金中央金庫
山縣 正靖	三菱銀行

会員名簿 (五十音順)

氏 名	出 身 会 社
浅井壮一郎	あさい そういちろう
阿部 典文	あべ みちふみ
新井 良侑	あらい よしゆき
安藤 晃二	あんどう てるつぐ
池田 隆	いけだ たかし
市川 忠夫	いちかわ ただお
稻宮 健一	いなみや けんいち
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう
上田 信隆	うえだ のぶたか
上原 利夫	うえはら としお
鵜飼 直哉	うかい なおや
内田 満夫	うちだ みつお
大泉 潤	おおいずみ じゅん
大越 浩平	おおこし こうへい
大月 和彦	おおつき かずひこ
大西 宏	おおにし こう
大平 忠	おおひら ただし
大野 昕	おおの ただし
川口ひろ子	かわぐち ひろこ
川村 邦生	かわむら くにお
木村 敏美	きむら としみ
金京 法一	きんきょう ほういち
倉藤 金助	くらふじ きんすけ
児玉 寛嗣	こだま ひろつぐ
斎藤 征雄	さいとう まさお
清水 勝	しみず まさる
志村 良知	しむら りょうち
下山 健夫	しもやま たけお
首藤 静夫	しゅとう しづお
杉浦 右藏	すぎうら ゆうぞう
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう
田原 敬	たはら けい
	味の素
	石川島播磨重工業
	ダイセル化学工業
	三菱商事
	東芝
	東芝
	三菱電機
	三菱レイヨン
	東芝情報システム
	住友商事
	富士通
	神戸製鋼所
	三菱化学
	NECインフロンティア(旧 日通工)
	労働省
	松下電器
	三菱化学
	三井物産
	アトリエ・リヴィエール
	第一勧業銀行
	郵政省簡易保険局
	三菱商事、三菱総研
	桜井会計事務所
	東芝
	三菱化学
	明治安田生命（安田生命）
	リコー
	サントリー、B-R31 アイスクリーム
	三菱化学
	NTT、三菱電線工業
	丸紅、松竹
	和田製本工業

▽今号も当クラブが誇る三人の女流作家による創作短編の競作で、硬派な文章に偏りがちなクラブの年刊誌に花を添えてくれました。「大テーマも、「オリンピック」そして「ソウルフード」で幅広く会員各位の知見が披露されます。自由テーマでもユニークな作品がそろいましたので、クラブ内外の読者の満足のいく「二十四号」に仕上がったものと確信しています。

▽編集委員二年生。今号も、会員皆さんの作品を少しでも読みやすい形でお届けしたいとの思いで編集に携わりました。力作揃いなので、これまでに劣らずいい『悠遊』に仕上がったと思っています。

(平尾)

▽今年もOBペンクラブの絵心ある会員の方々からの写真、絵画、イラストを使ってのPC編集作業を楽しませていただきました。今回は九州の木村敏美さんからの可愛い絵が登場、新しい魅力が加わりました。「二十五号」も新人アーティストの作品をお待ちしています。

(齊藤)

▽当クラブの重鎮、都甲さんが退院直後に作品を書いて提出され、その気迫に圧倒されました。会員各位の『悠遊』に対する思いを改めて感じました。編集に携われてよかったですと喜んでいます。

(首藤)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第二十四号

一〇一七年四月十四日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

大越 浩平

印刷所 株式会社 每栄

東京都千代田区一ツ橋一―一（〒100-0001）

TEL ○三一―三一一一一〇四七九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

横浜市港北区大倉山五―三一―一八〇四（〒221-10037）

Eメール：rychshimura@r01.itiscm.net

クラブURL：<http://www.obpen.com>

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ（普通 1086096）

ペン・フォト句（後編）

ローカル線 スルメと石炭 別料金



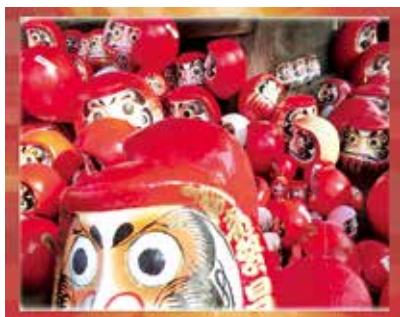
大月 和彦

おいなりの大株主とは
つゆ知らず



安藤 晃二

七転び 八起きひしめく OB会



池田 隆

雪晴れに遊び心や 小屋の外



清水 勝

トランプや世界に拡散 ゴーストファースト



大越 浩平

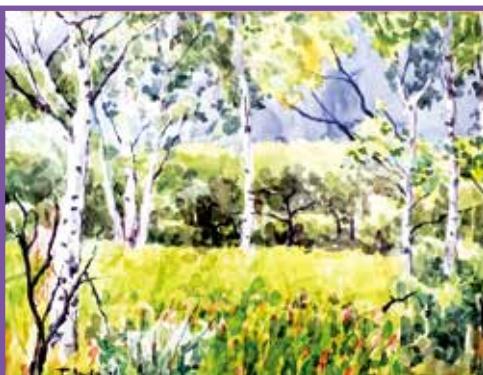
障子戸に ほんやりたまる 時の濁



新田 由紀子



塙田 實



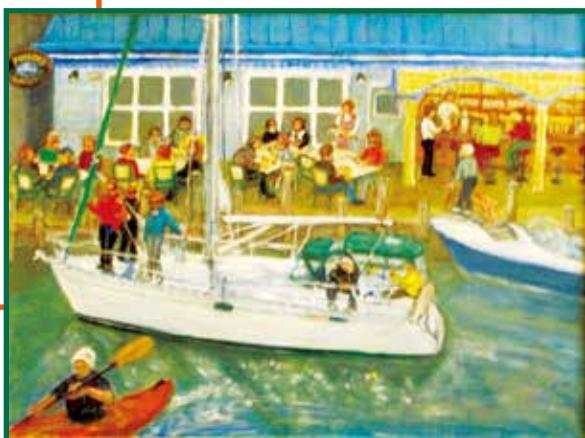
安藤 晃二



木村 敏美



首藤 静夫



福本 多佳子